
見つけてくれて、ありがとう（利知未シリーズ番外 3）

茅野 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見つけてくれて、ありがとう（利知未シリーズ番外 3）

【Nコード】

N1253E

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

利知未と倉真の結婚までの話。番外1『貴方のために』、番外2『二人で見る未来』に続く、3つ目のお話です。利知未は漸く、倉真からキチンとしたプロポーズを受け、二人の状態は次のステップへと進み始めます。それからの、出来事です。

〈婚約時代編〉

1 研修医一年・九月（前書き）

時代背景は、1998年ごろとなります。 （一部、文章が繰り返されてしまっていた事を発見し、慌てて修正をさせていただきました。大変失礼致しました 4月21日）

《婚約時代編》

1

研修医一年・九月

《婚約時代編》

1

研修医一年・九月

一

九月に入り始めの通常勤務日、四日・月曜日。

利知未は、久し振りに香と昼食を共にした。勿論、倉真に頼まれた保坂の恋人候補を探して貰うためだ。

ついでに、遅ればせながら、倉真との婚約報告をする。

「中々、同じ時間になっても、話す機会が無かったから。報告が遅くなってごめん」

何時もの店で、香に指輪を見せて、利知未が言った。

「コレが、エンゲージリングになる訳だ。前に、私が貸した指輪と似ていて良かったわ」

プラチナのシンプルなデザインで、小さなダイヤは、表面に埋め込まれている。立て爪の大きな目のダイヤリングでなかった事に、香もほっとした。

「ある人からは、コレを見てからかわれたけどね。ダイヤが小さいって言うて」

利知未はバツカスでの美由紀を思い出して、小さく笑った。

「この位で、普通じゃないの？ 数年前には給料の三か月分、何て言われていた時代も有るけど。この不景気な世の中で、一般人が七十万から百万円以上のリング何て土台、無理な話よね」

「あたしも、そう思う」

「デザインは、良いじゃない？ シンプルで、可愛くて。石も悪くないと思うわ。プラチナ純度も、そんなに低くは無いと思うけ

ど……」

「良いお店、知ってるんだよね、倉真。あたしも前、大学の友達から誕生日プレゼントにピアスねだられた事があるんだけど。その時、教えてくれたんだ。バイク便のバイトで、評判の良いってお店に荷物を届けた事があった、って言って」

「成る程ね。良いお店みたいね、このリングを見る限りでは。私にも今度、教えてくれる？」

「桜木町に在る小さな所だけど。今度、葉書、持ってくるよ」
香から指輪を返して貰い、何時も仕事中にしている様に、ネックレスのチェーンへ通し、身に着けた。

「何時も、そうやって持ってるの？」

「流石に仕事中は邪魔だからね。だけど、まだ箱にしまい込むのはイヤだなと思って」

照れた笑顔を見せる利知未を見て、香も微笑む。

「おめでとう。幸せそうじゃない？」

「…今、一番、幸せかもしれない」

「惚気？ 胸が痛いわね」

「ごめん」

素直に謝ってしまう。香は大袈裟に手を振って、自分に風を送る。

「もう秋だって言うのに、残暑が厳しい事だわ」

そう言って、呆れた笑顔を見せた。

「で、相談があったんだ」

「幸せ過ぎて不安とか言うのなら、耳が塞がつちやいそうね」

「じゃなくて、倉真の職場の先輩が彼女募集中なんだよね。誰か

良い相手、居ないかと思って」

「病棟のナースは？」

「あたしが今、倉真と時間ずれ捲くってるからな。ナースも、同じ事になると思うんだ。そうすると、上手く言った場合に気の毒かと思って。薬局か会計辺りでイイ子が居れば、と思った」

「それは、一理あるわね。倉真君の仕事仲間って言ったら、どう

しても時間は彼と同じって事だものね。　いいわよ、心当たり無い事もないし」

「好みは、特に言われて無いんだけど。　優しい子で歳が近ければ、問題ない見たいだよ。　背は、あたしよりも二、三センチ高い位だから、釣り合いの取れない子も少ないと思う」

「とは言っても、それなりに可愛い子の方が、いいわよね」

「多分ね」

「その人、いくつ？」

「倉真と同じだから、今年で二十四歳。　面倒見が良い、楽しい人かな」

飲み会での保坂を思い出して、その人となりを香に伝えた。

「考えておくわね。　後、二歳年上なら、私が会って見たいくらいね」

香はそう言って、くすりと笑っていた。

この頃、利知未は、倉真の前での自分が普通に外へ現れて始めている。

香との親しい付き合いも、三年目に入った。　今ではお互い、すっかり気を許し合っている。　随分、可愛らしくなったと感じていた。

香は柔軟に、利知未の少しずつの変化を受け入れてくれていた。

その日の夕食時間、倉真と話していて、利知未はふと思いつく。

「保坂さん、歳が近ければって、前後いくつくらいなら許容範囲になるんだろう？」

惣菜を口に運んだまま、利知未の箸が止まっている。

「二、三歳なら、良いんじゃないか？」

倉真は箸を止めずに、食事を続行しながらそう答えた。

「それは、上下で？　それとも、上・三歳以内、下・三歳以内って、

こと？」

「でも、良いんじゃないか？　それで言ったら二十一歳以上、二十七歳以下って事になるよな。　選り甲斐、有りそうじゃネーか」

「性格的には年上、年下、どっちが合うんだろっ？」

「……どっちでも、平気そうだけどな」

その質問には、一応、少し考えて答えた。

仮に相手が年上なら、少々、振り回されるタイプかも知れない。年下相手でも、自分の勉強を見てくれているあの面倒見の良さを見る限り、上手い事、行くかも知れない。　同い年なら同い年なりにやるだろう。

保坂の美点は面倒見の良い事と、対人面でのバランス感覚が良い事だ。　外見的には特に際立って善い男、……と言う訳でも無いが、悪い事は無い。

「香さんだと、年上過ぎるかな？」

「利知未より、二歳年上だって言っていたな。　平気じゃネーか？」

倉真は、余り深くは考えていない様子だ。

「ね、倉真。　真面目に考えて答えてくれる？」

「深く考え過ぎても、無駄じゃネーか？　結局は本人同士の問題だろ」

「そりゃ、そーだけど……。　倉真が話し、持って来たんだよ？」

「それなりに、考えてるぜ？」

そう言っつて、再び箸を動かした。

利知未は箸を持った手でテーブルに頬杖を付き、倉真の食いつぶりを呆れ顔で眺めてしまった。

「……ま、イーけど」

暫くして、軽く息を吐く。　呟いて、利知未も食事を再開した。

翌日も、香を誘って昼食を取った。

「昨日の話し、何だけど」

「まだ、声掛けては居ないわよ？」

「だと思ったから、慌てて今日も昼食に誘った」

「紹介、要らなくなったとか？」

聞かれて利知未は、言葉を選びながら話し出した。

「じゃ、なくて。……香さんは、三歳年下って許容範囲かな？　と思つて」

「私で手を打とうつて事？」

「手を打つと言うより、昨日、言っていたのを思い出したから。あと二歳年上なら会つて見たい位だ、って言つてたよね？」

利知未に言われて、香は少し考えた。

「そうね、一昨年、散々お見合いさせられたお陰で、会う事には大して抵抗もないんだけど」

「会うだけ、会つて見ないかな？」

「お勧めなの？　その、保坂さんって」

香も昨日の倉真と同様、余り深く考えてはいない様子だった。

『やっぱり、あたしが気負い込み過ぎだった、って事か』

内心では、倉真を少し見直してみた。

「人柄は、お勧めだと思うよ。昨夜、改めて考えてみたんだけど。香さんにも会つて見て貰つて、それで気が合うのなら、敢えて他の子、探さなくても良いのかな？　と、思つて。で、香さんと気が合わなくても、それならそれで他に気の合いそうな子、探し易くなるんじゃないかな？　とか」

「それも一理あるわね。そう言う事なら、良いわよ。ただ、その保坂さんが、三歳年上でも構わないかどうかって処よね」

「それは、大丈夫だろうって」

「相手が構わないなら、私も構わないけど」

「そう言ってくれるなら、日時決めて、また連絡します」

「土日なら、私は平気よ」

案外、気楽に引き受けてくれた。利知未は少しだけ、気が抜けてしまった。

その夜、倉真にまた、相談をした。

良い大人同士の事で、見合いと言う訳でもない。場所と時間を取り持つて、後は二人でデートでもして貰えば良いのでは無いか、と、話が纏まった。

土日なら平気と香が言っていた事を、倉真から保坂へ伝えて貰った。

翌日・水曜日の内には、保坂が自分で場所と時間を指定して来てくれた。

今週の木曜は利知未が休みだった。病院まで会いに行つて伝える程の事も無い。香には利知未から、電話で連絡を入れた。

香は深く考えずに、本当に気楽に保坂に会いに行った。

九日、土曜日。保坂に指定された店へ、時間通りに到着した。

保坂は少し早めに来て、待っていた。香を見て、恐らく彼女だろうと辺りをつけて、声を掛けて席から立ち上がり、会釈をする。

外見の印象は、お互いに悪くは無かった。立ち上がって一応、頭を下げた保坂に、香は取り敢えず点上げる事にした。

『人柄は、お勧めって言っていたけど。さて、どんな人かしら』
内心では審査を続けながら、香も会釈を返して微笑を見せる。

保坂は歳を聞いていたので、ほんの少しだけマイナス・スタートだ。それでも、現れた香は大人しげな身嗜みに引き比べて、やや華やかな印象をもった、そこそこ、綺麗な人だった。マイナスが一度にプラスへ転じた。

『館川のカミさんの、友達だつて言っていたよな』

その点で想像していたのは、恐らく確りした感性、感覚の持ち主だろうと、言う事だった。

そのアタックと態度に辟易させられている愛美より、余程、期待はしている。その期待は裏切られずに済みそうだと、先ずは安心した。

自己紹介をして、お茶を飲みながら会話の中で、その人となりをお互いに観察・審査している。香はそれでも気楽だ。

自分と気が合わなければ、他に気の合いそうな子を探して紹介する前提だ。その為にも彼の事は、成るべく良く知っておく必要はある。

一昨年、散々、見合いを経験して来たので、審査眼には自信がある。取り敢えず、今までの見合い相手よりは香の眼鏡に適いそうだった。

『この人なら、私が駄目でも、他に紹介するには問題は無さそうね』
点数、20点アップだ。好きでやっている現在の仕事に対して、真面目な姿勢も伺えた。

保坂は話をする内に、年齢の事は気にならなくなった。香の飾り気の無い雰囲気は、一緒に居て気楽な感じだ。ただし、やはりお姉さんタイプだとも思う。それでもマイナスからのスタートで、プラス35点から40点。

『問題解決の為には、返って丁度いいヒトなのか？』 お姉さんっぽいイメージは、あの手の問題も難なくクリアしてくれそうな、頼もしさでもある。

愛美よりも一つ年上になる。返って、丁度良いかも知れない。更にプラス10点・合計50点。65点以上になれば、付き合っ
て見たい相手と見て構わないだろう。

香からは、楽しい雰囲気の話にプラス10点。中々、気の付く処も見取れて更に10点。けれど趣味が合う合わないかの点で、マイナス5点・合計40点。香はそれでも懐が大きい。55点以上で、次の約束を取り付けても悪くは無いだろと思う。

そこで、第一ラウンド終了だ。喫茶店で四十五分。次のラウンドへ進む。

店を出て、ベターに映画と散歩を挟み、夕食の第4ラウンド目で、本日の試合終了予定だった。途中退場も可能である。

二人の結果は翌週、利知未と倉真へ報告予定だった。

保坂は一日、香と過ごして見て、合計60点の評価で終わった。

自分で定めた心の設定基準点数的には、やや、微妙な所ではある。

『けど、もう一度、会って見る価値はあるヒトだ』

そこで次の約束を、取り付けても良いかと考えた。

何よりも、事情は切羽詰っている。今回の話をした時、倉真は言っていた。

「利知未からは、一度会ってみて貰って気が合わないようなら、別の子も探す前提で紹介するって、伝えてくれと」

それで前後二歳の範囲を考えていた保坂も、一度会ってみる事に決めたのだった。もう一度会ってみたいと考えた理由としては。

確りとした彼女の印象に、自分の抱えている問題解決の為に一度いいと感じた部分が、大きく占めている。

香からの最終判断は、ギリギリ55点評価と言う所だ。

もし、相手から次の約束を言い出したら、もう一度くらい会ってあげても良いだろう。その程度だ。同時に。彼なら、他の子を紹介しても平気そうだと判断した。

自分の以前の恋人よりは余程、確りとしている印象を受けた。

『ま、アイツは、今思うとどうし様も無い奴だったと思うし』
よく、三年も付き合っていた物だと、改めて感心した。

当時の彼よりも年下の保坂でさえ、現実的な部分で確りと地に足を着けて生きている印象がある。つまり元彼に比べ、良い男は世の中ごまんと居るという事だ。

その発見だけでも、今回の利知未からの紹介も得る物は有ったと思う。

なので、別れ際に連絡先を聞かれた保坂と一応、電話番号だけは交換しておいた。付き合う、付き合わないは別として、人物としての保坂には及第点を上げる事にしたのだった。

二

翌週の月曜日、十一日。倉真は、保坂から報告を受けた。

「取り敢えず、もう一度、誘ってみようと思う」

「連絡先、聞いたンすか？」

「一応な。電話番号だけ、教えて貰ったよ」

「んじゃ、後は任せます。で、どうしても上手いコト行かないよ
うなら、また利知未に言っておくつすよ」

「それで良いよ。カミさんに宜しく礼、言っておいてくれよ」

「カミさんつーのは、何か、ヘンな感じだな」

「同じ様な物だろ？一緒に住んでるんだし」

「ま、そりゃ、そーつすけど。……で、あの店、行った事は、お互いに他言無用って事で」

「言う訳、無いだろ」

「……つすよね」

これで、倉真は一応、安心する事にした。

利知未は同日、月曜日。夜勤明けの朝、帰宅前に薬局へ寄って行った。

着替えを済ませ私服で香に声を掛ける。まだ朝一で診察へ来た患者も、薬を取りに来るには早過ぎる様な時間だ。待合のソファもガラガラである。

受付に腰掛けパソコンへ向かっている香へ、声を掛けた。

「ああ、瀬川先生。お早うございます、お疲れ様でした」

利知未の姿を認めて、香が職場での挨拶をする。それから何時も通りのフランクな様子に戻った。周りを少し気にして見て、短く言葉を交わした。

「お早うございます。…で、どうだった？」

「そーね、悪いヒトじゃ無いわね。けど、まだ結果を出すのは早過ぎて、感じかしら？」

「連絡先とか、交換したの？」

「電話番号だけはね。もう暫く彼の人となりを観察させて貰うわ。それからの方がどっちに転ぶにしても、対応が利き易いだろうから」

「流石、確りしてる。けど、取り敢えずは上手く行ってるって事で、いいのか」

「今の所はね。もし、やっぱり駄目だと思っても、彼なら別の子を紹介しても、悪くは無いと思うわよ？」

「了解。じゃ、後は、お任せします」

「暫く様子見てて頂戴ね」

患者が一人、薬局へ向かって来る。

それに気付いて利知未は、挨拶をしてその場を離れる事にした。

帰宅して、何時も通りに家事の一部をこなして仮眠を取った。

夜、倉真と夕食時間に、お互いの報告をした。

「じゃ、取り敢えず一安心だな」

「うん。 香さん、自分と合わないと思ったら薬局の若い子、紹介して置くつて。 さつき連絡、貰ったよ」

「そりゃ、有り難い。 飯、まだ有るよな？」

「有るよ。 お代わり注ぐよ」

飯茶碗を受け取って、山盛りにして倉真に渡した。

「相変わらず、良く食べるな」

感心して、その食いつぶりを眺めてしまった。 見ているだけで、自分は腹いっぱい気分になる。 お陰で利知未は、無理なく自然ダイエツトだ。

「美味しい物は、いくらでも入るからな」

倉真はそう言つて、またガツガツと食い始めた。

『良く、太らないモンだよ』 改めて、そう思った。

けれど、このまま年齢を重ねていった時には、少し恐ろしいかもしれない。 今から健康的にダイエツトを出来る料理のレシピも、考え始めた方が良くかも知れないと思った。

利知未は、翌日の火曜日、一日休みで、その後また遅出となる。

ここまでで特に何も無い時の、利知未の基本シフトが決まって来た。

三勤二休で、水曜が含まれる勤務は夜勤が入る事も無い。 大体、

月二回、火曜休みと日曜休み、土曜休みが入る。 隔週計算で木・

金の連休も、月に二回は入る。 火曜は毎回、夜勤明けからの半・

二連休状態だ。

倉真の隔週・土曜休みとは完全に入れ違っている。 八月の二回の連休は、本当に珍しい事だった。

利知未の生活サイクルが決まって来たお陰で、二人の生活は随分と、予定が組みやすくなってくれた。 家事の分担も、それに伴い自然と決まってくる。 倉真は利知未が夜勤の日は必ず、朝、洗濯

機を回して置いてくれる様になった。

月曜のゴミ出しも、今では倉真の担当だ。月に二日は、二人揃っての休日が出来た。

その週は、十五日の祝日を挟んで、十六日・土曜日が倉真の隔週出勤日だった。十三日からの三日間、利知未は遅出だ。帰宅は早くても十時半。

日によつては十二時近くなる。利知未は遅出の時も、出勤前に一品か二品は、夕食の準備をして出掛ける。

魚を焼いて貰いたい時や、食事前にもう一度、煮込んで欲しいような時は、メモに書き残してアパートを出る。

それ以外の時は、帰宅した倉真が勝手に電子レンジを使って温め直すか、火を入れて温め直すかして、一人で先に食事を済ます。倉真に自炊の経験があってくれた事に、利知未も倉真自信も、感謝していた。

もしも倉真が昔から変わらずに、何も出来ない儘の男であったのなら。この生活、利知未の負担が大き過ぎた事だろう。

その十五日、祝日の夜に、利知未は気付いてしまった。

その日も倉真は帰宅の遅い利知未を待ち、テキストを開いていた。夜十一時近くなり、利知未が帰宅してから遅い夕食に付き合っ、晩酌を始めた。利知未は先に夕食を済ませてから、風呂へ入った。

利知未は帰りが遅くなった日は、夕食は軽めに収めて倉真の晩酌にも付き合ってくれる。一人で飲むのは、流石に味気ないだろうと思うからだ。

「帰りが遅いと、寝るまでに時間が無いから、太っちゃいそうだな」

何気ない利知末の言葉に、倉真が言う。

「運動してから眠れば、良いんじゃないか？」

ニヤリと笑っている。その表情で、利知末は直ぐに倉真が言わんとしている事に気付く。

「スケベ。って言うか、倉真、本当に体力お化けみたいだね」

「イイ事じゃネーか。それでも色々と工夫をして、力、抜いてるんだぞ」

「そう言えば、鉄アレイとか増えたよね。あたしは、倉真は太らない工夫をしてくれているんだと思っていただけ」

「女じゃ有るまいし。アンマ、気にしないけどな」

「けど、太り過ぎは成人病の元だよ？ あたしが一緒に住んでるんだから、そんな事にならない様に気を付けてるつもりだけど。だけど、倉真の食欲見ると不安になって来ちゃうよね。年取ってからもその調子だったらどうしよう？ って」

「何もしなくても、年取りや自然と減ってくんじゃないのか？」

「だったら、運動選手の引退後、どう説明つけるの？ プロのアスリートじゃなくても、大学時代とか激しいスポーツをして来た人は運動量が減っても胃袋の大きさが変わらないから、つい必要以上に栄養取り過ぎて、どんどん太って行くんだって。藤澤先生が言うていただけだね」

利知末の薫陶を受けても、倉真は中々、変らない。ただ、知識だけは増えて行く。それはそれで、良いバランスの二人かも知れない。

「難しい事は、考えない事にしてるんだよ。今は資格の勉強だけで、脳みそギチギチだぜ」

「ま、いいけど。ずっと、あたしが管理してやるんだから」

「家族に医者があると、便利だよ」

「まだ、家族じゃないけどね」

「職場じゃ、お前の事、名前で呼ばれないんだよな」

「何て、呼ばれてるの？」

「カミさん、奥さん呼ばわりだよ。どうも言われ過ぎて、感覚が麻痺して来たみたいだ。すっかり結婚した気分だな」

軽くそんな事を言われて、利知未は少し照れ臭くなってしまった。

「赤くなってるのは、酒の所為か？」

倉真が意地悪く、ニヤリと笑って言った。

「風呂、入ってくる」

少し、昔の口調に戻った利知未を見て、照れ隠しだな、と感じる。「ごゆっくり」

そう言って倉真は、利知未が出て来るまで何時も通り、変わらない様子で晩酌を続けた。利知未が風呂を上がってから、寝室へ引込んだ。

その夜の倉真は、珍しかった。

何時もなら、必ず最低3度は利知未に挑んでいく。利知未から、3度目にNOを出される事も、間々ある。利知未の言葉通り、体力お化けと言えるかも知れない。それでも翌日、寝坊して仕事に遅刻する事も先ず無い。

倉真はすっかり利知未の弱い所を、把握している。巧妙に攻められ過ぎて、利知未は最近、1度目で半分以上の体力を消耗してしまふ。お陰でその後は、疲れ切って良く眠れる。

倉真は、利知未のアノ声が、実はかなり気に入っている。その声を求めて、今夜も巧妙に攻めていく……。

利知未も倉真の囁き声が、かなり好きだ。その声がスパイスに

なり、更に悦びを増していく。

一度新しい形を体験した覚えで、利知未の責め方のコツを、倉真は新しく知ってしまった。今夜も指だけではなく、舌や唇を使って、弱点を狙う。

それだけで利知未は、反応し疲れてしまいそうだ。

『シートまで、……濡れちゃいそう』 快感の中で、無意識に考える。

……明日の休日は、シートも交換して洗わないと、なくなっちゃいそう……。

倉真は夢中になって、利知未の身体に没頭している。お気に入りの声に調子が上がって行った。……つい、ウツカリしてしまった。

1度目のフィニッシュで、悪い癖を出して利知未に怒られてしまった。

暫くの脱力後。 倉真を少しだけ叱って、利知未は手洗い所へ立つ。

手洗い所で、利知未は考えた。

『倉真の癖、相変わらずだし……。ピルだけの避妊で、本当に平気なのかな?』

女性の体の中に設置するタイプの、避妊器具でも併用するべきかな? とも思う。この調子で続けて行ったら、冗談抜きで結婚前の子供が出来てしまいそうだ。一度、相談してみようかと考えた。

寝室へ戻って、タバコを吸っていた倉真の後ろから、そっと腕を回して抱き付いてやった。まだ足りない倉真の相手、第二ラウンドが始まる。

利知末が気付いてしまったのは、倉真の何気ない一言からだった。

二回戦目も終わり、身を横たえて倉真が言った。

「やり切った」

「今日は、もう良いの……？」

身体をピタリと倉真にくっ付けて、利知末が聞いた。

「そんな事を言つと、もう1回やるぞ？」

ニヤリとする倉真に、利知末は軽く手を上げて白旗を揚げる。

「降参」

「やつぱ、お前が最高」

倉真が、つい漏らした本音に、利知末の勘が反応する。

「やつぱ、って、どう言う意味……？」

一瞬だけ、倉真の目が反応した。直ぐに何事も無かった顔に戻る。

「深い意味なんか、ネーよ」

「……そう？」

既に、利知末の感覚はフル回転している。昔からの、二人の関係を考えた時、利知末の洞察力に、倉真が勝てる筈は無かった。

利知末は、倉真の瞳が一瞬反応した、挙動不審な光を見逃さなかった。

倉真は、言いたくない事を口に上せる事はしない。黙りを決め込めば、貝の様に口を塞ぐ。嘘を付く事になれば、徹底的に貫き通す。

長年、喧嘩上等人生を歩んで来た名残だ。張ったりは上手かった。

……けれど、利知末には弱い。

今夜のようにポロリと本音が出て来た結果、利知末に無言の追求を受け、誤魔化し切るのは不可能かも知れない。

倉真には、弱点がある。利知末の笑顔と、涙。

それでも頑張る倉真に対して、利知未は必殺技を繰り出す事にした。

「……嘘じゃないから、良いか？」 瞳を潤ませ、涙を流す、数秒前。

涙を武器にするのは、確かに卑怯かもしれないが、その気持ちの裏側が本当の気持ちからなら、許されるだろう。

倉真の事について、不安な事を思う時。 自然と利知未の瞳から、涙が流れ出す。 ……それは倉真と、こう言う関係になってからの、利知未の学習だ。

じつと黙って見つめられて、その瞳が曇り出した。

『……ヤバイ、泣き出しそうだ』

利知未が泣くのは構わないが、自分が泣かせるのは、駄目なのだ。降参する事にした。

「……悪かった」

「何時……？」

「この前、お前が夜勤の時。先輩と飲みに行つて、…店に入った保坂の名前だけは、出さない事にした。 どうせ直ぐにバレるだろうが、男の友情・職場の義理だ。先輩だって、保坂一人ではないのだ。」

「シロート相手じゃ、ないのね？」

「そりゃ、勿論！」

「……そーゆーコトか」

利知未は呟いて、軽く溜息を付いた。

「じゃあ、かなり酒、入ってたんだ？」

それは無かったが、そう言う事にして頷いた。

「……面目ない！」

認めて謝ってしまえば、戦術は180度変わる。

倉真はベッドの上に正座して、土下座をした。利知未は頭の向こうにチラリと見える、倉真の分身に注目した。……あーあ、ちっちゃく成っちゃって。と、思う。

『そこが、一番、正直だよね』

「随分、反省しているようだし。……仕方ないな」

「マジ、反省してます!」

頭を下げたまま、倉真は肯定した。その潔さに、利知未は譲渡案を出す。

「一つだけ、答えて」

「何なりと」

「…ちゃんと、コンドーム使った?」

目を上げて、倉真は利知未の目を見て答えた。

「使いました」

その目をじつと見て、利知未が言う。

「……なら、今回は勘弁してあげる。…でも、成るべくもつ、しないで」

「判った。二度と致しません。本当に悪かった」

倉真はほっとして、もう一度、確りと頭を下げた。

利知未からのお許しを貰い、倉真はやっと落ち着いて眠る事が出来た。

いつの間にか寝息を立て始めた倉真の顔を見て、利知未は色々な事を思う。エンゲージリングを貰ってから、まだ一月半だ。

何時か、ベッドで将来の約束を交わした時は、嬉しいと感じながらも、心の奥からは危険信号が出ていた。

それは微かな信号だったが、結婚は真面目な話し。そう言う事をした後の言葉は、果たして心から信じて良い種類のものだろうか? その時の雰囲気と勢いに流されて、口走る事だつて有るかも知れない。

だから、あの時。始めて、その言葉を倉真が口にした夜。利知未は頷きながらも、心の奥では不安を感じていた。

始めて心の底から彼の子供なら欲しいと感じられたのは、テントの中で抱き合った、あの時だ。リングと言う約束の象徴を受け取って、漸く安心してその思いに至る事が出来たと思う。

けれど、出産・子育てについては、利知未には理想がある。

自分の母親が自分達兄弟を産んで、その後。どんな母親だったかと言う問題だ。仕事に忙しくて、子供の事は構ってもくれない母親だった。

その裏事情として、父親の無職時代が関係してはいる。稼ぎ手の父が、長年勤めた会社の倒産で稼げなくなってしまった。

その分の埋め合わせも勿論あった事だ。利知未の父は、職場運に恵まれない男だった。やっと見つけた再就職先も、直ぐに潰れてしまった。

その頃、母は育児休暇後に復帰した仕事で、頭角を現してしまっただ。

ニューヨーク支局への、栄転の話が転がり込んだ。

仕事自体も好きな人だった。単身、ニューヨークへ渡る事を決めた母親と、父は何度も話し合ったらしい。

その頃、利知未はまだ二歳か三歳だ。大人の事情など全く判らなかつた。八歳年上の長兄、裕一でさえ、まだ十歳。優は小学校に上がるか上がらないかの頃だ。

両親の話し合いは、お互いの主張が完全に食い違った儘、結局は離婚となってしまうた。

父親の、二度目の無職時代の事だ。家庭裁判所は、子供の養育権を母親に委ねる他、無かつた。

大人になって、その頃の事情を知ってから、幼い子供時代に感

じていた寂しさは、利知未のトラウマとなってしまうた。

母を許せない思いは、そうそう簡単に消えてくれる物ではない。
その分、裕一に対する親愛の情も深かったと言える。

自分の過去を思う時、自分は、あの母親のようににはなりたくないと感じてしまう。 栄転の話が来た時、彼女は何故、家族よりも仕事を選んだのか？

美由紀のように、女手一つで二人の息子を立派に育て上げた母親もいるのだ。 引き比べて、やはり母の取った選択には、領けないものがある。

『妊娠、出産、子育ては、きつと楽しい事ばかりじゃないとは思っけど……』

辛い事ばかりでも、無い筈だと思う。

ただ、子供を産んだら、その子を愛しみ育てるのは両親の務めだ。その責任を果たせそうも無いうちは、まだ子供を望むのは、早過ぎると思う。

女の体は、新しい生命を生み出すために作られた物だと、利知未は思う。

……だから、この人の子供が欲しいと思えるパートナーに巡り会ったら、やっぱり自然に任せて出来るのを待つのが、一番良いのだろう。

親としての責任を、キッチリと果たす事が出来るのなら。

利知未の本音で、医者として多くの人を助けたいと言う思いも勿論ある。 けれど、それ以上に、自分が育って来た様な、あんな寂しい思いは、自分達の子供にだけはさせたくないと感じている。

何時か倉真の夢を実現させてあげたいのも、本音だ。

『まだ、お互いの親にも紹介してない訳だし、お金も掛かるし……』

やる事は、一杯だ。何にしても、先ずは経済力だろう。

今月から、利知未は二人の将来貯金も始めている。倉真の協力で、当初の計画よりはもう二万ほど多くなった。

弁当も作り始めた。利知未の勤務に余裕がある時は、必ず作る事にした。

ふと、時計を見て、午前二時を回ることに気付く。

「もう、こんな時間か……」 呟いて、欠伸をする。

倉真の浮気については、考え方を少し改めた。

アダム・マスターと、奥さんの話もある。男の性欲は、女に比べて御し難い所も多いのだろう。

相手がクローツで、変な病気を移されて来たり、子供を作つて来たりしないのなら、多少は目を瞑る他、無いのかも知れない。

もしも結婚して、子供までいる状態でされたら、流石に許せないだろうとも思う。けれど、まだ結婚前だ。

自分の仕事を考え合わせた時、倉真の旺盛過ぎる精力は、中々、収め所が無いのも事実だろうと思う。

『その内、歳を取って、精力が落ちて来たら……。心配する事も無くなるのかな?』

再び欠伸をして、そう思う。

『明日は多分、倉真が早起きして、朝ご飯、作ってくれるんじゃないかな』

以前の、浮気がバレた時の、朝のように……。

考えるのを止めて、眠る事にした。

翌朝、目覚まし時計の音で利知未は目を覚ました。倉真が慌ててベルを止めた様子を、薄目を開けてみて狸寝入りを決め込んだ。

倉真は、そつとベッドを降りてキッチンへと出て行った。

利知未は目を開けて、くすりと笑ってしまった。

「さて、どんな朝食、作ってくれるのかな」 呟いて、欠伸をして、二度寝に入る事にした。

朝食の準備を終えて、倉真が改めて利知未を起こしに来た。

目覚めのキスをして、倉真が言う。

「お早う。 飯、出来てる」

何時も以上に優しい態度だ。 利知未は、許してやる事にした。それでも、釘だけは刺しておこうと考える。

「おはよ、反省してるね」

「当たり前だ。 俺は、利知未に捨てられないように必死なんだよ」

「じゃ、もう1回、約束して。 二度と、そーゆー事しないって」

半身起き出して、掛け布団を胸の上まで引き上げる。 まだ昨夜のまま、衣服を身に着けてはいなかった。

倉真は、右手を宣誓するように軽く上げて、改めて誓う。

「偉大なる母性に誓って、二度と、浮気は致しません」

利知未は倉真と同じ様に、片手を倉真に向けて上げる。

「では、その証を示しなさい」

目を閉じた。 倉真の手が、利知未の手に合わされた。 キスを

交わす。

「……ごめん」

唇を離して、倉真が利知未の耳元で囁いた。

『ごめん』の言葉に、利知未は本気で、倉真を許してやる事に決めた。

『ごめんは、特別な言葉だから……』

「……いいよ。 許して、上げる」

利知未も囁き返して、倉真の耳の横へキスをした。

倉真は、利知未を抱しめた。

「ほつとした。 ……飯、食おうぜ？ 服、早く着て来いよ」

利知未の身体を開放して、先にキッチンへ出て行った。

倉真が消えた扉を見て、利知未はベッドから滑り降りた。

服を着ながら、明日の日曜、今年の誕生日プレゼントに貰ったジヤケットを着て、久し振りに二人でツーリングへ行きたいと思った。
『晴れば、いいな』

Tシャツの首から出て来た利知未の表情は、柔らかい笑顔だった。

三

その日曜。 香は保坂に誘われて、二度目のデートへ赴いた。

「今日は、おれが好きな事で悪いんだけど」 そう言つて、ドライブを誘つて来た。

保坂はこの一週間で、取り敢えず香と暫く付き合ってみようかと、考え始めていた。

『年上つて言つても、三歳だし……。 五歳や十歳の歳の差が有る訳じゃなし』

話も合わない事は無い。 小学生時代の香が憧れていたアイドルは、自分が小学校へ上がった頃にも活躍していた。 今では良いマイホームパパとなり、生命保険や食品のコマーシャルでも、活躍している。 流行の歌も同じだ。 記憶にある範囲で、判らない事は無い。

カルチャーショックを受けるほどの、歳の差では無さそうだ。

後2、3回、会つて見て、その内、愛美には彼女が出来たとでも言ってみようかと考えた。 客に対するサービスだったのなら、そこでハッキリする。

香は、弟と出掛けている様な物だろう。香が男に求めるものは、真面目さと誠実さ。その点では、保坂も悪いことは無い。

保坂が誘って来る内は、何度か会って見ても良いだろう。

『とは言っても、頼り甲斐が有るかどうかなと言ったら……』その点では、やや物足りないかも知れない。だから、弟と出掛けている様な気分なのだ。

それでも保坂は、中々、如才なく立ち回る。人付き合いは良いタイプなのだろう。

『人柄はお勧め、ね。……確かに』

利知未の審査眼も、中々どうして、良い所を突いていると思う。

保坂の誘いに応じながら、頭の中では、次の紹介相手も考えて見ることにした。

利知未と倉真は、その日、久しぶりにツーリングへ出掛けた。

今年の誕生日プレゼントで貰ったレディースのジャケットを着て、始めてのツーリングだ。

この格好なら、休憩場所で倉真と腕を組んで歩いていようが、肩を抱かれていようが、怪しげな視線だけは集めなくて済む。

ただし、長身カッパルで美人を連れた男には、嫉妬や羨望の眼差しが集まって来てしまう。倉真は上機嫌だ。

「何、ニヤけてんの？」

肩を抱かれて、呑気に海を眺めながら、利知未が倉真に聞く。

「イイ女を連れた男は、ニヤけるもんだ」

ニヤリとされて、少し照れてしまう。

「……倉真、そう言うこと、昔よりも良く言うようになったよな」

「素直な気持ち伝えるには、必要だって教えられたんだよ」

言っていて正直、照れ臭いのは確かだ。だから、つい、からかう

ような口調になってしまふ。

それでも、そう言う事を言われた時の利知未の照れた顔や、嬉しそうな顔は、見ていて楽しいとも思う。

寄り添って、倉真の肩に自分の頭を凭れさせて、幸せを感じる。

「……けど、やっぱりチョット、恥ずかしいな」

「俺は、鼻が高いけどな？」

益々、利知未を照れさせて、倉真は楽しそうに笑った。

「今週が休みって事は、来週は夜勤だな」

「そうなるね、予定は組み易くなったよ」

「だな」

そうなって来ると、そろそろ真面目に、利知未を両親に紹介する機会も探して行かなければならない。

けれど、その事については、倉真はまだ決心し切れていない。

『先ずは親父と和解しなけりゃ、どうしようもネーよな……』　そのための方法は二つ。

一つは、倉真が折れて実家の後を継ぐこと。そして、もう一つは親父とトコトン話し合って、自分の事を認めさせた上で、改めて利知未を紹介する。自分の夢についても、納得させなければならぬ。

『もうチョイ、時間が掛かりそうだな』

ふと真面目な顔になった倉真を、利知未は首を傾げて見つめる。

「どうしたの？」

「何でもネーよ」

利知未の肩をそっと開放して、倉真はタバコを銜え、火を着けた。

その翌週、利知未が夜勤の夜。　倉真は少し、我慢が出来ないよ

うな気分に襲われた。　倉真の精力の旺盛さは、今更、言う事でもない。

『マジ、ヤバイな。　小遣いも最近、減らしたしな』　何より、利知未と約束をしてしまった。

『二度と、浮気しないって、誓ったばかりだ』

実を言えば、ここまでの間、利知未が夜勤の夜。　倉真は何度が昔から鼻屑にしている店へ、出掛けていた。　仕方が無いのだ。　利知未が忙しくて、相手の出来ない日も勿論ある。

利知未に急な残業が入ってしまう事も、偶にはある。　救急からのヘルプがそれだ。　そんな夜は、利知未も疲れてしまう。　倉真の相手をする程の体力も残ってはいない。　今週は、少し事故が多かった。

朝となく、昼となく、夜と無く。　事故後の処置は余程の事が無い限り、先輩方に比べて、担当患者も少ない利知未が、借り出される結果になる。

利知未は益々、処置速度もその的確さも、身に成って来てしまった。　相変わらず救急からは、こちらへ来ないかと誘われ続けている。

それで、今週。　倉真は利知未に、余り相手をして貰っていないかった。

『しかし、約束もあるし……』　考えて、準一を思い出す。

『ジュンでも呼び出して、酒でも飲むか？』　思い付いたら、即実行だ。　早速、連絡を入れてみた。

倉真からの連絡を受けて、準一は直ぐに部屋を出た。　三十分後、今日も酒を仕入れて、準一がアパートの呼び鈴を鳴らす。
「バンワ。　今日は、利知未さんは居ないのか？」

「いネーよ、暇潰しだ。お前、明日の仕事は？」

「連休だよ。はい、土産」

今日は冷えた缶ビールを6本、ビニール袋に入れて、持って来た。

「サンキュ。上げれよ」

「お邪魔」

準一はこの前と同じ様に、さっさとリビングへ通り、一人掛けのソファに陣取った。

「利知未さんの仕事は、カレンダー関係無しなんだな」

「そりゃ、そうだろ。開業医師ならともかく、大勢の入院患者を抱えた大学病院だぞ？」

準一からの土産の、プルトップを引き上げる。

「今日は、冷えたの持って来たんだな」

「この前、言われたからね、学習してみた。足りなくなったら、買い足しに行けばいいし。近所にコンビニ在ったよね」

「おお、住み易い事この上ネーよ。スーパーも近いしな」

「駅からも、そう遠くないし。今度は、こっちの物件探してみよう」

「また引越す気か？」

「うんにゃ、単なる感想」

話しながら、準一もビールのプルトップを引き上げ、飲み出した。

深い事を考えずに適当な事を言うのは、昔から変わらない。それでも気楽な飲み仲間だ。

これからも、チョコチョコ呼び出してやろうかと倉真は思う。

「摘み、買って来るか？」

「ビール、無くなってからでいいよ」

「漬物くらいは、あるかも知れないな」

呟いて、倉真はキッチンへと向かった。

冷蔵庫を開けて、チーズと粗引きウィンナーを一袋見付けて、軽くボイルする事にした。マスタードも見つける。

「こんなモンで、構わネーか」
適当な皿に載せて、リビングへ戻った。

再び酒盛りを始め、倉真は準一に仕事の話を聞いて見た。

「お前、真面目に働いてるのか？」

「面白れーよ？ 仕事」

「飽きずに、続けてるんだな」

「毎回、撮影する物が違うからね。飽きる事はないな」

「カメラ、構えてるのか？」

「んな訳ネーじゃん。まだ、始めて半年経ってないし、雑用ばかりだよ。けど、面白い。モデルのお姉さんは美人だし、動物や子供を撮ってる時はシツチャカメツチャカだし、食い物撮る時は美味そうだし、飽きないよ。マジ、こんな面白い仕事、あるとは思わなかった」

利知未が、『向いてるみたいよ』と、言っていた事を思い出した。
「そーか。それなら、平気そうだな」

「直ぐに辞めると、思ってたっしょ？ 自分でも、こんなに続けとは思わなかった」

準一は昔通り、ヘラリと笑ってそう言った。

「今日は、樹絵ちゃんは来てなかったのか？」

カレンダー通りなら、連休だ。思い付いて、倉真が聞く。

「先週、来たからね。今度は、来月かな」

「連休の度、泊まりに来てるんじゃないのか？」

「今回は、学校の友達と旅行へ行くって言ってたな。で、先週の週末に来たんだ。来月は連休がある訳じゃないから、金曜の夜から来ると思うけど」

「よく、持つてるな」

自分と利知未が中々、会えなかった、あの一年を振り返って倉真は思う。

「仕事、始めたばかりだしな。あっと言う間だったな、半年間、

昔から、毎週会っていたって訳でもないし」

そう言われれば自分と利知未は、関係が落ち着く前の方が良く会っていたと思う。それだから、あの一年が長く感じてしまったのかも知れない。

「ビール、無くなったよ。買って来ようか」

「そうだな。ジャンケンでも、するか？」

「バツカスで、良くやってたよな。久し振りに、買出し賭けてみる？」

利知未が、大学受験に忙しかった頃。由香子と始めて会った頃の事を、思い出した。あの時は、何時も宏治が勝っていた。和泉が負け率ナンバー1だった。準一と倉真は、何時も良い勝負をしていた。

今日の勝負は、準一の勝ちだった。

倉真は買出しに出て、その夜、深夜過ぎまで飲み続けた。準一

は、倉真よりも酒に弱い。二時前にはダウンだ。毛布を持って

来て、ソファに眠り込んだ準一に、掛けてやった。

それから、更に一時間ほど一人で飲み続けた。三時前には、倉

真も寝室へ引っ込んだ。

翌朝、帰宅した利知未は、駐輪所に準一のバイクと、玄関に靴を発見した。

「ジュン、遊びに来てたんだ」

呟いて、それなら倉真もまだ起きていないか、夜通し飲んでいたかのどちらかだろうと推理する。

キッチンを抜けて、リビングへ入った。準一は、すっかり暴睡中だった。時計は九時を回っている。

「あーあ、散らけちゃって」

テーブルの上に転がる、ビールの空き缶を呆れて眺めた。

食器を片付け、空き缶を拾い集める。その音に、準一が目覚めます。

「あ、利知未さん、お帰りー」

目を擦って、気の抜けた笑顔を見せる。

「おはよ。はい、後片付け」

やり掛けのゴミ袋を準一に渡して、ニコリとしてやった。

準一は素直に片付けを手伝ってくれた。利知未はご褒美に、朝食を食べさせてやる事にした。

「朝ご飯、入る？」

「腹、減ってまっす！」

「そ。じゃ、三人分作るから、倉真、起こして来てよ」

「ラジャー！」

言われた通りに、寝室へ向かって、倉真を叩き起こしてやった。

ダイニングへパソコンデスクの椅子を持って来て、三人で朝食を取った。

倉真ほどではないが、準一も良く食べた。男が二人居れば米の消費量も半端ではない。五号炊いた飯は、半分以上、無くなってしまった。

「利知未さん、今夜も仕事？」

「そうだよ。だから、今度はあたしが仮眠、取らせて貰うから。

倉真と何処か、遊びにでも行ってくれば？」

「そうだな。久し振りに和尚でも、からかいに行くか？」

「賛成！」

準一と倉真は飯の後、懐かしの街へ行って見る事にした。

十時過ぎ、玄関で利知未が二人を見送る。

「和尚に宜しく」

「おお、夕方までには、戻る」

「ンじゃ、ご馳走様でした！」

「どう致しまして。 ジュンは帰り、気を付けて。 倉真、行ったらっしやい」

利知未に笑顔で送られて、二人は出掛けて行った。

二人を見送ってから、利知未は欠伸をする。

「今日は、ゆっくり眠らせて貰おう……」

呟いて、寝室へ引込んだ。

少林寺の少年修行者は、和泉の事を慕っている。 兄貴分として、学校での悩み事なども相談をしてくる。 師範の住職も和泉の良き兄弟子振りを見て、目を細めている。

そんな中、和泉は少年クラスの師範代を手伝いながら、自分も改めて修行を始めていた。 師範を目指して、本人も特訓中だ。

午前中、朝から手伝いをして、倉真達が到着した頃には一息ついている時間だった。 久し振りの仲間の訪れを、嬉しそうに迎えてくれた。

「お前、暫く見ないうちに、またガタイ良くなったんじゃネーか？」
始めに、倉真が目丸くして和泉に言った。

「お前こそ、鍛えてるのか？ 腕の筋肉、また付いたみたいだな」

倉真の腕を見て、和泉も目を丸くしていた。

「力抜きにトレーニングしてたら、コーなった」

「力抜き、ね……」

「倉真は旺盛過ぎて、利知未さんも手を焼いてるらしい」

「準一が要らない情報を落とした。 直ぐに、倉真から叩かれてしまった。」

「お前は。 余計な事ばっか、言ってるじゃネーよ」

「イテ！ 倉真、力つき過ぎだよな。 コブになったら、どうすんだ？！」

相変わらずの二人を見て、和泉は楽しそうに笑っていた。

和泉は午前中、もう少し修行を手伝うと言っていた。 昼飯を久し振りにアダムで食おうかと約束をして、二人は一足先に店へ向かった。

開店直後のアダムへ到着した。 マスターは変わらない笑顔で、二人を迎える。

「また、お前だけか。 利知未はどうしてる？」

カウンター席へ腰掛けた倉真に向かって、呆れた顔を見せた。

「利知未は昨夜、夜勤だったんで。 今、寝てるっすよ」

「昼飯、食いに来た」

準一も二カりと笑って、マスターに言った。

「準一は、先週も樹絵と来たな」

「今日は振られちゃったから、倉真の相手してやってんだ」

「相手して、やってるってのは、どー言う言い草だ？」

「和尚も後から来るんだ。 先に、コーラ宜しく」

倉真のぼやきは聞かない振りをして、さっさと注文をしてしまう。

「お前は、どうする？」

「何時もので、頼んます」

「畏まりました」

伝票を記入して、珈琲を淹れ始めた。 合間に準一のオーダーにも応える。

一時間程を、マスターと話して時間潰しだ。 和泉が来る頃には忙しくなる。 それからボックス席へ移動する事にした。

和泉が到着してから、昼飯を食いながら由香子との事を聞いてみた。

「取り敢えず、一度は向こうで生活をして見たいと思ってるんだがな。牧場の手伝いをしながら、少年達に少林寺でも教えたいと思ってるんだ」

「で、今は師範目指して訓練中って、事か？」

「そうなる。牧場関係で役立つ資格も、二、三、取得したよ」

「真面目だな」

「お前も、真面目にやっているんだろう？ 仕事は、楽しいのか？」

「楽しいとか、そう言う次元じゃネーけどな。好きな事だ、遣り

甲斐はあるぜ？」

「オレも真面目に仕事、続けてるぞ」

二人の会話に、準一が割り込む。それまで食う事に集中していた。「それが驚きだな。俺は、お前は直ぐに飽きて、別の仕事を始めるかなと思ってたよ」

幼馴染で、弟分の準一だ。誰よりも、その性格は理解しているつもりだ。

「自分でもびつくりだ」

「マジ、空から槍でも降ってきそうだな」

「ヘルメットでも、買っておいた方が良さそうだな」

倉真の突っ込みに、和泉も笑いながら、そう言っていた。

由香子とは、真面目に将来まで考えているとも言っていた。

「だが、まだ問題は山積みだ。二、三年は先になるかもしれない。お前達の方が、結婚は早いと思うぞ」

別れ際、倉真にそうも漏らしていた。

午後は自分の修行があると言う。準一と二人、適当にバイクを走らせて、利知未との約束通り夕方には帰宅した。

準一は、どうせ通り道だからと言って、一緒にアパートへ押し掛けた。

ちゃっかり、利知未が用意していた夕飯まで、ご馳走になってから

帰宅したのだった。

2 研修医一年・十月

2 研修医一年・十月

—

月頭の日曜日、利知未と倉真は、のんびりとした休日を過ごした。七月末の鳩ノ巣溪谷での写真が、先月の末に送られて来ていた。お礼の手紙を利知未が書いて、二人で買い物ついでにポストへ投函する。

「手紙の裏書も、館川なのか？」

「だって、夫婦だって言っちゃったし。 どうせ、その内、嘘じゃ無くなるんだし、イイんじゃない？」

夫婦だと自己紹介をした日の夜、改めてプロポーズをされた事になる。

「二年も先の話になるけどな」

「婚約解消、されないように頑張らないとね」

「それは、俺の台詞だろ」

「あたしにだって、不安はあるんだよ？ もしも、倉真のご両親から反対されたら、どうし様も無いでしょ」

「そりゃ、無いだろ。 こんな親不孝者はノシ付けてお渡ししますって、喜ばれるだけだ」

「そうかな。 けど、親不孝なら、あたしも同じなんだろうとは思うけど」

「お前の所は、親不幸のし様も無かったんじゃないか。 元々、離れて暮らしていたんだ」

「それは、ね。 …… けど、結婚って言うのならリスクになる可能性だって、ある事だとは思っし」

その点は本当に心配している。 不安な表情になってしまった。「もし反対されたとしても、トコトン話し合って納得させる」

言い切った倉真の言葉は、嬉しかった。

「ありがと。 倉真の事、信じてるよ」

微笑を見せて、手を伸ばした。 倉真の左手を握り、手を繋いで歩き出す。 倉真は利知未の手を、確りと握り返してくれた。

木、金の連休を使って、利知未は空いた時間、珍しく読書をした。数日前に送られて来た、冴吏のハードカバー本・第二段だ。それで、少し機嫌が悪くなった。 モデルが問題だ。本そのものは、一日で読み終えてしまった。

その日、帰宅した倉真は、リビングのテーブル上に置いてあった本を見付け、夕食後ふと手に取り、読み始めてしまった。 利知未は面白くない。

「倉真、勉強は？」

不機嫌な利知未が、声を掛けた。

「ん？ ああ、今日は息抜きだ」

本から目を上げずに、倉真が言う。 その様子を見て、利知未が呆れた息を付く。

「それ、そんなに面白い……？」

「読み易いな」

「……そ」

短く返事をして、利知未がキッチンへ立つ。

「あたしは晩酌でもしようつと」

「おお」

全く気がこちらへ向いてくれない。

倉真が本を手にしている事自体、珍しい。 少々、ムツともするが、活字離れ代表選手のような倉真が読書に勤しむのは、悪い事では無い。 諦めて、利知未は一人で、さっさと晩酌を始めた。

利知未が酒を飲んでいる隣で、倉真の読書は続く。 暫らくして、

呟いた。

「成る程ね……」

「何が成る程？」

「いや、この本。下宿の冴更ちゃんだったか？書いたの」

「そーだよ。……あたしも読んだけど」

面白くない気持ちのまま、利知未が言う。

「この、隆史つてのがさ、」

「あたしがモデルと言う、噂のね」

その点が気に入らないのだ。利知未は、タバコへ火を着けた。

『何か、機嫌ワリーな。……触らぬ神に、祟りなしか？』

倉真は、そのまま読書を続行する事にした。

まるで昔の利知未並みの不良少年が、主人公だった。ヒロインを助ける為に、敵対しているグループへ一人、乗り込んで行く。

喧嘩も強い、美少年。趣味はバイク。群れる事は好まない、ストイックなヒーローだ。……どうしても、利知未の昔と重なる。

最近、随分と可愛く、綺麗になった利知未を見て、倉真は確かに嬉しいとは感じている。けれど、その反面。良く昔の利知未の事も、夢に見るようになって来ていた。無意識での欲求を満たすのには、丁度良い内容だった。

普段は活字を追っていると眠くなってしまう倉真も、つい夢中になつて読んでしまう。利知未は益々、面白くない。

「結構、面白れーじゃネーか」

「男子中・高校生には、特に人気があるみたいだね」

倉真の呟きに、利知未が言い捨てる。また、新しいタバコへ手を伸ばす。

『俺の文学知識は、中学、高校生並みって事か？』

不機嫌な利知未の言葉に、倉真は少しだけシヨックを受けた。

『……ま、そんなモンか』
けれど直ぐに納得して、続きを読み始める。

中盤の盛り上がりのシーンで、喧嘩シーンも中々の迫力だ。ヒロインとの恋愛も進展して行く。全六章構成の第四章まで一気に読んで、再び呟く。

「格好いいじゃネーか」

「そー言う問題？」

腕を組んだまま、タバコの煙を吐き出している。本数が、増えていた。

「読者アンケート、人気一位だって？」

「そーらしーね」

「良い事だ」

「今、真ん中だね。その辺りは取り敢えず置いて、ソコ以外のシーン」

「俺達が昔やった事と、大して変わらねーな」

「そりゃ、そーだけど」

「仲間内以外にや、気付かれネーよ」

「でも、知り合いにはバレるよ」

「自業自得ってんじゃないか？」

「……そーだけど」

かなり、機嫌は良くない。倉真は、こっそりと首を竦めた。

電話が鳴り、利知未が受話器を取る。

始めは、それなりに声を作っていた。電話の相手が知れた途端、利知未の声と口調が変わる。

「冴吏か？ お前、良く電話なんか、して来れたなあ……」

少し、恐ろしげな声だ。倉真は益々、首を竦め、心の中だけで呟いた。

『……コワ』

「利知未、読んでくれた？ 中々、面白く書けていると思うんだけど。 お気に召さない？」

「お気に召すか？！ ったく。 今は真面目にやってんだからな、勘弁してくれよな」

「売れ行きが随分、良くって。 出版社で、お祝いのパーティーをしてくれる運びとなりました。 感謝。 ……で、利知未、招待状送るから宜しくね」

「何であたしが？！」

「隆史のモデルを見たいと、編集長のお言葉。 対談の予定もあります」

「対談？ どうして？ 何が楽しくて？ それが何か良い結果に繋がるのか？」

「ま、いいじゃない。 続編、書く事になったから、その回の特集でページを戴きました。 ビジネスですので、宜しくね。 その内、連絡行きます」

「宜しくね、って…、あ、こら！ 切るな！ まだ、話の途中だろーが？！」

「たく！ と、小さく叫んで、利知未は受話器を乱暴に置いた。

倉真は、耳を塞いでおく事にした。 突っ込んだら、面倒な事に成りそうだ。

「寝るかな」

呟いて、本を持って立ち上がる。

「ン？ ああ、お休み…って、チョット待った！」

利知未は、すっかり昔に戻っている。 その事自体は面白い。

「何だ？」

「それ、まだ読むの？」

気を取り直して、最近の様子を少しだけ取り戻す。

「結構、面白いぜ」

「……、そ。……別に、イーけど」

余り良さそうではなかったが、倉真は気にしないことにした。

「やすみ」

「お休み」

利知未はソファに戻って、再びタバコへ火を着けた。ご機嫌斜めのままだ。

倉真はさっさと寝室へ引っ込んで、ベッドの上で続きを読む事にした。

『偶には、読書の秋つてのも、悪くはネーな』

今夜中に読み切って、明日は利知未の前で、この本を開かないようにした方が良さそうだ。そうすれば夜までには、機嫌も直るだろう。

途中で読むのを止めるのは、勿体無い本だと思った。

倉真は集中して、夜の内に残りの三章を読み切ってしまった。

その週始めの月曜、樹絵から準一に連絡が入っていた。

「九日の月曜日、休みになったから。七日の土曜日から、泊まりに行っても良いか？」

「いいよ。オレ、八日に仕事入ってるけど、九、十は休みになってるから」

「何だ、丁度良いじゃん。じゃ、土曜日の夜、行くよ」

「了解」

週末から三泊四日で、樹絵が泊まりに来る約束が出来た。

樹絵は、今月の十三日になる準一のバースデー代わりに、この連休中で簡単にお祝いをしてやろうと考える。

『何か、何時もより手の込んだ物を作ってやったら、喜ぶかな？』
電話を切り、寮の自室へ戻り、クッキングブックを開いてみた。

プレゼントは今週中に用意をするつもりだ。カメラマンの弟子

になった準一の為に、少々値は張るが、一眼レフカメラをプレゼントしようと考えていた。カメラの事は良く判らないが、この前、泊まりに行った時、街中で足を止めた準一が、じっと見ていたのを覚えておいた。

『今月、金掛かるな……。ま、いいか。貯金、まだ有ったし』
眺めていた料理本から目を上げて、少しでも溜息が出て来た。

週末、授業後に準一のアパートへ向かった。今日は準一も仕事だった。一応、呼び鈴を鳴らしてみた。反応が無かったので、預かっていた合鍵を使って鍵を明け、玄関へ入る。荷物を部屋へ置いて、手を洗った。

冷蔵庫を勝手に開けて、中身を検分してみた。

「ロクな物、入ってないな」

冷蔵庫を閉めゴミ箱を見て、昨夜のホカ弁の空容器を見つけた。

「ま、こんなモンか」

それならそれで、安心なのは確かだ。準一の性格を考えた時、家庭の味が恋しくなれば、どこかで料理上手な女の子をナンパして来ないとも限らない。取り敢えず浮気はしていないらしい。

夕飯をどうしようかと考えていると、部屋で電話の呼び鈴が鳴る。暫らくほっておくと、留守番電話の応答メッセージが聞こえ出し、その声に被って準一の声が聞こえた。

「樹絵、いるかあ……。？　まだ、来てないのかな」

樹絵が六畳へ戻って、受話器を上げる。

「ジュン？　今、来たばかりだよ」

「お、来てた。飯、買って帰る」

「もう帰って来れるのか？」

「仕事、今終わった。海苔弁で良いか？」

「いいよ。じゃ、後どれくらい掛かる？」

「四十五分。弁当屋に寄っててくから」

「OK。じゃ、風呂でも洗っておこうか」

「そーしてよ。じゃーね、後で」

「気をつけて帰って来いよ」

「ラジャー！」

電話を切って、樹絵は風呂場へ向かい直した。

風呂を洗い、湯を沸かしている間に、樹絵は料理本を荷物から取り出す。

『パエリア、作ってやろう！』

夏に遊びに来た朝、情報番組で見聞きした、スペインのフラメンコ歌手が言っていたのを思い出した。

「パエリアは、あなただけ、と言う意味がある料理。私は月に1回、最愛の妻のために大量のパエリアを作って、ホームパーティーをしている」

そんな事だ。　だったら、折角だから準一に気持ちを込めて、料理を作っても良いだろう。

我侂放題、自由奔放に生きてきた準一が、自分の為に実家を出て、日々の食生活にも困りながら？　一人暮らしを始めてくれた事は、樹絵にとっては本当に嬉しい事だった。

『下宿で半年間、家事を仕込まれたのも丁度良かったよな』　お陰でレシピ通りになら、樹絵にもマトモな物が作れるようになった。明日、準一が仕事に行っている間に材料を買いに出て、作ってやろうと思う。　甘党の彼の為に、ケーキも用意しようと思った。　少し早いけれど誕生日のお祝いだ。　プレゼントも用意して来た。

樹絵は、少しワクワクし始めた。

「ジュン、喜んでくれるかな？」　つい、顔がにやけてしまった。　そうしている内に、準一が弁当を買って、帰宅した。

翌日、樹絵は計画通りに動いた。　昼間、準一が仕事へ出掛けている間に買い物へ行く。　食材も、一生懸命吟味して来た。　パエ

リアの他に、鮭が好物の準一の為にムニエルを作ってやろうと、鮭も買う。

ケーキは、小さめの丸いデコレーションケーキを、千六百円で購入する。このサイズなら、甘党の二人で食べ切れる筈だ。ワインも購入した。

大荷物で準一の部屋へ戻り、昼食の後から料理を始めた。

料理は出来る様になったが、手際は余り良くない。初めて作るメニューで、本を見ながらの格闘だ。六時前には何とか、夕食の準備を整えた。

「かなり、時間掛かつちやったな」

呟いて、利知未を思い出す。

『利知未は何時も、一時間くらいで7人分の料理、作ってたよな』
改めて凄いと思った。里沙もだ。一番多い時で九人分もの料理を、一時間半掛けずに作っていた。自分は二人分に、四時間以上掛かってしまった。

その分、愛情は籠もっていると、自分を励ます事にした。

その日は、利知未の夜勤三日目だ。夜、八時半前には家を出る。アパートを出るほんの十分前、久し振りに樹絵から連絡が入る。

「あ、利知未だあ！ 元気い？！」

電話口の樹絵の声は、酔っ払っていた。

「樹絵？ 久し振りだね。どうした？ 酔ってるみたいだな……」
最後の呟きに、倉真が顔を上げる。目で質問をする。

「樹絵だよ、酔っ払ってるみたい」

送話口を軽く押さえて、利知未が倉真に答える。

「もー、ムカムカ、ムカムカ、ムカムカする！ あーもう！ 何で、ジユンって、ああ何だよ？！信じられないよな」

「飲み過ぎで胃がムカついてるって、コトじゃないの?」

「違ああう!! ジュンの所為! もー、どーしてやるっ?」

酔っ払った樹絵の言葉は、理解し難かった。

利知未は、時間を見て言う。

「樹絵、あたし明日は夜勤明けで休みだから、どうか、飲みに行くか?」

「行く!! 今日、これから仕事?」

「そう。後五分で出ないと」

「じゃ、イヤ。明日、話聞いてよ」

「OK。場所は、明日の午前中に連絡するから。ジュンの所でしょ?」

「うん、行つてらっしゃい」

受話器を置いて、利知未が倉真に言う。

「樹絵、何かイライラ溜まってるみたいだから、明日の夜、ストレス解消に付き合ってくるよ」

「そうか。明後日、休みだな」

「うん。だから、チョット遅くなるかも知れない。夕飯、どうする?」

「そうだな。ラーメンでも、食いに行ってくるか」

「そうしてくれる? ごめんね」

「気にするな。久し振りだ、ゆっくりして来いよ」

「ありがとう。もう、出なくちゃ」

時計を見て、利知未が言う。出掛けのキスを交わして、仕事へ向かった。

翌日、利知未は帰宅して先ず、樹絵に連絡を入れた。

「横浜駅、電車使ったら丁度、真ん中だし。その辺りの飲み屋で、良いか?」

「いいよ。じゃ、五時頃、何処で待ち合わせる?」

「なら、チヨット探したい本が有るから、西口の大きい本屋、判る？」

「判ると思う」

「ソコの医学書、置いてある辺りに居る事にするよ」

「了解。じゃ、後で」

「じゃーね」

電話を切つて、欠伸をする。今日も倉真が用意してくれてあつた朝食を腹に収め、洗濯物を干してから、シャワーを浴びる。そこまでが、夜勤帰りの朝の日課だ。それからベッドへ潜り込んだ。

約束通り、横浜駅西口の本屋で樹絵と合流した。

「本屋つて、待ち合わせに丁度いいな」

合流し、連れだつて歩きながら、樹絵が言う。

「コーナー決めておけば、探す手間も省けるでしょ」

「だな。今度、大きな駅で待ち合わせる時には、あたしも活用しよう」

「そーしな。で、何処の店へ行こうか？」

「良いよ、あのチエーン店で」

先にある、居酒屋チエーン店の看板を指差した。

そのまま、真っ直ぐに店へ向かつて行つた。

準一は、昨日貰つたばかりのカメラを持つて、今日は箱根までバイクを走らせていた。樹絵は昨夜から、機嫌が悪くなつてしまつていた。

『何で、怒つてんのか判らネーし。夜までには機嫌直つてるかもしれないから、ま、イイか』

と、気楽に構えている。師匠の言い付けに従つて、偶にはカメラの勉強でも真面目にしてみようと思つた。

倉真は今日も残業だった。真っ直ぐ何処かの店に寄って行こうと思ったが、財布を忘れて来た事に気付く。一度、アパートへ戻る事にした。

『利知未、もう出掛けてるよな』

時間は、七時半を回ろうとしている。

『今日は、チヨイ遅くなっちまったな』

先輩達に挨拶をして、さっさと帰途へ着いた。腹が鳴っていた。

二

利知未は居酒屋で、樹絵のイライラの原因を聞いてやった。

「で、何があつたの？」

席に落ち着いてビールを飲み、タバコへ火を着ける。

「それがさー！ 聞いてくれよ！ ジュンのヤツつたらさ！」

昨夜の、頑張った料理への反応を、話し始めた。

準一が帰宅した時間は、六時過ぎだったと言う。さっそく料理

をテーブルに並べた所、まずはパエリアを見て、オジャと言われた。

「パエリアだってば。そっちは、鮭のムニエル」

「名前なんか、どーでも良いよ。腹へって死にそう」

その言葉に、先ずカチンと来た。

「ジュン、夏に泊まりに来た時、一緒に朝の情報番組、見てたよな？」

「情報番組？ それが、何か関係あんのか？」

悪気は全く無いのは判る。それでも、あの情報番組で例のフラメンコ歌手が言っていた事について、二人で感想を話し合ったのも

事実だ。

「本当に、何にも覚えてないのか？」

「一日寝たら、忘れる」

あっけらかんと言いつつ。話しながら、樹絵は夕食の準備を進めていた。準一は、並べられた端から箸をつけて行く。

「戴きまつす！ お、美味いじゃん、このオジヤ！」

「パ・エ・リ・ア！」

「鮭も美味いよ」

「ムニエル！」

「何、怒ってんだ？」

食いながら、準一がざらりと聞いた。

「……別に、いいよ。戴きます」

ムツとしたまま、樹絵も食事を始めた。

それでも気を取り直して、食後にケーキを用意した。

「ケーキまであるんだ。何か、ある日だった？」

「今週末、ジユンの誕生日だろ？ その日は寮だから、早いけどお祝いをしてやろうと思ったんだよ」

「そっか、オレ、今年で二十三歳だ。早いな」

「プレゼントも有るよ、おめでとう」

樹絵が渡したプレゼントを、その場で開いた。凄く喜んでくれていた。

「それなら、特に問題、無かったんじゃないの？」

「まだ、続きが有るんだ」

ビールは既に三杯目だ。利知未の左手に光る、指輪に目が止まる。

「それ、もしかして婚約指輪？！」

言われて利知未が頷いた。

「報告、遅くなりました。倉真が、プロポーズしてくれたんだ」

少し照れながら、左手を軽く上げて手の甲を向ける。

「おめでとう！ そっか。 やつと、そうだったんだ！ 何時？」
少し、羨ましいと感じた。

「七月の末に、あの鳩ノ巣溪谷にキャンプへ行って来たんだ。 その時に」

「良かったじゃん？」

「やつと落ち着いたよ。 樹絵、五年前キャビンへ行った時から、倉真と良く話するようになってたんだって？」

「そんな事も、あったな。 ……今は、懐かしい。 あの時、ジュンの事で色々悩んでたから」

「そうだったらしいね」

「倉真には、世話になったよ？ 利知末にもかなり世話、掛けて来たけど。 だから、あたしは二人がそうなって凄く嬉しいと思うよ」

「ありがと。 で、樹絵の話の続きは？」

「そうそう、続き！」

話を再開する。 樹絵は、また不機嫌顔に戻ってしまった。

プレゼントを渡して、最近の仕事の話を聞いた。 暫らくして、もう一度あの番組の内容を覚えているか、聞いて見た。

「ジュン、本当に覚えてないのか？」

「何を？」

「だから、夏と一緒に見た番組」

「毎年やってる、戦争アニメ映画？」

「だれが、アニメって言ったよ？ 情報番組って言ってるじゃん」

「覚えてない。 何だ？」

「スペインのフラメンコ歌手の話！」

「そんなの、あったっけ？」

「あの時、ジュン、言ってたんだぞ？ スペインの男が日本に来たら、モテるんだろうなって」

「んな事、あったかあ……？」

全く記憶に無い感じだ。それで、またイライラに火が着いてしまった。

「……もう、良いよ」

樹絵は殆ど一人で、ワインのボトルを空けてしまった。

「で、昨夜の電話な訳だ」

「そう。すっごく頑張って、料理の意味まで考えて作って出したのに。四時間、掛かったんだぞ？ 努力が水の泡って感じじゃないか」

利知末も始めて、パエリアに込められた意味を知った。

あれほど料理が嫌いで苦手だった樹絵が、そこまで頑張ったと聞いて、少し気の毒とも思う。けれど、準一の反応には頷いてしまふ。

「気持ちは判る。けど、男にあんまり感性の点で期待するのは、無駄だろうとも思うけどな」

倉真の事より、哲の事を思い出していた。あの鈍感さは、一種の特技だ。

「結構、鈍感な生き物だよ？ 自分の態度が人にどんな風に映っているのかも、気付かないヤツもいるし」

焼酎のお代わりを注文して、樹絵の言い分を続けて聞いてやった。

倉真が帰宅したのは八時前だ。空腹がサイレンを鳴らしている。

朝、忘れていった財布を見付けて、玄関へ向かおうとした。

その時、呼び鈴が鳴る。

「誰だ？」 新聞の集金か？ と思い、財布の中身を確認しながら玄関へ向かった。

鍵を明け、チェーンを掛けたまま軽く扉を開く。そこには新聞の集金ではなく、準一がビールを一ダース抱えて立っていた。

「へへ、行き成りごめん。今日は利知未さん、居ないよな？」

朝、樹絵が利知未と酒を飲みに行く事を、チラリと言っていた。

「お前のカミさんと、飲みに行ってるからな」

「はは、カミさんと来た？ それ言ったら、倉真だつて奥さんじゃん」

「お前まで、そう呼ぶか。ま、いい、上がれよ？」

腹は減っていたが、このまま玄関先へ立たせている訳にも行かない。倉真は扉を大きく開いて、準一を迎え入れた。

リビングへ勝手に通り、前回、前々回と同じ様に、勧められる前に一人掛けのソファへと陣取る。準一の定位置となつてしまった。で、何か、あったのか？」

倉真は、何時も利知未と二人で並んで座っている、三人掛けのソファに腰掛けて準一を促す。

「ま、ま、取り敢えず、乾杯！」

自分が土産で持ってきた缶ビールのプルトップを引き上げた。

ベコツと情けない音をさせて、勝手に乾杯をする。倉真は腹の虫を収めて、ビールを喉へと流し込む。

『炭酸で、いくらか腹、膨れるか？』そう考える事にした。

酔いが回るのは早いかもしれない。思い付いて、冷蔵庫を漁ってチーズを見つけて来た。こんなモンでも腹の足しには、成るだろう。

リビングへ戻ると、準一が一缶目を飲み干し、新しい缶のプルトップを引き上げ、二本目を飲み始めるところだ。半分ほど飲んで話し始めた。

「樹絵がさ、昨日から、なーんか機嫌悪いんだよね」

「何があったか、話して見ろよ」

「オレにも良く判んねー。ただ、夕飯に出してくれた料理の名前

に、拘っていたかな？」

「料理の名前？ 何だ、そりゃ？」

「夏に泊まりに来た時、一緒に見た朝の情報番組、覚えてないのか？ っても、突っ込まれたな」

「テレビ、ね。俺も、朝は呑気にテレビ見てる暇ネーからな」

準一の話聞いて、二人で首を捻った。

「誰か、知っていそうなヤツ居ないかな？」

「どうか。利知未が帰ったら、聞いてみるか？」

「そーだよな。もしかしたら今日、聞いてるかも知れねーモンな」
「で、今日はどうしてたんだ？」

自分が利知未の機嫌の悪い時は、なるべく触れないようにしている。
「朝から殆ど口、聞いてくれなかったから、時間潰しに箱根まで行って、カメラの勉強して来た」

「で、そのまま直行して来たのか？」

準一はカメラのケースを、ここまで持つて来ていた。高い品だ。
バイクの後ろに括り付けて置いて、盗まれなにと限らない。

「そう。フィルム5本使った」

「そんなに撮る物、アンのか？」

「彫刻の森、行って来たからね。同じモン、何枚も撮ったよ。

角度変えたり、光の加減見たりして。 っても、師匠は厳しいから褒めて貰える可能性は、殆ど無いけどね」

「お前が、それほど真面目にやっているととは思わなかった」

「面白れーから。この仕事なら、ずっと続けて行ってもイイかなって思ってる。まだ普段はスタジオの雑用ばっかだけだな」

準一も、いくらか成長はしているらしい。 感心してしまった。

倉真は話を変えて、樹絵の料理の腕を聞いて見た。 ビールの空き缶は、既に七本も転がっている。 腹の減り具合も限界に近い。

「樹絵ちゃん、料理、出来るようになったのか？」

「美味しいもん、作るようになったよ。 っても、泊まりに来た時しか食えないから、ドンだけの種類を作れるのかは判んね」

「意外だな。昔、キャビン行った時の包丁捌きは、恐ろしい物があつたよな」

「そーだった。それに比べれば、雲泥の差だ」

「お前らの食生活、どうなってるのかと思つていたよ」

「一人の時は、コンビニ弁当も多いよ。だってオレ、料理なんか殆どした事ネーもん」

「そりゃ、料理の名前も判らネーよな」

「あんま、気にしなくネー？ ファミレスとか行った時以外は」

「そうかもしれないな」

利知未が作る料理の名前も、教えて貰わなければ良く判らない。

準一よりは料理もやる倉真でもそうだ。準一が、判る訳は無いだろうと思う。

「お前、今日、夕飯食ったか？」

「出先から直行して来たからね、まだだよ」

「腹、減らネー？」

「そー言われれば、減った」

「ラーメン、食に行こうぜ」

「アイアイサー！」

漸く倉真は、夕飯に有り付ける事になった。既に九時を回っている。

「近所に美味しいチャーシュー、出す店がアンだよ。タマに行つて」

「そうなのか」

「ラーメンも美味いぜ？ 量も多くて、値段も安い」

「そりゃ、楽しみだ」

ソファから立ち上がり、空き缶そのまま転がしたまま、玄関へ向かう。

利知未が居なければ、こんなモンだ。倉真はコレでも、普段は気を使っているのだ。

その頃、樹絵はすっかり出来上がってしまったている。

途中で利知未の飲んでいる焼酎と同じ物を頼み、ボトルで一本オーダーしていた。半分は樹絵の腹へ収まっている。利知未は呆れ顔だ。

「樹絵、平気か？」

長時間、昔馴染みの樹絵と過ごして、昔の雰囲気少し戻っている。

「んー？　ヘーキ、ヘーキ！　まあまだ、飲めるよお！」

樹絵も中々、酒に強い。それでも、いい加減フニヤフニヤになっている。

「パエリアには、あなただけって、意味があるんだぞお……一緒にテレビ見てたのに、ジュンの奴、何で、覚えてないんだよ？　話もしたのに……」

さつきから、この言葉を繰り返している。目が据わっている。

利知未は、一つ溜息を付いた。

「利知未い！　聞いてるかあ？！」

「聞いているよ。　済みません、ウーロン茶、下さい」

樹絵に答えて、店員にウーロン茶を注文する。絡み酒の扱いは、バツカスの常連、田島のお陰で慣れている。

「うーろんちゃあ？！　なーに言ってるんだよ？！　シヨーチューのロック、もお！　っぱあい！！」

樹絵の言葉に、店員が止まる。利知未の顔を見ている。

「済みません、ウーロン茶で良いです」

店員の無言の質問に、利知未はきっぱりと答えた。返事をして、店員が奥へ戻って行った。

樹絵は、そのままムニヤムニヤとして、テーブルに突っ伏してしまった。半分、眠っているみたいだ。利知未はもう一度、小さ

な溜息を付く。

『……まったく、……世話の焼ける』　そうは思うが、女の樹絵に、準一と同じ水掛けの洗礼は、出来る事じゃない。ソフトドリンクでも飲ませて、少し酔いを冷まさせる他、無さそうだ。

店員が、ウーロン茶を持って来てくれた。

「ほら、樹絵。　コレ飲んで、少し酔いを冷ましな」

ムニャムニャと起き出し、樹絵は素直にウーロン茶を口にする。

利知未は頬杖を付いて考える。

樹絵と準一は、バランスの取れたカップルだと思う。　何にでも一生懸命になり過ぎる嫌いがある樹絵。　準一は、何事にも執着心を持ってないで、その時その時で風に流され、波に乗って、世間を渡っている風だ。

お互いのマイナス面を補い合う、丁度いい関係と言えるのでは無いか。　上手く歯車が噛み合っていれば、最強のカップルかもしれない。

歯車を噛み合わせるのは、お互いの努力と理解と、信頼。　そして、愛情。

自分と、倉真はどうだろう……？

利知未にとっては唯一、素直になり切れる相手だ。　倉真は自分の為に、無理をしていないのだろうか？

『もし聞いてみても、そんな事は無いって、言うだろうけれど……』
しかし、それで自分が彼の重荷になったりは、しないのだろうか？

ウーロン茶で少しだけ正気が戻った樹絵が、物思う利知未に気付いて聞いた。

「利知未、何、考えてんだ？」

「何でもないよ。　目、覚めたか？」

「あたしは始めから、寝てなんかいネーよーだ！」

「よく言っな。 さつき寝言で、ジユン愛してるよって言ってたよ」
にやりと笑ってやった。 勿論、嘘だ。

「そんな事、言ってた?! 本当に?」

樹絵は、一気に目が覚めた気がした。 利知未はその様子を楽しんでいる。

「さあね」

知らない振りをして、笑ってやった。

「兎に角、そろそろ出ようか?」

十時少し前だった。

これからなら、少し酔い冷ましをしてから帰っても終電には余裕の時間だ。 今は、お互いに、待っていてくれる人が居る。

店を出るまでが一騒動だった。 親切な店員にエレベーターの下まで見送られ、ビルを後にした。

「……暫らくこの店、来れないな」

つい、利知未は小さく呟いてしまった。 それから酔っ払った樹絵を見て、笑顔を見せる。

「酔い冷ましに、ちよつと歩こうか?」

樹絵は、素直に頷いた。

エレベーターを降り、十月の夜の外気に触れ、酔いがいくらか冷めて来た。

「ランドマークタワーまで、行こうよ」

「OK」

頷いて歩き出す。

のんびり歩いて、三十分から四十分と言う所だろう。 一駅分歩くのだから、桜木町から電車へ乗れば良い。

「冷蔵庫にシジミ、ある?」

行き成りの質問に、樹絵が首を傾げる。

「何で?」

「二日酔いの防止。結構、効くよ。昔、良く里沙が作ってくれたな」

「そっか、利知未が深酒した次の日、何で毎回、味噌汁が有るのが不思議だった。下宿の朝ご飯、何時もはパンにカップスープが多かったのに」

「無ければ、インスタントでも良いから買って行きな」

「判った」

「明日、寮に戻るんでしょ。二日酔いじゃ、ジュンにも気の毒だよ」

「……そーだね」

利知未に言われて、樹絵も少し反省した。……ちよつと、イライラしていただけだ、きつと。

これからは準一に、ヘンな期待はしない様にしようと思った。

『ジュンは元々、あーゆるーヤツだし……。あんまり、物事を深く考えないし』

何時も風船のようにふわふわしていて、強風に逆らうよりは、風に乗って、今まで行った事もない様な場所に飛ばされる事の方を好むのだ。

そして、始めて見る景色に驚いたり、喜んだりしている。

『好奇心、旺盛だから。で、中々、メゲたりしない。……柔軟に生きている』

でも、だから。

時たま、トンでもない方へ飛ばされて、そのトンでもない環境にもスンナリ馴染んで行ってしまうのでは無いか？ と思って、不安になる事もある。

『だから、あたしがジュンに確り紐を結びつけて、ちゃんとその紐の端っこを掴んでいてやる』 そう思ったのだ。

恋人が警官なら、怪しげな連中の方から避けてくれるのでは無いだろうか？

……きつと。

今日は折角、二人で居られる時間を、自分の意地っ張りで潰してしまった。

「あーあ！ 勿体無い事した！」

「行き成り、どーした？ まだ酔い、冷めてなかった？」

「もう、冷めた」

「肝臓、強いね」

「さっすが！ 言う事が医者だね」

「医者だからね」

「そーだね。 …訳、判んない会話だな」

樹絵の感想に、利知未が軽く吹き出した。

「そーだな」

「あ！ 目的地、到着！ やっぱ、高いな」

ビルの天辺を、首を曲げて見上げた。

「美術館のベンチで、一休みしよう」

「疲れた？」

「酔っ払いを支えるのに、体力使ったからな」

「ご迷惑お掛けしました」

「どう致しまして」

肩を軽く竦めて小さく笑顔を作って、利知未が言った。

二人で、美術館の裏庭にあるベンチへ腰掛けた。 時間的に綱を張ってあったのを、跨いで行った。

三

ベンチに腰掛けると、利知未はバッグから携帯灰皿を取り出した。
「用意イイな」

「まーね。 でも、今日は吸い過ぎたよ」

「それでも無いンじゃん。前より減ってるよ」

「最近、一箱三日は持つんだよ」

「そーなのか？ すっげー、減煙したじゃん。禁煙すんの？」

「結婚して、子供が出来たら、禁煙するよ。減らそうと思ったのはあるけど、どっちかって言つと、自然に減って来たかな？」

「倉真の為に？」

「……自分の為に。それに、無くても居れる様にはなつて来た。

「仕事中は中々、吸うタイミングもないし。家に帰れば帰ったで、結構やるコト一杯有るし。…でも、倉真のお陰かな？」

「禁煙しろって、言われたのか？」

「違うよ。ストレスが、余り溜まらなくなった」

「じゃ、今日はストレス溜まったんだ」

「そうじゃないよ。外で飲むと、やっぱり本数、増えるんだよ」

「雰囲気って、ヤツ？」

「多分ね」

話しながら、ゆっくり吸っていたタバコを揉み消した。蓋をして再びバッグへしまってしまう。パッケージがチラリと見えた。

樹絵が聞いた。

「何時からメンソールなんだ？ 前、ジュンと倉真と、四人で飲んだ時には、もう変っていたよな」

仕舞いかけたタバコの箱に軽く目を落として、利知未は答える。

「ジュンが運ばれて来た、少し前かな？ ……二月頃」

切っ掛けは、バレンタインデーの二日前。

酷い男に振られて、泣いていた彼女を慰めた、あの日。

倉真と、その優しさに、強いジェラシーを感じてしまった、あの出来事。

思い出して、懐かしい顔になる。

「何か、切っ掛けが有ったのか？」

「まあ、色々だね」

小さく笑った利知未は、今まで見た中で一番、可愛らしく、綺麗に見えた。

「そろそろ、行こうか。お互い、心配させたくない人が居る事だし」

「……そだね。帰ろう！」

元気を取り戻した樹絵の返事に、利知未は再び、女らしい笑顔を見せた。

桜木町から電車を使って、横浜で私鉄へ乗り換える。同じ沿線の、西と東だ。

私鉄線のホームで、線路を挟んで向かい合った。

樹絵の乗る電車が、少し早くにやって来た。まだ、声が聞こえるうちに、利知未は少し大声で樹絵に言った。

「帰ったら、ジュンと仲直りしなよ！」

「判ってる！　じゃ、また！　お休み！」

「お休み！」

樹絵の返事に返した時、電車が二人の前へ割り込んだ。

樹絵が乗り込み、利知未の姿が見える所まで進んで行った。扉の近くへ立って、利知未の姿を探す。

利知未側の電車も、ホームへ滑り込んだ。利知未も乗り込んで、樹絵と同じ様に奥へと進んで行く。

窓を挟んで、顔を見合わせて笑みを交わした。軽く手を振ると、樹絵の乗った電車が動き出した。

見送って、利知未側の電車も、ゆっくりと動き出す。

「……ちゃんと、仲直り出来るかな？」

妹分を、少し気に掛けた。

『大丈夫か。……樹絵なら』

直ぐに納得して、利知未の頬には微笑が浮かんで来た。

樹絵は電車に揺られながら思う。

帰ったら、今日、離れ離れだった分、二人の時間を大切に過ごそうと。

倉真は漸くリビングを片付け終わり、ソファに深く凭れ込んだ。
「後片付けが、面倒だな」溜息を付いて、力が抜ける。

この前、準一が来た時には、部屋を散らかしたまま眠ってしまった。朝、利知未が帰宅してから、準一と二人で片付けてくれたと聞いていた。今回は自分の番だ。

タバコを銜え、火を着けた。一本吸い終わるまで休憩して、シャワーを浴びる事にした。

再びリビングへ戻り、ソファに掛け直して、準一が飲み残して行ったコーラをグラスに注いで、飲んでみた。

「……甘いな。炭酸が効いている内じゃなけりゃ、単なる砂糖水だ」

今夜は、飲み過ぎた。

準一には、帰宅する一時間前から、ビールではなくコーラを飲ませておいた。飲酒運転、事故の元だ。

準一のバイクの運転技術では、危なっかしい事、この上ない。酔いが冷めてから、準一は帰宅して行った。

それでも、飲酒から一時間だ。帰宅途中、パトカーに見付かっていない事を祈る事にした。

だらけて過ごしている内に、利知未が帰宅する。十一時半を回

っていた。

「ただいま」

「おう、お帰り」

ソファに凭れ込んだまま、返事をした。

「まだ、起きてたんだ。夕飯、ちゃんと食べた？」

「食ったよ。ジュンが来たんだ。近所のラーメン屋へ連れて行った」

「へー、来てたんだ」

話しながらリビングに現れた利知未が、上から倉真の顔を覗き込む。

「随分、お疲れのようですね」

「チョイな」

「シャワー、浴びてくる。倉真、お風呂は？」

「さっきシャワー浴びた」

「じゃ、お湯張って置かなくても、いいね」

「ああ」

だらけたままの倉真を見て、微かに笑みが漏れた。支度をしながら思う。

『今日は、ちゃんと片付けておいてくれた訳だ』

準一が来ていて、酒が出ない筈がない。先月の朝、散らかしたまま眠ってしまった事の埋め合わせだろう。

リビングを出る前に、軽く振り向いて聞いて見た。

「ジュン、何か言ってた？」

「料理の事で、悩んでいた」

「それだけ？」

「樹絵ちゃんが何で機嫌が悪いのか、さっぱり判らねーって、言ってたな」

「成る程、成る程」

「そっちは、どーだったんだ？」

「久し振りに酔っ払いの面倒、見て来たよ」

「そんなに、飲んだのか？」 樹絵は酒に強かった印象がある。

利知未は出入り口の柱に、軽く寄り掛かった。

「まーね。後で、ゆっくり話すよ」

少し考えてそう答えて、改めてリビングを出て行った。

樹絵は、準一よりも早くに帰宅して、シャワーを浴びていた。

準一は飲酒後だ。何時も以上に安全運転で、パトカーに見咎められないように、なるべく裏道を使って、少し遠回りをして帰宅した。

ついでに、ご機嫌取りの土産を買って来た。それを探して、同じコンビニのチェーン店を四軒回ってしまった。

人気の商品で、この時間に四つ残っている所が無かった。一軒目で最後の一つを仕入れ、二軒目を空振りし、三軒目で最後の二個、四件目でもう一つと、紅茶のティーバックを購入して来た。

玄関の鍵は開いていた。樹絵は帰っているらしい。

「ただいま」

シャワーの音が聞こえていた。少し、無用心な気もする。恐らく、自分が直ぐに帰るだろうと踏んでの事だろう。

台所の小さなダイニングテーブルの上に、土産のビニール袋を置いて、電子レンジの時間を確かめた。十一時四十七分を表示していた。一時間近く土産を探しつつ、バイクを走らせて来た計算だ。『苦労した甲斐、あれば良いけどな』そう思った。

シャワーの音が止まり、樹絵がバスタオルを巻いて浴室を出て来た。「あれ、何時、帰って来たんだ？」

「たった今。シュークリーム、買って来た。食わねー？」

「勿論。服、着てくる」

樹絵は、にっこりと笑顔を見せてくれた。準一は胸を撫で下ろす。

『良かった、機嫌、直ってる。　流石、利知未さんだ』

樹絵のご機嫌を直してくれたのは、姉御だろうと考えた。　利知未は自分達だけではなく、元、下宿の住人達にとっても、きっとで頼りがいのある、良い姉貴分だったのだろう。

樹絵の様子を見ていれば、良く判る。　余り会った事はないが、当時、下宿で一番年下だった美加も、利知未に懐いていたと樹絵から聞いた事がある。

ご機嫌取りのダメ押しで、準一が紅茶も用意した。　普段、そんな事までは気が回らない。　今夜は特別だ。

準備をしている内に、ドライヤーの音が聞こえて来た。

電気ポットと、二つのマグカップにティーパックを入れた物、シユークリームの入ったビニール袋を持って、部屋へ入る。

ベッドと箆笥とカラーボックスに囲まれた、部屋の開きスペースのほぼ真ん中に、以前、倉真が使っていた小さ目の丸座卓が置かれている。

樹絵用のクッションと、準一愛用の座布団チックなペタンコの敷物が、座卓の周りに置いてある。

準一は、用意して来た物を丸座卓の上に置き、腰を下ろす。　ポットからマグカップに熱湯を注いだ。

紅茶の良い香りが、髪を乾かしている樹絵の鼻をくすぐった。

『珍しい。　氣い、利かせてる……』

チラリと、鏡に映りこんでいる準一の行動をチェックした。

『ま、イイか。　…今回は、あたしの意地っ張りが原因だし』

許してあげようと、思った。

髪を乾かし終わって、樹絵が向きを変える。

「紅茶、入れてくれたんだ。　サンキュ」

「はい、樹絵の好物」

「一人二個ずつ、買って来たのか？」

「当然。一個じゃ足りないっしょ」

樹絵にシュークリームとマグカップを押しやって、準一が言う。

「あのさ、オレ、まだ良く判ってないんだけど…、取り敢えず、ごめん」

ぺこりと頭を下げる。樹絵は早速、シュークリームの袋を捌きながら、準一に答えてやった。

「もー良いよ。あたしもちょっと意地張り過ぎた。ごめん」

樹絵からも謝られて、準一はほっとした。

視線が合い、気恥ずかしくて、人差し指で顎をぽりぽりと掻いている。

「折角、一緒に居られる日だったのに、勿体無かったな」

「オレも。勝手に出掛けちゃったしな。ホント、ごめんな」

「イイよ、あたしが悪かったんだから。イタダキマス」

捌いた袋から、シュークリームを取り出して二つに割って、片方を口へ頬張った。

皮がふわふわで柔らかい、バニラビーンズの入ったカスタードクリームシュークリームだ。樹絵は、このシュークリームが好きだった。

二人で二個ずつ平らげて、指についたシュークリームを、ぺろりと舐める。甘い物を食べると幸せな気分になる。甘い物が苦手な人は少し可哀想だな、と、利知未と倉真を思い出した。

樹絵が、ニコニコして指のクリームを舐める様子を見て、準一が言う。

「機嫌、直った？」

「もう、とっくに直ってる」

「良かった。訳判らない喧嘩したまま、寮へ帰したくは無かったんだ」

「あたしも。喧嘩したまま帰るのは、イヤだった」

仲直りをして、樹絵が準一の隣へ移動して来た。

ベッドを背凭れ代わりにして、二人で並んで紅茶を飲んだ。

「シャワー、浴びて来てよ」
「そーする」

樹絵に言われて、準一は浴室へ向かった。

今日、一緒に居られなかった時間を、全部取り戻すようなつもりで、二人は抱き合った。樹絵は、素直に思った。
『やっぱり、準一の隣が、一番、落ち着くよ……』 どうし様も無く軽くて、風船みたいにフワフワしたヤツだけど……。

樹絵には、準一のその身の軽さが心地良いのだ。何時も何でも頑張り過ぎて、力を使い果たして、疲れ切ってしまう自分の心を、準一は何時でも軽くしてくれる。

準一には、樹絵の重みが丁度良い。

透子に一生懸命アタックして、報われなかった、あの頃。

その経験を通して、自分には楽しく軌道修正させてくれる、友達みたいな恋人が、丁度良いと感じて来た。……それと、もう一つ。

一緒に居ると楽しくて、過去の悲しい初恋を忘れさせてくれる、大切な女の子。……初めて会ったのは、樹絵が十五歳、自分が十六歳の頃。

あの頃は本当に、ただ一緒に過ごすのが、楽しい友達だった。

利知未以外で、始めてそう感じられる女友達。双子と、里真。

その中で、何故か樹絵。

……縁なんて、不思議な物だ。

始めは由香子に、少しでも興味を持っていた。理由は、和泉の視線。あの頃、亡き妹・真澄の姿を、和泉は由香子に重ね見ていた。

由香子は、利知未をすっかり男だと信じ込んで、強い憧れを抱い

ていた。

あの出会いが、二人の運命を交わらせた。
気付くと、樹絵は準一にとって、特別な女の子に変わっていた。

そこまでは、透子との思い出がある。透子は言っていた。

「利知未が躰担当、アタシは経済観念担当。　　イイ姉貴達を持ったな。……大事な女、見つかったら紹介しろよ」

あの頃、自分は思っていた以上に、透子の事が好きだったらしいと、最近になって漸く気付いた。

今は、樹絵が居る。樹絵の存在は、準一にとって現実社会への留め具と、リードのような物かもしれない。

けれど首輪に着いたリードは長くて、窮屈を感じる事も、全く無い。

何にしてもイイ恋人に巡り会ったと、今は透子にも由香子にも、利知未にも感謝をしている。

だから今の準一にとって、樹絵は、本当に大切な彼女だ。

『まだ、トー子さんに紹介、して無かったよな』

半分眠りに着きながら、準一は、そんな事を思っていた。

樹絵と準一が、仲直りをした頃。

利知未はシャワーを浴び終わり、改めて倉真を相手に晩酌をしていた。

今日、樹絵に聞かされた、昨夜の事を話して聞かせた。　　倉真は

ビールを飲み過ぎて、炭酸で腹が膨れて何も入らないからと、タバコを吸っていた。

「パエリアに、そんな意味があったのか」

利知末の話で、準一の悩んでいた料理の名前と、樹絵のご機嫌についての因果関係が、漸く理解出来た。

「あたしも、知らなかったよ。……ね、倉真。今度、パエリアが出て来たら思い出せる？」

「こういう風に聞いて知ったんなら、覚えていると思うけどな」

「やっぱり、そうだよな」

「利知末は、やっぱり樹絵ちゃんの気持ちが解るのか？」

「そうだね……。解ると、思うよ」

「男と女の差か」

「そうなのかもね。樹絵、ちゃんと仲直りしたかな？」

「大丈夫だろ」

「なら、良いんだけど」

気分を変えて、店を出る前の樹絵の様子を話してやった。

「帰り、店を出るまで凄かったんだよね、樹絵」

「どう、凄かったって？」

「笑い上戸で。店員の顔を見て笑い、靴を上手く履けなくて笑い、心配したあたしの顔を見て笑い。お店の人も呆れてた」

「樹絵ちゃんが、笑い上戸だったのは、知らなかったな」

「そこに至るまでは、絡み酒と睡魔が襲って来てた」

「そりゃ、大変だったな」

「大変だったよ」

言いながら、ロックへ口を付ける。

利知末には、焼酎もワインも日本酒もカクテルも、飲めない酒は無い。けれど一番、好みに合っている酒は、やはりウイスキーがブランデーである。

散々、飲んで来たと言うのに、ウイスキーの味が恋しくなって、一杯だけロックを作って飲んでいた。

今夜は倉真も疲れているようで、何時もは倉真に凭れていたのを止めて、ソファの背凭れに背中を預けていた。

けれど、「大変だったよ」と言った利知未の身体を、倉真は何時も通りに自分の身体へ凭れさせた。

「お疲れ」

耳元で囁くようにして、利知未を労ってくれた。

「倉真も、お疲れ様。大丈夫？」

「何がだ？」

「凭れちゃって、平気なの？ 倉真も、疲れてた見たいだったけど」
「平気だ。……この方が気持ちが悪く落ちて、癒される」

そう言って、銜えていたタバコを取り、手を伸ばして灰皿で揉み消す。

「ありがと。あたしも、気持ちが落ち着くよ」

倉真の体温と、鼓動を感じる。その感覚は、利知未にとっての安定剤だ。

「そつだ。今度ジンを、ちゃんと夕飯に呼ぼうよ？」

「この前は行き成りだったからな。良いんじゃないか？ コンビニ弁当ばっかじゃ、栄養が偏りそつだ」

「それに、偶には三人で飲むのも楽しいよね」

「そつだな」

ロツクを飲み切り、小さな欠伸をする。倉真も利知未に釣られて大きな欠伸をしてしまう。利知未は、倉真の眠そうな顔を可愛いと思う。倉真も、利知未の眠そうな目は愛らしく感じる。

お互いの釣られ欠伸に、小さく笑ってしまった。

「今日はもう、寝ようか？」

「そーするか」

利知未はソファから立ち、グラスと灰皿を片付けた。

倉真は、もう一度欠伸をしながら、一足先に寝室へ引込んだ。

二人ともクタクタだ。倉真も、流石に力が抜けていた。

倉真との時間は、明日ゆつくりと取る事にした。今夜はベッドへ入って、直ぐに二人とも寝息を立て始めてしまった。

樹絵達は多分、仲直りしただろうと思いながら、いつの間にか利知未も、倉真も、夢の中を彷徨っていたのだった。

四

四週目の金曜日、利知未が遅出の夜。

倉真は家を飛び出してから、実に七年半振りに実家へ連絡を入れた。

電話口へ出たのは、妹・一美だった。

「一美？ 俺だ」

一瞬、間があつた。声を聞き違えたのではない。まさか、あの兄が此処へ連絡を入れて来るとは、思いも寄らない事だった。

「お兄ちゃん！ どうしたの？ 今、何処に住んでるの？！」

何時か、『何かあつたら、お袋には連絡をする』と言っていた兄の言葉を、瞬間的に思い出す。驚きの後、不安が膨れる。

まさか、何か罪を犯して、警察か監獄からの連絡では無いだろうか……？

「今、横浜西区のアパート借りてる。連絡しなくて悪かった」

利知未が十年を暮らした下宿や、バツカス、アダムの在るあの街へ、倉真が引っ越して行って住み始めた五年半前。一美にだけは、新しい住所を伝えるに行っていた。

自分も通っていた母校の正門前で、学校帰りの一美を待ち、英語ノートの最終ページへ住所と電話番号をメモした。

その前に、中学時代に世話になった担任から、久し振りの説教を戴いた。

一美を、実家の近くまでバイクの後ろへ乗せて走った。後にも先にも、妹をタンDEMシートへ乗せたのは、あれ一回切りだ。まだ、バイク便のバイトをしていた、十九歳の春の事だ。

「そう……。マトモに、やってるの？」

「ああ、ちゃんと就職もした。もう、二年半勤めているよ。皆、元気か？」

「うん、元気だよ。お兄ちゃんこそ、病氣してない？」

「ああ、元気だよ。…お袋、居るか？」

「うん。ちよつと待つてて」

取り敢えず、兄の近況は平和そうだ。犯罪や病氣の告白でなかった事に、一美はほつとして母を呼びに行った。

「お母さん！ 電話！」

「はいはい、ちよつと待つて。誰から？」

母は、夕食の片付けの最中だ。

何時も通り穏やかに返事をして、洗剤のついた手を水で洗い流す。

「……ビックリしないでね？」

「何？ もつたいぶって」

洗剤を落とした手を、エプロンの裾で拭きながら、娘の顔を見た。

「お兄ちゃん」

「え？」

「だから、音信不通の、お兄ちゃん！」

耳を疑った。あの子が、連絡をして来てくれた……？ まさか、

一美は自分を担ごうとしているのじゃ無かるうか？

「嘘じゃないよ！ 本当に、本当……！」

焦れた一美の声が上がる。母は、漸く理解が追いついた。

追いついた途端、年甲斐も無く、キッチンから飛び出して電話に走り寄る。

「もしもし？　もしもし！　……？　一美！　電話、繋がらないわよ？！」

慌てて焦って、保留の解除をするのも忘れた。　自分の失敗にも気付かない。

自分よりは機械に詳しい娘に、助けを求めて声を上げる。

「やだ、お母さん、解除してないじゃない！」

パタパタとスリッパの音をさせ、急いで近寄った一美が呆れた声を上げる。　言いながら、電話の保留を解除してやった。

保留音が解けた途端、声が出る。

「倉真！？　どうしてたの？！　今まで連絡も寄越さないで……！　今、何処に住んでるの？　一美から住所を聞いて、手紙を書いたんだよ、それが宛先不明で戻って来て……。　私はあんたが何か仕出かしたんじゃないかと思って、どんだけ心配していたか！！」

繋がった途端、受話口から聞こえて来る、懐かしい母親の声。

「……悪い。　一年半くらい前に、引越してたんだ。　連絡するタイミング逃しちゃった」

倉真は素直に、母に詫びた。

受話口から聞こえて来た声は、紛れもなく、息子の声だ。

その、無事に生きて居てくれた、こうして連絡をして来てくれた事実を、声を聞いて漸く理解した。　叱りたい事、聞きたい事、心配していた事など色々有るが、取り敢えず、安堵した事を伝えたい。「……まあ、良かったよ。　こうして連絡してくれて。　今、どうやって暮らしているの？　ちゃんと食べてるの？　病気はしてない？」

一美と同じ事を聞かれて、場違いな可笑しさが一瞬、頭を過ぎっ

た。

「ちゃんと就職してるよ。車の整備工場で働き始めて、二年半になる。飯はちゃんと食ってる、病気もしていない」

全て、利知末のお陰だ。早く彼女を、家族に紹介してやりたいと思う。

「本当に？ あんたは昔から、隠し事ばかりしてたから心配だよ」
「…一度、会いに行くよ。……会って貰いたい人が、居るんだ」
その為の、電話だ。

「……まさか、お嫁さん?!」

息子は、もう二十四歳になる筈だ。家を飛び出して、七年半。

母親の頭に浮かぶのは、まだ、あどけなさが消え切らなかった、十七歳になる前の、派手な頭をして、頑固さを表した上がり眉と、ヤンチャな釣り目。

けれど、実際の年月を思う。

あの頃、漸く中学に上がったばかりだった長女・一美も、今はもう二十歳。大学へ通っている。

母の性急な判断に、倉真は一瞬、言葉が止まってしまふ。

「…結婚したいと思っている人だよ」

落ち着き直して、はっきりと言いつた。

「あら、まあ……！ 久し振りに連絡、寄越したと思ったら……」

そうだね、もう二十四だもんね……。そんな人が出来ていても、可笑しく無いわね……。私も歳を取る筈だわ。…一美も二十歳になったし……」

「それで、一度、親父と話し合いたいと思っている。彼女は、親父との話がついたら、改めて連れて行こうと思ってる」

「……そう。……そうだね、ちゃんと話し合わないとね。どう言う風にしようと思ってるかは、解らないけれど」

家に戻って来るつもりが、有るのか？ 父の後を継ぐ気になったのか？ それとも、自分の道を進んで、家にも戻る気は無いのか？……？

息子の性格を考えた時、後を継ぐ事、ここへ戻って来る事は、考えられない事ではある。それでも、久し振りの息子の声と口調に、成長を感じられる。

……もしかしたら、少しは期待しても、良いのだろうか？

「ま、その辺の事は、行つた時に話すよ」

「その方が、良いわね」

期待は、持ちたい気持ちと、持っても無駄な気持ちと、半々だ。

ただ、あの、どうしようもなかった息子が、随分と確りとした話し方をするようになった。仕事も真面目にしていると言う。

「……あんたが、まともに生活出来る様になったの、その人のお陰かい？」

「ああ」

その通りだ。倉真は短く、けれど確りと、はっきりと答えた。

「そう。あんたを、真つ当に戻してくれるような人なんだね……。会つのが楽しみだよ」

母の声が涙ぐんでいる。後ろで一美が、賑やかに騒いでいる。

「何？ お兄ちゃん、結婚するの？！ 本当に？ ね、どんな人なのか聞いてよ！」

「ちよつと、黙ってなさい」

「後で、電話変わってよね？！」

はいはい、と妹に答える声を聞いて、倉真が話を戻す。

「詳しい事は帰った時に話すから、親父、何時なら家に居る？」

「あの人は、何時も夜九時にはお風呂上がって、晩酌してるよ。」

日曜は何時も釣り行ったり、将棋指しに行ったり。まともに家に居る事が、殆ど無い」

「相変わらずな訳だ」

「それでも、あんたが出てった頃は大変だったんだから。ここ三年くらいだよ、元に戻ったのは。……仕事は、膿まず弛まず真面目な儘だったけどね」

「……悪かった」

「いいよ、返って丁度良い時期かも知れないよ。だから、お父さんと倉真で話をするだけだったら、夜9時ごろ来た方が、確実だね」

「そうか。……仕事の都合見て、来週にでも顔出すよ」

「待ってるよ」

「ああ」

「お父さんに、言っておくよ」

「それとなく、頼む。……今まで、心配させてごめん」

「あんたが、素直に謝るようになる何てね……。……よっぽど、良い人なんだね」

「人柄は、保障するよ」

「そうかい、会つのが本当に楽しみだよ。……じゃ、元気でやるんだよ」

「お袋も」

母子の会話は終わった。受話器を置こうとした時、一美の声がした。

「ちょっと、お兄ちゃん！ あたしにも、話させてよ?!」

昔から変わらない、利かん気そうな元気な声だ。倉真は再び受話器を耳に当ててやった。

「何だよ？」

「何だよって事、ある？ 久し振りに可愛い妹と話が出来るって言うのに！」

そんな物言いも、懐かしい感じた。

「悪かったな。で？」

「どんな人なの?!」

「は？」

「お兄ちゃんの彼女に、決まってるでしょ！ 結婚考えてるなら将来、あたしのお義姉さんにもなる人なんだから。 少しくらい、教えてくれたっていいでしょ？ どんな感じの人？ 歳は？ 仕事は？ どー言う性格？！」

早口で、質問が繰り出された。 少し怯んでしまう。

「そう言う事か。 背の高い、美人だよ。 歳は俺より一つ上で、外科医」

「は？！ 外科医って、お医者さんって事？」

「そうだよ。 大学病院で働いてる、研修医だ」

「そんなヒトと、何処で知り合ったの？！」

バイクで事故でも、起こした事が有るのだろうか？ それにしても、ナースではなく研修医と言うのは、直ぐには納得し切れない感じだ。

「その辺は、またゆっくり話すよ。 高校も、横須賀の北条だった。

お前も知ってるだろ？ 有名な所だ。 医大もストレート、留年

なしできっちり六年で医師免許取った、凄い努力家だ。 性格は：

…、昔は、男前だった」

「何？ それ！ 男前って、サッパリした、気の強い人って、事？」

男前と言う表現を、女性に対して使った兄の感性は、良く判らない。

「気は、強い方だろうな。 けど、キツイ人じゃない。 お前も会

ったら、一発で気に入るよ」

「へー、そう…？ 成る程」

外科医と言う仕事のイメージが、漸く一美の中で、一つの姿を現す。

外科、と言う事は当然、手術もあるのだ。 人の身体を、メスを使つて開くのだから、気の弱い人と言う事は在り得ないかも知れない。 しかも女性だ。 整形外科や内科、歯科などならば、女医のイメージもある。

男っぱいらしいと言うのも、頷ける。 そうなつて来たら、少しでも早くに見てみたくなつて来た。

「お前、ヘンな事、考えてるんじゃないだろうな？」

言葉が止まった一美の様子に、倉真の勘が働いた。

妹の性格は、良く判っている。……あの頃の、ままなら。

「え？ 何のこと？」

「こつそり会いに来ようとか、思ってたんじゃないだろうなって、事だよ」

凶星を突かれてしまった。けれど一美は、何でもない声を出す。

「まっさか！ お兄ちゃんが家に連れて来るのを、楽しみにしてますよ。じゃ、本当に来週、来るのね？」

母との会話は、隣で聞き耳を立てていた。

「取り敢えず、俺だけな」

「判った。じゃ、事故起こさないように、気を付けて来てね。待つてるから」

「ああ。お前、来成年式だったな？」

さっきの母との会話を思い出した。

「うん、良く覚えてたじゃない」

「何か、祝いやるよ」

一美の事は、昔からそれなりに可愛がって来た。

高校一年の春から夏。自分が学校を中退するまでの間の事件や、以前の住所を伝えた行った時の事などと考えると、妹にも迷惑を掛けて来た。

「まいったあ！ どー言う風の吹き回しよ？」

「…お前には結構、感謝してんだよ、これでも。要らないってんなら、知らねーよ」

「要らないなんて、言っていない！ じゃ、アクセサリーか、腕時計がイーな」

「ちゃっかりしてるな」

「貰える物は、貰っておかないとね。近頃の女子大生は確りしてるのよ」

「そーかよ、解ったよ。単位、落とすなよ」

「お兄ちゃんとは違うから、大丈夫よ。お祝い、期待してるからね！」

バイバイと言って、電話は切れた。

ツーツー音が聞こえて来た。倉真は静かに、受話器を置いた。

少し、力が抜けそうになる。

七年半振りの、家族との会話。倉真の記憶の中で、一美は中学三年のまま。母も、今より八歳若かった頃のまままだ。

一美については、五年半前に会った時、そして今の会話。大して代わり映え無いように思う。……母は、少し草臥れてしまったかも知れない。

『俺の、所為だろうな』 反省の思いが、浮かんで来た。

十七歳の誕生日を迎える前、家を飛び出し、一人暮らしを始めた、あの日。宏治の母、美由紀から託った封筒に入っていた、母からの手紙と十八万円。

あの時、始めて母親に対する感謝の気持ちが芽生えた。

それまでの自分は、家族の事を思い遣る気持ちや、感謝の気持ち等、感じた事もない、どうし様も無いガキだった。

父親とはよく、殴り合いの喧嘩をした。倉真の父は血の気が多い、手の早い男だった。……息子に対しては。

それが、父の愛情からの行動だったのだと、最近、漸く理解し始めた。反りが合わなかったのは、似た物同士ゆえの事だったのかも知れない。

整備工場の社長は、社員達の良き父親代わりだ。

特に早くから親元を飛び出してしまった倉真にとって、あの人の厳しさも、優しさも、思い遣りも、離れた父の事を思う、その切っ掛けだった。

社長の厳しさは、力技の厳しさでは当然、無いけれど。

夏のキャンプで知り合った、山内氏の事も。父親のことを考え直す、良い切っ掛けになった。人柄は、180度違う。

山内氏は、穏やかで物分りの良い優しい父親だった。

いくつかの出来事や切っ掛けを通して、倉真は漸く気持ちも固まった。

『親父と、トコトン話し合う』その決心は、利知未の言葉が、後押ししてくれた。

山内さんへの返事を、一緒にポストへ投函したあの時。

自分の家庭事情に不安を抱いている事を、始めて利知未は倉真に溢した。けれど、同時に。

「信じている」とも、言ってくれた。

その信頼に、キッチリ答える時期が、来たのかも知れない。

父の愛情にも、思いが至る事が出来始めた。今の自分なら父親と、逃げずに正面から話し合う事も出来るだろうと。……その思いが、今夜。

倉真の背中を、押してくれたのだった。

利知末が帰宅したのは、十時半頃だった。

倉真は実家への電話を切ってから風呂へ入り、その後からリビングでテキストを開いていた。勉強は勿論、続行中だ。

今月に入ってから、社長の娘婿から確認されていた。

「社長は、来年三月の試験を受けさせるつもりのようなのだ。念の為に聞いておくが、館川はそのつもりでやってるんだよね？」

資格試験の勉強については、この娘婿が面倒を頼まれている。

倉真の勉強状態を把握して、義父である社長へ定期的に報告している。

「その、つもりっすよ？ って言うか、俺に三ヶ月で試験勉強、終わらせるのは無理があるだろうって、言われたっす」

「奥さんか？」

「…そんな所です」

利知末の事を指して、奥さん、カミさん呼ばわりをされる事にも、流石に慣れ始めた。社員一同、全員がそう呼んでいる。

利知末の評判は、この工場内ではかなり良い。館川には勿体無い女性だと、口を揃えて言っている。

「館川のようなヤツにだからこそ、確りしたお嬢さんが丁度良いんだ」

と、社長からも少々キツメのお言葉を戴いた。

「大事にしるよ」 とも、諭された。あの飲み会の、翌日の話だ。言われるまでもない、と、倉真は素直に頷いていた。

帰宅した利知末を迎えて、倉真は夕飯の惣菜を温め直してやる事にした。その間、利知末は先に入浴を済ませた。

利知末の遅い夕食に付き合っ、倉真もダイニングで晩酌を始め

た。

利知未の食事風景を眺めて、その食べ方が昔に比べて随分、変わって来たと思うと、つい倉真が漏らしてしまった。

「何？ 昔は男らしかったって、こと？」

「宏治達と飯食ってるのと、アンマ変わらなかったよな」
「少しだけ剥れたような顔を見せ、利知未が言う。」

「努力を認めてくれない？ 別に良いんだよ、見てるのが倉真だけなら、昔みたいな食べ方しても。でも、こう言うのって普段から気をつけていないと、イザと言う時ばろが出ちゃうからな」

「イザと言う時？」

「色々。職場仲間と食事に行く時や、改まった席での会食の時とか。…後、将来のため」

「将来のため？」

「倉真が、今まで通りの食べ方で、あたしも昔通りだったら、将来、子供が出来た時、どうやって躾ける事が出来るの？」

「そんな先の事、考えてたのか」

「先の事だけど、確実にやってくる未来。……だと、あたしは思ってるけど？」

「成る様に、成るんじゃないか」

「いい加減だな。ま、いーよ。確かに、まだ随分、先の話しだし」

そう言って利知未は、昔の少々、豪快な食いつぶりを、久し振りに見せてくれた。租借して飲み込んで、悪戯坊主のような笑みを見せる。

「やっぱ、こうやって食った方が美味しいよな」

口調も少しだけ、昔に戻してみた。その様子を見て、倉真は面白そうに笑っていた。倉真の笑顔を見て、利知未も小さく笑った。

再び普通に食べ始め、明日の夕食の話になる。

「明日は、煮魚でもやろうか？」

「だったら、秋刀魚の塩焼きが良いな。大根おろしで」

「焼き魚だと、また倉真に焼いて貰わないと成らないけど」

「お陰で魚の焼き方、上手くなっただろ？」

「助かるよ。倉真が一人暮らしの時、自炊していてくれて良かった」

「明日は久しぶりに、俺が飯、作っておくか？」

「それは嬉しいな。遅出の時は朝、出来るだけ支度はしてくけど。偶には、のんびりさせて貰っていい？」

「構わネーよ。……悪いな。兼業主婦みたいな生活させて」

「そんな事は気にしない。コレも予行練習みたいなものでしょ」

「予行練習と言うか……。すっかり、嫁さんだよな」

「籍は、まだ入ってないけどね」

そう言って、利知末は小さく笑う。

「けど、結婚したら、もつと倉真に厳しくなるかも知れないよ？」

「覚悟しとくよ。……尻に敷かれるンだろーな」

「もう少し、お尻大きくしておこうかな。倉真が、逃げられないように」

「恐ろしい事、言っな」

「そう？ 愛情の深さだと、思い知つといて」

利知末のキツイ冗談に、倉真が情けない顔を見せる。倉真の表情を見て、利知末は面白そうに、くすくすと笑った。

利知末の食事が終わり、食器を片付け始めた。洗い終わり布巾で拭いた食器を、倉真が立ち上がり、棚へ仕舞ってくれた。

「いつも、ありがと」

「急に、何だよ？ 俺の方こそ、何時も感謝してる」

「……やっぱり、倉真で良かった」

利知末の呟きは倉真の耳に入ったが、照れ臭くて聞こえない振りをしてしまう。

棚の前に居る倉真を振り返って、利知末はシンクに軽く寄り掛か

る。

「本当に、結婚してから、優しい倉真で居てくれるのかな……？」
「努力する」

倉真は利知末に背中を向けたまま、短く答えた。

「うん」

返事を聞いて、利知末も小さく頷いた。

「あたしの晩酌、付き合つてよ」

「おお」

晩酌と言うよりは、寝酒かもしれない。リビングへ移動して、飲み始めた。

食事中の話が、結婚後の話に向いてくれていた。丁度良いタイミングだ。倉真は利知末とも、真面目に、これからの話し合いをしておこうと考えた。

何時も通り、寛いだ姿勢で飲んでいた。倉真が、何気なく言い出した。

「来週、実家へ行つて来る」

その言葉の意味を、改めて思う。……漸く、倉真の心が、決まったと言う事。

「そう。…話し合いに、行くんだね」

利知末の言葉に頷いて、倉真が真面目な声を出す。

「これからの事、話さないか？」

「うん」

頷いて、利知末は一人がけのソファへと移動した。

「甘えた姿勢じゃ、考えまで甘えてしまうよ」

穏やかな微笑を浮かべていた。グラスも、テーブルの上に置いた。

「お前らしいよ」

「で、倉真は、どうしたいと思ってるの？ 実家、継ごうとは考え

なかった？」

「それは、考えなかったな。……選択肢の、一つではあったけどな」

「考慮には、入れてたんだ」

「一応な。悩む事は無かったよ。俺には、俺の夢…、目標がある」

夢と言う言葉を、目標と言い直した。その言葉は、強い決心の表れだ。

「倉真の目標は、自分の整備工場を持つ事、だね」

「ああ。随分先の事には成るだろうけどな。それを目標に頑張るよ。ただ、お前の事が気になっている」

「あたしの事？」

「出来れば、医者を続けて行きたいんじゃないか？俺が本当に工場を持つ事が出来れば、どうしても利知未の協力が必要だ。……そうしたら、お前の夢はどうなる？」

倉真の言葉に、驚いた。同時に嬉しいとも思う。

「そんな事、気にしてくれてたんだ……」

「そんな事ってのは、無いだろ。俺が、将来やりたいことが有るのと同じだ。大事な事だろ」

「ありがとう。でも、あたしの将来設計は、いくつかあるんだよ。どう転んでも、後悔なんかしない」

きっぱりと、けれど笑顔で利知未が言う。

「パターン1 結婚して子供が出来たら、専業主婦に成る。倉真を支えながら、子供を育てる。パターン2 当分、兼業主婦で頑張って、将来に備えて出来る限りお金を貯める。子供は、目標金額が溜まるまで、お預け。どう見積もっても、三千万くらいは掛かるでしょ？半分か、責めて三分の一は貯めたいよね。残りは、借金する事に成ったって仕方ないだろうけど……」。

事業を始めるって、そう言う事でしょ？幸い外科医は稼げそうだから、七、八年も頑張れば、貯められると思うし。それでも、あ

たしは三十三歳か、三十四歳？　子供は、三十五歳位までに産めれば、何とか成るでしょ」

利知未がそこまで考えてくれていた事に、倉真は驚いていた。

「どっちにしろ、子供は欲しいんだ。昔、自分が果たせなかった夢を、子供に託しているから」

「夢？」

「家族揃って、仲良く暮らす事。……変かな？」

「いいや。……良く、解るよ」

「うん。で、後は……。もしも倉真がお父さんと話し合って、やっぱり実家へ戻る事になったとしても、着いて行くよ。その場合は、ご両親や妹さんと同居になったって全然、気にしない。返って大家族になれて、幸せかもしれない。……そんな風に、思ってる」

「お前の夢は、医者を続ける事じゃ無いのか？」

「それも良いなってると思う。けど、あたしの一番の夢は、倉真と支え合って、幸せな良い家庭を作る事だから。……だから、倉真が元気で傍に居てくれるのなら、その他の事は、どーとだってなる。

倉真が自分の目標に向かって頑張るのなら、あたしは、それに協力して生きたい。……それって、倉真には、重過ぎるかな？」

「お前は、本当にそれで良いのか？　納得出来るのか？」

「勿論。だから倉真は遠慮なく、自分の遣りたい様に遣ってよ。

あたしには、それが一番、嬉しいよ。……でも、重荷になるよ。うだったら」

「お前が俺の、重荷になる訳が無いだろ。俺の方が、利知未の夢の邪魔になるんじゃないかと、思ってたよ。……本当に、良いのか？」

「良いに決まってる。プロポーズをして貰って、倉真の家庭の事情を聞いた時から、あたしはもう、決心してたよ。……それに、まだまだ、やる事一杯あるし！　悩んでたって、どうにもならない事は、もう悩まない。だけど、研修医だけで終わるのは、裕兄と

の約束を違えてしまうから……。それだけは、もう少し待って」
「当たり前だ。お前に結婚、申し込んだ時から、んな事は承知の上だ」

言い切ってくれた倉真が、今まで以上に遅しく見えた。

「ありがとう。……ごめんね」

「何が？」

利知未は、少し躊躇った後、違う質問を返した。

「倉真、……子供、好きかな？」

「嫌いじゃねーよ、ガキにはモテるみたいだな。……お前との子供だったら、溺愛しちまうだろうな、……きつと」

一美を溺愛していた、父親の姿を思い出した。……あの血は、自分にも流れている訳だ。自分で自分の将来の姿に、少し怖氣が走るような気がした。

「甘過ぎるお父さんには、成らないでよね？」

利知未は、可笑しそうに笑いながら言った。

「どうかな？ 保障は出来ネーな」

親父の姿を思い出して、呆れ半分、笑ってしまった。……あれは、きつと。将来の、自分の姿だ。利知未も一緒になって、暫らくクスクスと笑っていた。

……伝えたい思いが、利知未の心へ溢れ出す。

笑いを収めて、穏やかな微笑を浮かべる。

「……ありがとう。私の事を、見付けてくれて……」

「ヘンな言い方、するな」

倉真も笑いを収め、問い掛けを返す。意味の判らない顔をしている。

「そう？ ……私の中の、悲しい部分を見付けてくれたのは、倉真だけだよ」

「突っ張り過ぎだったんだ、お前は。本当は随分、女らしい所を

持っていた癖に、人に見せようとしなかっただろ」

「どうしてだろうね」

軽く肩を竦めて見せた。心の中には、一つの答えが、浮かんで来た。

『きつと、倉真に出会うため……』

「お陰で俺は、ライバル無しで、お前を手に入れる事が出来たよ」

「…なんか、くすぐったいな。そー云う言われ方」

「俺も、照れ臭い」

「だったら、言わなきゃ良いのに」

「言わなきゃ、伝わらないだろ」

「そうだね。……倉真のそう言うところ、大好きだよ」

「どう言う所だよ」

今度は倉真が、くすぐりたい。

「思ったこと、率直に言ってくれる所」……言いたくない事は、意地でも言わないけれど。

改めて話し合って、倉真は利知未と出会えた事に、心から感謝をした。

『俺みたいなヤツには、利知未くらい確り者の嫁さんが、丁度いい』社長に言われた言葉を、心の中で反芻していた。

家族に多大な心配と、迷惑を掛け続けた、どうし様もなかった少年時代。身近な両親の事でさえ思い遣れなかった、幼過ぎた自分。夢や希望も無く、ただ、現実から逃げ続けていた、ツマンねーガキだった。

変えてくれたのは、利知未だ。

そして、自分の夢を、一緒に見ようとしてくれている。

『心から、大切にしたい、女』

出会えたのは、奇跡かも知れない。……それとも、必然なのだろうか？

『何にしても、氣い、引き締め直さネーとな』 来週、父親に会いに行く。

自分の夢と生き様に、理解を示して貰えない限り、何日でも、何ヶ月でも、何年でも……。

『通い続けて、納得させる』 誤魔化しは、もうしない。 逃げ出す事も、したくない。

コレまで随分長い事、逃げ続けて来た。 そろそろ、戦わなければ成らない。

「話し合いは、ここまでで良いのかな？」

じっと何かを思い、止まっている倉真に、利知未が優しく声を掛ける。

「そうだな、ここまでにしよう。……後は、親父に会ってからだ」

「うん。 健闘を祈ってるよ」

テーブルからグラスを持ち上げ、乾杯の変わりに軽く掲げて見せた。

「隣に、来ないか？」

頷いて、倉真の隣に戻った。 落ち着く姿勢になる。

利知未の重みを感じて、現実を思う。 それは、明日への活力に成る。

『守りたい女が居るから、強くなれる』

始めは、恋人。 結婚して嫁さんに成り、子供が出来て、母親に成る。

そして、守るべき命が、増えて行く。

男は、その命達の為に頑張れる。 守り通す力が必要に成り、備わって行く。

『それで、やっと親父と肩を並べて、酒を飲める様に成るのかも知れない』

それまで後、何年掛かるのやら……。

『こつちが片付いたら、利知未のお袋さんか』

「何、考えてるの？」

「……こつちが片付いたら、お前のお袋さんに、『娘は貰った！』って言つて、高笑いをしてやらないとな」

倉真の言い様が可笑しくて、声を上げて笑ってしまった。

「へびメタだね。……けど、普通は、『お嬢さんを下さい』じゃ、無いの？」

「俺は、貰ったっ！ て言つつもりだぜ？ ……パスポート、取らないとな」

冗談を返してから、真面目な顔になった。

「そうだね。…あと、優兄の所にも、高笑いしてあげて」

「それも良いな。『妹は貰った！』ってなるのか？ ……裕一さんの、墓参りもな」

「……うん。ご迷惑、掛けます」
「何が？」

「家族が揃つて住んでいれば、一日で終わるでしょ？」

「そんな事か。迷惑って事はないよ」

「面倒掛けます、かな？」

「そつちの方が、近いのか？」

「どーだろー？ ま、どつちでも良いか」

「国語能力にも、欠けてるからな。俺も、良く判らネーよ」
首を竦めた倉真を見て、利知未が笑った。

笑いが途切れて、倉真が、利知未の身体を確りと抱き寄せた。

「……激励の言葉、聞かせてくれよ？」

小さく頷いて、利知未が答えてくれた。

「倉真、信じてるよ。……頑張つて！」

「サンキュ」

「……けど、何かあったら、ちゃんと相談してよね？ 一人で、無理しないで」

「何よりも、心強い味方だよ」

「……うん。あたしは最近、倉真に甘え過ぎてるから。 偶には、甘えてよ？」

「十分、甘えてるつもりだけどな」

「そう？」

「ああ。世話、掛けっ放しだよ。……お前、俺より先に、死ぬなよな？ 何にも出来なく成っちまいそうだ」

「……それは、倉真が約束して。……あたしよりも、一分でも、一秒でも良いから、長生きしてね……？ もう、大切な人を失うのは、耐えられないよ……」

「約束が、食い違つちまうな。 二人同時に逝くしか、無さそうだし」
微かに、笑みが漏れてしまった。

「随分、先の話だけどね。……それまで仲良く、一緒に生きて行こうね？」

「その約束が、無難だな」

指切りをして、約束のキスを交わした。

「……ベッド、行くか？」

「……うん」

頷いて、ソファから立ち上がった。

確りと、お互いの存在を感じながら、朝まで熟睡した。

明け方近く、利知未は夢を見た。

数年先。今よりも歳を重ねた二人が、幼い子供二人と、倉真の新しい城の前で記念写真を撮っていた。

シャッターを押していたのは、準一だった。

子供は、男の子と、女の子。男の子は、倉真にそっくりだ。

女の子は、利知未に似ている。

悪戯盛りの子供達を叱って、名前を呼んでいた。カメラを、興味深そうに眺めて、手を出している男の子。

男の子が、三脚を倒してしまう。準一が、ビックリした顔をしている。

利知未に叱られて、男の子は首を竦めていた。女の子は、兄の悪戯と叱られている姿を見て、イチヨ前な顔をして、手を腰に当てていた。

「ほーら！ おこられた！」

「ウルセー！」

妹の頭を軽く小突いて、また利知未から怒られる……と、思ったら、倉真が女の子に駆け寄って、兄に殴られた頭を撫でてやる。女の子は中々、気が強かった。涙一つ溢していない。

倉真は男の子に、父親の愛の鉄拳を、見舞っていた……。

利知未は夢の終わりに、目覚まし時計よりも早くに目覚めてしまった。

何時か、夢の光景が現実となっている事を、心から願ったのだった。

3 研修医一年・十一月

3 研修医一年・十一月

—

翌週の水曜日から、十一月に突入だ。倉真は月が変わって直ぐに、仕事帰り、実家へ通い始める。実家まで、どう頑張っても片道一時間半は掛かる。往復三時間も掛けて通い続けた。

一日目。仕事を七時半に上がり、実家へ九時過ぎに到着した。『随分、久し振りだ……』少し、外壁や屋根瓦が色褪せた様にも見える。かつての自分の部屋は、真っ暗なままだった。隣の一美の部屋からは明かりが漏れている。

バイクを降り、暫し躊躇った。

呼び鈴を押さずに、玄関の扉に手を掛けてみた。鍵は開いていた。無用心だな、とは思うが、自分が来るのを見越して、母が開けたままにしておいてくれただけでも知れない。

軽く息を吸い込んで、声を出した。

「ただいま」

今晚は、お邪魔します。……そう、おとないを入れるのは、やはり違う。

スリッパの音を響かせて、母が奥から姿を現した。

「お帰り」

微笑んで、数年振りに戻った息子を迎え入れた。

『随分、老けたな』あの頃よりも少し白髪が増えて、少々、面痩せしてしまった様だ。

……自分が、心配ばかりさせて来てしまった所為かも知れない。

七年半振りに姿を表した息子は、まともな頭に戻っていた。背も、あの頃より7、8センチは伸びている様だ。身体も随分と逞しく育ってくれていた。目頭が熱くなった。

「ご飯は？」

「まだ、食ってない」

「そう。じゃ、直ぐに準備してあげるよ」

そう言つて背中を向けて、キッチンへと向かう。目隠しの暖簾を潜ろうとして、軽く振り向いた。

「ほらほら、何時まで玄関先で立ち尽くしているの？」

「……ああ。そうだな」

気が戻つて、倉真は漸く靴を脱いだ。

ダイニングキッチンで、母に促されるまま椅子へ掛けた。

「親父は？」

「今、お風呂よ。あんたが来るから、もう少し早めに入ればって言つただけだね。どういう顔をして会えば良いのか、解らないみたいよ」

夕食を準備しながら母が言う。

「そうか」

母に給仕されて、数年振りに懐かしい味を口にした。カツ丼が出て来た。

「あんたが、好きだったからね」

一口箸をつけ、勢いが付いてガツガツと食い始める。腹は減っている。母は、その食いつぶりを嬉しげに眺めていた。

一美が、自室から降りて来た。

「お兄ちゃん！ お帰り」

「おお」

食いながら、短く返事をする。

「何よ？ その態度。 久し振りに帰って来たんだから、何か他に言う事は無いの？」

「…おお」

「暫らく見ないうちに綺麗になつたな、とか。 迷惑掛けて悪かった、とか。 いくらでも有るでしょうが」

「相変わらず、煩せーな」

兄の言葉に、一美は剥れた顔を見せた。 向かいの椅子へ腰掛ける。

「お茶、入れようか。 美味しいお煎餅、見つけたのよ」

「自分でやるよ。 お兄ちゃんも、飲む？」

「ついでに頼む」

倉真は最後の一口を、口へほおり込んだ。 吸い物に口をつけている。 母は空いた器を下げる。

「お代わり、どうする？ カツはもう無いけど」

「いや、いい。 アンマ食い過ぎると、頭、回らなくなりそうだ」

一美が茶を出してくれた。 母の分も入れて、煎餅に手を伸ばす。

「て言うか、お前、そこで寛いでる気か？」

「何で？ ああ、お父さんと話をしに来たんだっけ？ 大丈夫、邪魔しないから。 どうせ、居間で話すでしょ？ お母さん、洗い物やっただけから少し休んだら。 お兄ちゃんに言いたい事も一杯、有るでしょ？」

「……言いたい事なんて、何にも無いよ。 こうして元氣に戻って来てくれたから。 ……顔見たら、ほっとして、言いたい事も忘れちゃったわよ」

倉真の食器を片付け、洗い始めた。

「甘いんだから。 お兄ちゃんが居ない間、結構、大変だったんだよ」

「文句は、今度ゆっくり聞いてやるよ。 親父、遅いな」

「お風呂で、上せちゃってたりしてね」

「ちょっと、見てくるわね」

食器を片付け終え、母は浴室へ向かった。

脱衣所から妻に声を掛けられ、湯船に浸かったまま返事をした。

「もう、来るのか」

「待ってますよ」

「そうか。居間で待たせておけ」

「はい、判りました。お早く」

「……」

「晩酌の準備、整えて置きます」

「…頼む」

それから暫らくして、漸く風呂から出て来た。

居間に移動して、父親を待った。程なくして、風呂上りのこざっぱりした様子で、父親が現れる。昔は大きく見えていた身体が、縮まった様な印象を受けた。自分の身体が、大きくなっただけでも知れない。

無言で何時もの場所へ座り、晩酌を始めた。母は倉真の分も、グラスを用意していた。父は何も言わずに、倉真のグラスへビールを注いだ。

「……仕事は、真面目にやってるのか？」

グラスの半分を飲んで、漸く父が口を開いた。

「ああ。真面目に、やってるよ」

息子の、手付かずのグラスを見て促した。促されるまま、一気に飲み干した。二杯目を注がれる前に、倉真が父親のグラスへビールを注いだ。

「バイクだからな。あんま、飲めないよ」

「…そうか」

その日は、殆ど何も話が出来なかった。お互いに何からどう切り出すべきか、考えが纏まらない。

一時間ほど静かに晩酌に付き合って、倉真が立ち上がる。

「帰るのか？」

「明日も、仕事だからな」

「そうか」

引き止める事も無い。それは、照れ臭い。妙な感じだ。

「明日、また来るよ。……結婚したい人が出来た。先の事も確

りと話し合いたい。……もう、逃げ出す気も無い」

「……一人前な事を、言う様になっただな」

「親父の、息子だ」

「……一人で勝手に、育ったような顔をしゃがって」

自分の事よりも、妻の事を思い遣つての言葉だ。小さく首を竦めて、倉真は静かに居間を出た。

玄関で靴を履いている所へ、母が見送りに出て来た。

「もう、帰るの？……お前の部屋、ちゃんと掃除してあるよ」

暗に、泊まって行けば良いと言っている。

「ここからじゃ、職場まで遠過ぎだ。明日、また来る」

「そう。十分、気を付けて帰るのよ」

「ああ。飯、ご馳走さん」

「明日は、何作っておこうか？」

「そうだな。……酢豚、作ってくれるか？」

「アンタ、酢豚は余り食べなかったわよね」

「……最近、好きになった」

「そう」

「パイナップル抜きで、頼むよ」

母が作る酢豚には、パイナップルが入っていた。その味が、少しだけ苦手だった。利知末のパイナップル抜きの酢豚は、素直に美味しいと思った。

「判ったよ。……あんた、あれが苦手だったんだね」

母親は、始めて知った。息子はただ単に、酢豚その物が苦手なのだと思っていた。

「…みたいだよ。じゃーな、お休み」

玄関を出て行く、その後姿をじつと見つめた。息子の姿が扉の向こうへ消え、バイクの音が聞こえ出し、遠くなるまで。

じつと、扉を見つめていた。

居間に戻ると、夫が一人で、晩酌をしている。

「帰ったか？」

「明日、また来るって言っていました」

「……飲まないか？」

倉真が使ったグラスを片付けかけた手を止め、座り直した。

「偶には良いですね」

夫が片付けかけたグラスに、ビールを注いでくれた。

「戴きます」

妻が一口、口をつけてから、徐に呟いた。

「俺の、息子だと」

「当たり前です」

「……そう言う意味じゃない」

無然とした夫の顔を見て、微かに笑ってしまった。

「……そっくりだわ」

「あの子、ご馳走さんって、言ってから帰りましたよ」

「それが何だ？」

「あの子が、小学校二年生の頃以来、久し振りに言ってくれました」

「…そうか」

「はい」

妻がビールを飲み干したグラスに、再び黙って勺をした。戴いて夫へ勺を返した。軽くグラスを掲げ、乾杯の仕草をして二杯目に口を付けた。

「少しは成長して、帰って来たんだな」

「あなたの息子です」

「…解っている」

そう言つて夫は、少し満足そうな顔をして、ビールを飲んでいた。その夜、母親が静かに、涙を流していた。一美は、その姿を目撃していた。

十二時近くなり帰宅した倉真を、利知未は笑顔で迎えてくれた。

「お帰り。…お疲れ様。ご飯、どうした？」

「食つて来た」

「そう。じゃ、明日の朝ご飯に、回していい？」

「ああ。明日も、遅くなる」

「うん、判つた。じゃ、倉真の晩御飯は、作らないでよくよ」

「それでいい。風呂、入ってるか？」

「着替え、出しておくよ。直ぐ入る？」

「そうする」

話しながら、リビングへ戻っていた。頷いて、利知未は倉真の着替えを準備し始めた。

利知未は今日まで三日間、通常勤務だった。

今日は少し残業になつてしまい、帰宅したのは八時近かつた。

明日、明後日が休みで、その後、夜勤が三日続く。

風呂から上がった倉真と、少しだけ酒を飲んで話をした。

「お袋、少し老け込んだじまつてたな……」

何気なく呟いた。利知未は、倉真の顔を黙って見つめた。

「親父も、なんか縮んじまつたみたいだった」

「倉真が、大きくなつたんだよ」

「……ああ」

「喧嘩、しないで来れた？」

「喧嘩してたら、今頃、顔、腫れてるぜ」

「そう?」

「ああ」

微笑した利知未を見て、真面目な顔になる。

「必ず、話、通してくる。何日かかっても」

「何ヶ月だって、待ってるよ。頑張って」

「おお」

「……信じているから」

「サンキュ」

寄り添っていた利知未の肩を、確りと抱き寄せた。

二日目。今日は昨日より、早くに仕事が終わった。真っ直ぐ実家へ向かう。

今日も、母が夕食を準備して、待っていてくれた。倉真のリクエスト通り、パイナップル抜きの、酢豚を作ってくれていた。

「パイナップルの代わりに、お肉どうやって柔らかくしようか、悩んじゃったわよ」

「……利知未は、酒、使ったって言うてたな」

「……あんたのお嫁さんにしたい人は、利知未さんって、言うのね」
言われて、利知未の事はまだ名前さえ伝えてなかった事を思い出した。

「そうだよ。瀬川、利知未って言う」

「歳は、一つ上だって?」

「一美から聞いたのか?」

「そうだよ。お医者さんだって言うじゃないか。あんたが、そんなに頭の良いちゃんとした人を、どうやって見つけたのかって。

一美が不思議がってたよ」

「……家出る前からの、知り合いだよ」

「そうだったのかい?」

ビックリして目を丸くしている。あの、どうしようもなかった頃

の息子を、知っていたと言う事だ。……随分、懐の大きな女性なのかも知れない。

「昔から随分、世話になった人だ」

「……そうかい」

「人柄は保障するって、言っただろう」

「そうだってね。……あんだ、何にも教えてくれなかったから」

「聞かれなきゃ、照れ臭くて言えネーよ」

言葉通り、少し照れ臭そうな表情をする。無言で空の飯茶碗を

差し出す。

「本当に、酢豚、好きになってたんだね」

「ああ、あいつの飯が一番、上手いよ」

その言葉には、少しだけ焼き餅のような感想を持つ。

「…お袋の飯、別にしてだぜ？」

少し慌てて、そう付け足した。

『昔から、本音は優しい子だった』捻くれてしまう前から、腕白で怪我ばかりしていたが、母親や妹の事は、それなりに大事にしていたと思ひ出す。

その、昔の優しさまで取り戻してくれた女性らしい。

「会つのが、本当に楽しみだよ」

言いながら、山盛りに飯を持った茶碗を倉真に渡した。

二日間、成長した息子を見て、まだ顔も知らない息子の選んだ女性に、心から感謝をする事が出来た。

風呂を上がった父親と、今夜も晩酌を付き合った。

母と話をしていた事で、今日は利知未の事から話を始めようと、気持ちを決めた。

「昨日、言った結婚したい人。今度、連れて来たい。ただ、親父に俺の目標を納得して貰ってからでないと、連れては来れない」利知未の事を、思い遣つての考えだ。

母親と妹に関しては、心配はしていない。問題は、父親だけだ。
「目標だ？ 戻る気は無いのか？」

息子から切り出されたので、父も話がし易くなった。

「親父は、まだ俺に跡を継がせたいと、思ってるのか？」

「それが、普通だろう」

頑固さは、昔から変わらない。以前なら、その一言で大喧嘩だ。

「家は、一美に婿でも取って貰ってくれ」

「勝手な事を言うな」

「……俺は、昔から勝手なヤツだよ」

反射的に、父の手が上がる。殴りつける前に、思い止まった。
手を拳にしたまま、座卓型炬燵の上に音を立てて置いた。

「話し合いだ。喧嘩は、する気は無い」

父親の態度を見て、倉真は真っ直ぐに、その目を見据えた。

「良い根性をしているな」

「根性は親父譲りだ」

睨み合い、そう交わす。父親が、始めに視線を逸らした。

「許さん」

「許す許さないの前に、俺の目標には聞く耳、持たないのか？」

「聞くだけ無駄だ」

「…そうか」

暫らく、間を置いて考えた。それでも、倉真は言った。

「俺の目標は、自分の整備工場を持つ事だ。彼女も、応援してくれている。だから、まずは親父に納得させないと、連れては来れない」

「……」

「親父とも、仲良くやれる事を期待している。……俺よりも、彼女の為に」

「…生意気だな」

「何日でも、通って来るぜ。彼女も、待っていてくれる」

「……勝手にしろ」

「勝手にするよ。……今日は、もう帰るよ。明日、また来る」

「……」

父親は、無言でビールを煽り飲んだ。

居間の外で、一美が聞き耳を立てていた。

「お前、何やってるんだ」

「え？ 情報収集。お兄ちゃん、ベタ惚れ？」

「……惚れてるよ。じゃーな」

少し照れた顔でそう言った兄の背中を、一美はニヤケ顔で見送った。
母親が、呆れ顔で奥から出て来た。

「一美、何してたの」

「情報収集。お兄様、お帰りです。お休み」

態と丁寧な礼をして、一美は自室へ戻って行った。

「全く、あの子は……」

「変らネーな」

「お陰で、あんたが居なくなっただけから賑やかだったよ」

「……そりゃ、感謝しないとな」

「明日は、何が食べたい？」

「何でも良いよ。……親父とは、長期戦になりそうだ」

「そんなの、解り切ってる事でしょう？」

「そりゃーな。……久し振りに、お袋の飯が食えて嬉しいぜ。こ」

馳走さん」

「どう致しまして。明日は、カレーにでもしようかね」

「期待してる。じゃーな」

「気を付けて帰るのよ」

短い返事をして、倉真は玄関を出て行った。

翌日は休みだ。一美は現在、兄が住んでいる辺りの大学病院を、調べてみる事にした。通勤可能な範囲の病院を、幾つかリストに上げた。

『一番近いのは、西横浜医科大学第二病院、か。だけど、職住近接って中々、無いよね。……他の病院の方が、確率高いかも』

一応、総合病院も二つ三つ、ピックアップしておいた。

「お兄ちゃんが連れて来るまで何て、待っていられませんよね」

くすりと笑みが漏れる。昨夜の兄の話を廊下で立ち聞きしていて、興味は益々、深まるばかりだ。

あの兄が、あれ程に惚れる相手とは、どんな女性なのか……？

昨夜の様子を見る限り、父親との話し合いは、本人も言っていた通りかなりの長期戦になる可能性が高い。下手をしたら月跨ぎ、歳跨ぎだ。

好奇心旺盛な血は、治まる場所が無い。その上、一美は中々の行動派だ。

『明日から、調査開始！』大学の後に、捜しに行ってみようと思う。

明後日は日曜だ。明日、見付からなくても、翌日は一日、探す事が出来る。こんなチャンス、逃すモンじゃない。

『絶対に、来週中に見付けてやるんだから！』と、一人勝手に闘志を燃やしていた。

三日目。祝日でもあり、倉真は何時もより早めに実家へ行く事にした。

利知末も、今日は休みだ。二人でのんびり過ごしたい気持ちもあるが、今の倉真の状況を見て、我が俣を言っている場合ではない。朝食を食べながら、話をした。

「休みは将棋か釣りだって、言ってたな」

母の言葉を思い出し、倉真が呟いた。昔から、父親の趣味はその二つだ。

「偶には、釣りにでも付き合ってみたら？」

「そうだな。そう言う時の方が、構えずに話してくれそうだ」

「お弁当、作ろうか？」

言い出してくれた利知末の言葉に、甘える事にした。

「お父さんの分と、二人分の握り飯で良いか」

「良いんじゃないか」

「了解。腕により掛けて、愛情込めて握って上げるとしよう」
笑顔で、軽い調子でそう言ってくれた。

利知末の用意してくれた握り飯を持って、昼前には実家へ着く。

父親には、昔からお気に入りポイントがある。母から、今日も多分そこだろうと聞いて、その場所へ向かった。

倉真が小学生の頃、父親が一本だけ買ってくれた釣竿が、自室の押入れの奥に仕舞いつ放しだった。思い出してケースごと引っ張り出し、誇りを払って背中に担ぎ持った。

自室は、あの頃のまま、それでも綺麗に掃除をされ、整えられていた。

「何時でも、泊まって行って構わないからね」

釣竿を担ぎ、家を出ようとする倉真に、母はそう言って送り出してくれた。

昔からのお気に入りポイントへ到着して、直ぐに父の背中を見つけた。

大きな体が、縮こまって見えた。考え事をしているようだ。

父は昨日、一昨日の息子との会見を思い、考えていた。

あの、どうし様も無かった長男が、随分、大人になって戻って来た。

妻の口から、どうやら息子が結婚したい相手と言うのが、余程、確りした女性であるらしい事を聞いた。跡継ぎの話は別にして、その女性には、会って見たい様な気持ちになって来ていた。

……けれど。

『……勝手な事を言い出しやがって』連れて来る前に、自分が息子の勝手を認める必要がある。それは、正直気に入らない。

……確りして戻って来たのなら、尚の事。

自分が腕一本で立ち上げ、軌道に乗せた商売を。その後を実の息子に継がせたいと思うのは、当然の親心だ。

「親父、釣れてんのか？」

後ろから声を掛けられ、漸く息子の存在に気付いた。

「この時間に、釣れると思うか？」

無然と答えて、釣糸の先を見つめる。

「もっと釣れる時間に、来りゃいいじゃネーか」

軽く鼻で笑って、慣れない手付きで自分の釣竿の仕掛けをし始めた。

梃子摺っている様子を横目で見て、父が言う。

「相変わらず、下手だな。……釣りは、やらなかったのか」

自分達と離れて暮らしていた、七年半の内に。

「ダチが、好きだったからな。偶には付き合った」

「……お前は昔から、堪え性がなかったな」

「親父の血だろ。俺は親父が釣りをするのが、不思議だぜ」

「違うもんだ。釣りは、魚との我慢比べとっているからな」

「そう言うモンか？」

倉真は漸く、川面へ釣り糸を垂れる事が出来た。

「我慢比べなら、負けて溜まるかと思うもんだ」
その理由に納得して、倉真は小さく笑ってしまった。 親父らしい。

三十分ほど頑張ったが、やはり倉真には、釣りは向かないらしい。釣糸を垂らしたまま竿を置いて、地面に仰向けに寝転がってしまった。その様子を見て、父は微かに笑ってしまう。『始めて釣りに連れて来た時と、同じ事をしやがる』 遠い風景を思い出していた。

もう、十五年以上も前の事だ。 息子が小学校の、低学年の頃だ。

父の雰囲気を感じて、倉真がそのままの姿勢で、話し出した。

「何年振りだ？ 親父と、こうやって呑気にしてんのは」

「…… 忘れた。 昔の事過ぎる」

「…… そうだな」

そのまま、暫らく沈黙が流れた。 倉真の腹の虫が、鳴き始めた。

「腹、減らねーか？」

「もう昼か」

太陽の傾きを見て、父親が答える。

「弁当、持たされた。 親父の分も有るぜ？」

「母さんか」

「いや。 彼女に、だ」

言いながら、起き出して弁当を広げ始めた。 水筒もある。 使い捨てのお絞りまで、確り入っていた。 沢庵付きだ。 何時の間に、買ってたのだろう。

「流石、利知未だな」

大きな握り飯が、八個。 倉真の食欲から、父親の食欲も考えて、それくらいは必要だろうと考えたらしい。

握り飯を包んであったホイルを開いて、父親へ渡した。

「…… 戴くとするか」

「そうしてやってくれ」

水筒の内蓋に茶を入れて、それも父へ渡す。お絞りを使って、手を拭って受け取った。……確かに、確りした娘さんらしいと、父親は感じた。

腕白者で考え無しの息子には、丁度良い相手かも知れない。

握り飯の形も、硬さも、上手な物だった。具が、たつぷりと入っていた。

二人で八個の握り飯を、綺麗に平らげてしまった。

「……どんな、お嬢さんなんだ？」

「会いたくなつて来たか？」

「……そうだな」

「んじゃ、俺の目標も理解したって事か？」

有り得なさそうだが、一応、突っ込んでみた。

「それとコレとは、話が別だ」

「そーかよ、頑固だな」

父は、息子のぼやきは、聞こえない事にした。

まだもう少し、時間が掛かりそうだと、倉真は思った。

翌日、一美は行動を開始した。

利知未は、その夜から夜勤だった。翌日の日曜も当然、仕事だ。

倉真は今日も仕事後に、父親との会見に赴いた。その日の会見も特に得る事は無かった。自分の目標については、伝えられる限り伝えて来た。

明日また来ると言い置いて、実家を後にした。

通い始めて五日目の日曜は、午前中から父親の趣味に付き合った。
「流石に、将棋は解らねーな」

「教えてやる」

そう言われて渋々ながら、働きの鈍い頭にルールを叩き込んだ。

しかし、やり始めて一時間も経つと、負けず嫌いに火が着いてしまった。

「お前じゃ、相手に成らん」 そう鷹揚に言い放った父親に、その後、五連敗してしまった。

朝からの合計で、見事に十連敗だ。 当たり前だった。 父親は趣味の仲間内でも、中々の兵らしい。 負けず嫌いの倉真も、流石に精力を使い果たしてしまった。

数日間、通い続けて来た長男に、父親は徐々に打ち解け始めた。そこから漸く構え抜きの、本音の話し合いが始まった。

言い分は、何処まで行っても平行線を辿る。 それでも利知未との結婚については、良い方向へ進み始めた。 やはり、跡継ぎ問題が難関だった。

「お前が結婚して家に戻って、修行を始めれば問題ない」

「俺の目標は、変らない。 家は、一美に譲る」

「相手は、お前が戻る事になっても構わないと言っている」

「俺の夢を、応援するとも言ってくれている」

「つまり、お前の意思次第と言っ事だろう」

結局、そこが終着点だ。 倉真の意思は変わらない。

将棋版を挟んで、次の一手を指しながら、そんな事を言い合っている。 偶にお茶を入れ替えに現れる母親は、半分呆れ顔だ。

昔の様に殴り合いが始まらずにいてくれるのは、有難い事ではある。

夕食まで済ませて、今日も倉真は帰宅する。 帰り際、母親が言

った。

「私は、倉真のやりたいようにしてくれて構わないよ。お父さんには、私からも折を見て、説得するからね」

「……済まない。お袋」

我を張れば、そんな事はしなくて良いと言ってしまふ所だ。それでも今は、母親の援護射撃も必要なのは確かだ。……母の、思い遣りも解る。

「私は早く、あんたのお嫁さんに会って見たいんだよ。是非、お礼も言いたいと思っているからね」

「俺も、早く連れて来たいと思ってるよ」

そう言つて、玄関を出て行く息子に、母は確りと頷いてくれた。

一美は二日間、利知未を探して、幾つかの病院を回っていた。

日曜も収穫は無く、明日はついと兄の現住所近くの、大学病院へ当つて見ようと決心していた。

『大学終わってからじゃ、遠過ぎるし。……ま、いいか。サボっちゃえ！』

何時もの通学時間よりも早くに家を出て、朝から探し始めようと決めた。

両親にも、当然、兄にも内緒の行動だ。倉真に知れたらトンでもない事に成るのは、目に見えている。

『……けど、会いに行って迷惑に成ったら、どうしよう……？』

そうも思う。それでも、見たい。話をして、どんな人なのか自分の目で確かめたい気持ちの方が、勝っている。

『人柄は保障するって、お母さんに言つてた訳だし。きっと、大丈夫！』

あの兄を、見事に操縦している。その手並みも興味の対象だ。

是非とも会って、その人物を確認したいと、本気で思っていた。

三

六日、月曜日。朝八時、一美は大学をサボって、横浜市西区に来ていた。

八つピックアップしていた病院の内、既に五つを当たり全てハズレだ。尋ね人の特徴は、外科の研修医で、女性。その時点で、殆ど全滅だった。

漸く手応えがあったかと思えば、身長が足りない。兄は、背の高い美人研修医だと言っていたのだ。

自分も、166センチはある。中学時代から高校まで、その長身は、部活動で続けて来たバスケットボールには有利な武器だった。高校からは、相手チームの選手達にも有る程度の長身が揃っており、その中では平均的な身長となってしまった。それでも一般的に見た時、背が高い女性と表現されるのは、恐らく165センチ以上。

ひとつ前に当たった候補者は、ギリギリ160あるかないかの、身長を持ち主だった。失礼ながら、美人と言う評価にも足りない物を感じた。

『お兄ちゃんの彼女が、本当に大学病院の研修医だって言うのなら、ここが実質上、最後の候補だ』

あと二つは、念の為、数に入れておいた総合病院である。大学との繋がりも、有る事は有る。けれど病院名に、その名を掲げては居ない所だ。

病院の裏手に回り、夜勤明けナースでも捕まえてみようと考えた。

病院名のリストを片手に、地図を眺めながら建物の裏口を見張っている女子大生の姿は、傍からの見た目、やや不振人物と言えるかも知れない。

その日、利知未は夜勤明けだ。八時半には、病院を出た。裏門付近で髪をポニーテールにした背の高い女性に、視線が留まる。『透子と、同じくらいの身長だな』 先ず、そう思った。

懐かしいついでに、別の誰かを思い出す。誰かを探しているらしい。利知未は、声を掛けてみる事にした。

有り得なさそうだが、仮に何か怪しげな事を考えている人物だったとしても、不思議ではない。自分なら、もしそうだった場合でも対処は利く。

一美はこちらに歩いてくる人影を見て、一瞬、男性かと思った。単純に、身長がそれ位だったからだ。利知未は髪もショートなので、朝晩の冷え込みにコートを羽織るこの時期、遠目に見誤ってしまったても、仕方が無い事だ。

顔立ちがハッキリし始めて、漸くその人物が女性だと気付いた。

「お早うございます。何方かの、お見舞いですか？」

利知未は、先ずは軽く笑顔を見せて挨拶をした。

「お早うございます。お見舞いでは無いのですが、人を探しています」

一美は素直にそう答えた。別に、怪しい事を考えているのでは無いのだ。焦る必要は無い。声を掛けてくれた女性は、美人だった。

「人探し、ですか。この病院に、勤めているのですか？」

「それが、良く解らないので困ってます。ここは、西横浜医科大学第二病院ですよね？」

「そうですけど。勤め先も解らないで、人探しですか？」

少し面食らってしまった。けれど、その素直な物言いと雰囲気、下宿仲間だった里真を思い出す。髪型も同じだ。

「この辺りの大学病院か、総合病院に当りを着けて探しています」「手掛かりは、他には無いのですか？」

少々、妙な話では有るが、興味も出て来てしまった。彼女の顔には、親近感も覚える。

何故なのか？ それは、まだ自分でも判然としない。

「手掛かりは、大学病院に勤めている、二十五歳くらいの女性研修医。背が、高いらしい事、……それと、美人らしいと言う事」利知未は話を聞いて、首を傾げてしまった。

名前も知らない相手を朝も早くから捜し歩いている、若い女性。恐らく、女子大生。

……目的は、何なのだろう？

一美は、何と無くピンと来る物を感じ始めていた。

「あの、貴女は看護師さんですか？」

「いいえ、医師です。背は、私も高いとは思いますが」

「もしかして……、専門は、外科じゃ有りませんか？」

「何故、そう思ったの？」

「勘です。貴女も美人、……じゃなくて、お綺麗ですね」

ニコリと微笑んだ。

利知未は面食らった。けれど同時に、笑ってしまった。

「どうも」

その女性は、笑顔も素敵だった。……この人が兄の相手なら嬉しいな、そう思う。賭けに出る事にした。

「あの、つかぬ事を伺いますが、……館川 倉真と言う名前、ご存知では有りませんか？」

倉真の名前が出て来て、利知未は驚いた。……そう言えば。

「ごめんなさい。私は、瀬川 利知未と申します。貴女、お名前は？」

「あ、すみません！」

慌てて頭を下げた。

「私、館川 一美と申します。倉真と言うのは、私の兄なんです」

利知未は、一気に納得してしまった。

一美の顔、どこか親近感を覚える筈だ。目が、倉真にそっくりな釣り目だった。勝気そうな眉も、少しだけ似ているかも知れない。背が高いのも、頷ける。恐らく館川家は、兄妹揃って長身なのだろう。

自分の家庭も、兄妹揃って長身だ。家系なのだろう。

けれど、どうして、こんな所まで来たのだろうか？

「お兄さんの、お友達を探しているの？」

貴女の探しているのは、私では有りませんか？ と、行き成り聞くのもどうかと思い、念の為そう問い掛けてみた。

「いいえ、彼女を……。うっん、もう婚約者なのかな？ その人を、探しています」

コレで、一美の尋ね人が自分である事を理解した。

「手掛かりは、大学病院の外科研修医で、二十五歳。背の高い美人という事だけなんです」

改めて言われて、利知未はまた小さく笑ってしまった。

『そんな風に、言ってくれてたんだ』 そう思う。

「美人かどうかは、あなたの判断に任せますが。多分、お探しの相手は、私だと思います」

「やっぱり?!」

「倉真の字、倉庫の倉に、真実の真でしょう？ 貴女のお名前は、

漢数字の一に、美しい。当ってるかな？」

「そうです！ やつと、見つけた！！」

一美は、手を打って喜んだ。……彼女は、何をしに、来たのだろうか？

「今週に入ってから、倉真は毎晩、帰るのが遅いんだけど……。お家で何か？」

「そうなんです！ 兄は、貴女との事を話しに毎晩、父に会っているんです。父も、結婚したい人が居るって話は納得したんですけど、家、自営業だから……。その事が、まだ話が着かないみたいです。兄は、父が全てを納得しない限り、貴女を家に連れて来ようとはしないから、痺れを切らして、会いに来てしまいました！ ……ご迷惑でしょうか？」

一美は、少し不安そうな表情になる。利知未は笑顔で答えた。

「迷惑なんて。そんな事、有りませんよ。私も貴女に会ってみたいと思ってました」

一美の不安な表情が、一変した。ほつとして、喜びを素直に伝えた。

「嬉しい！ 良かったあ。……ホントは、ドキドキしてたんです。

迷惑だつて言われたら、どうしようかと思って」

彼女が将来の義妹に成ると言う事だ。

かなりの行動派らしい。流石、倉真の妹かも知れない。もう少し、ゆつくりと話をしてあげたいと思った。

「私は仕事明けで、これから朝食なんですけど。一美さんは、もう済んでいるの？」

「この病院を当ってみてから、どこかで済まそうかと思っていたので」

「そっか。じゃ、丁度いいから、一緒に食事、いかがですか？」

「本当ですか？！ 是非！」

イメージしていたよりも余程、柔らかい印象の優しい人だと思う。

『昔は男前だったって、言ってたよね……？　どう言う意味なんだろう』　兄の国語能力の無さを感じてしまった。
それとも兄なりの感性で、そう言う感じの人だったと、言う事だろうか？

利知未は少し考えて、外で食事を済ますことにした。

「ファミレスか喫茶店、どっちが良いかな？」

言葉もフランクにして、改めて言い出した。

「ファミレスなら、モーニングメニューの時間ですね」

「駅前まで行く事になるけど、良い？」

「はい」

二人で、並んで歩き出した。

「家に呼んでも良いとは思うけど。　夜勤が続いてたから、片付い

ていないんだよね」

「今度、伺ってもいいですか？」

「倉真が、何て言うかな……？」

父親が納得しない限り、家族への紹介も後回しのつもりで居る筈だ。
妹の勝手な行動は、恐らく解っていないだろう。　行き成り自分
と一美が知り合いになっていたりしたら、機嫌が悪くなるのは目に
見えている。

一美は、利知未の言葉で始めて解った。

「一緒に、住んでいるんですか？」

近くのアパートに、別々に暮らして居るのかと考えていた。　問わ

れて利知未は、内心でしまったと思う。

「お兄さんに、聞いてない？」

「全然！　知らなかった。　お兄ちゃん、中々やるわね」

最後の一言は呟きだ。

利知未は軽く笑ってしまった。　明るい、楽しい子みたいだ。
これから先も、仲良く出来たら嬉しいと思う。

駅前のファミレスで、二人で向かい合って食事を取った。　　「オーダーを終え、改めて話を始める。」

「ところで、いくつかの病院を探してくれたのかな？」

「今日ので、六つ目でした」

それは凄いと思う。　一美は随分、頑張り屋さんらしい。

「何日間、探していたの？」

「今日で、三日目でした。　一昨日は大学の後で探して、昨日は日曜だったから、一日。　で、今日は、講義サボっちゃいました」
照れ臭そうに、笑っている。

「あたしの名前も判らないままで、良くやったね」

「兄の名前出せば、きっと解ると思ってたから。　手掛かりも、結構あったし」

「大学病院外科の女研修医で、二十五歳。　背の高い……」

「美人！　ホントに美人だったから、驚いちゃった」

「それはどーも。　自分では、そんな風には思わないけどね」

「美人ですよ！　よく、家の兄貴を相手にしてくれました！　モテるんじゃないですか？」

「……そんな事は、無かったけど」

「本当に？　信じられない」

「身長と顔付きは、昔からコンプレックスだったから」

「どうしてですか？　あたしも背、高い方だけど、自慢にしていますよ」

確かに、一般女性としては長身なのだろう。　モデルでも、スポーツ選手でも無いのだ。

「身長、何センチあるの？」

「166センチ。　後、四センチあったら、バスケットでも良い所、行けたかな……？」

「バスケットボールやってるの？」

「ええ、やってました。高校の時は、レギュラーでインターハイまで行けそうだったんですよ」

「インターハイには、出場できなかったの？」

「予選で負けちゃいました。今でも残念！」

話を聞いていて、一美の根性と行動力に納得をした。運動部で鍛えられたという事かも知れない。勿論、あの倉真の妹だ。血筋も、その助けになっていたのだろう。

オーダーした物が運ばれて来て、一美は直ぐに箸をつけた。中々の食べっぷりと言えそう。昔の自分を思い出す。それよりは、上品かも知れない。

食事を終えて、もう暫らく、食後のデザートと珈琲を頼んで話をした。利知未はデザートを食べる一美を見ながら、ゆつくりと珈琲を飲む。

「本当は、お兄ちゃんが利知未さんを連れて来るまで、待つて様とも思っただけけど……。好奇心が勝っちゃいました。でも、会えて良かった」

「あたしも、会えて良かった。倉真が昔、住んでた所、一美さんにだけは知らせていたって言ってたから。……。あたしにも兄が居るから、兄妹の仲が良いのは嬉しいと思ってた」

一美は、すっかり利知未が気に入った。こんなに綺麗で優しく、物分りの良いお義姉さんなら、もしも結婚して家に来てくれる事になったとしても、嬉しいと思う。

そうは思うが、兄は、絶対に家には戻らないだろうと言うのも、解り切っている。

一美には、是非、利知未に会って直接、伝えたい事があった。

「母が、早く会いたがっています。家の兄、結構どうし様も無い感じの人だったから。……。家を飛び出した後も、心配していて。」

でも、あのお兄ちゃんがちゃんと就職して真つ当に生きるように
なった事、本当は家族全員喜んでるんです。それが、利知未さ
んのお陰だつて聞いて、母は電話があつた日、ちよつと泣いてまし
た。……嬉しくて」

「……そう。あたしは、そんな大層な事してないけど。倉真が
元々、真面目な性格なんだと思うよ。……ちよつと、頑固な所も
有るようだけど」

「チョットどころじゃ無いですよ！ ホーント、大変だつたんだか
ら」

少し頬を膨らますようにして言つた一美を見て、何時か倉真に頬
つぺたを突かれた時の事を、思い出した。

『昔、この一美さんの頬つぺた、突いてた訳だ』 軽く、笑みが漏
れてしまう。

「でも、今は良かったと思う。女性を見る目は養われた様だから、
許します」

「そんな風に言われると、プレッシャー感じちゃうよ」
肩を竦めて、利知未が言う。一美が、真面目な顔をする。

「利知未さん。兄を、宜しく願います。妹のあたしが言う
様な事じゃないけど。……でも、きつと皆、同じ事、言うと思う
から」

一美の真面目な瞳に、利知未も真面目な目をして答えた。

「あたしこそ、宜しく願います。……倉真が、これから先の
事をどう決めて来ても、着いて行くから。……もしかすると、同
居になるかもしれないね」

「そうなつたら、嬉しいけど。でも、頑固なお兄ちゃんの事だか
ら、そうはならないと思うな。その為に今、お父さんと話し合っ
てるんだから。あたしは、どっちでも良いんだ。お嬢さん貰つ
て家を継いでも、結婚して家を出ても。だから、兄の事は、利知

未さんにお任せします」

「……任されます」

ぺこりと、頭を下げて見せた。それから顔を上げて、付け足した。「でも、本当はね。……あたしの方が、倉真と一緒に居て貰いたいんだよ。だから、お母さんにも伝えておいて。息子さんをもっと自慢にして下さいって。……あたしが言う事じゃ、ないとは思うけど。それが、本音です」

「……ありがとうございます」

本当に、優しい心の持ち主だと感じた。こんなお姉さん、もしも一緒に住む事になっても、大歓迎だ。一美は、その思いで笑顔になって、頷いた。

それから間もなく、席を立った。利知未が二人分を出してくれた。奢って貰い、一美は丁寧な礼を言った。改めて、住所と電話番号も教えて貰った。

利知未は駅まで一美を送り、構内を抜けて、そのまま帰宅した。

アパートに着いたのは、十時を回る頃だ。天気が良かったので洗濯物をバルコニーへ干して、シャワーを浴びて仮眠を取った。利知未は、この夜勤明けから明日まで、休みになる。

今日も倉真は、実家へ周って来ると言っていた。今夜も、遅くなる筈だ。夕飯の支度は、慌てる必要も無い。ゆっくりと仮眠を取る事にした。

呑気に眠り込み過ぎて、目覚めたのは六時過ぎだった。慌てて洗濯物を取り込む。すっかり、冷たくなってしまっていた。

『失敗したな。バスルームに、干して置けば良かった』思いながら洗濯物を片付け、冷蔵庫に入っていた残り物で、適当に夕食を済ませた。

倉真が居ないと、つい手を抜いてしまう。料理は好きだが、のんびり出来る時も見逃さないのが利知未だ。
一休みしてから、倉真の為に、晩酌の摘みを少しだけ用意して置く事にした。

倉真は、今日で六日目の会見だ。

昨日は、父の本音も聞くことが出来た。徐々に、進んではいる。今日は頭から、自分の言い分を述べる事にした。

「この前、言ったよな。今、資格試験目指して、勉強してるんだ」
「だから、どうだと言った。そんな勉強さつさと止めて、早く修行をしに戻ってくれば良いだろう」

「そんなに、俺に後を継がせたいのか？」

「当たり前だ。お前は、俺の息子だ」

だから、継がせたい。そう思うのは親心だ。その心が全く解らなかった昔とは、倉真も違っていた。

もしも、自分に置き換えた時。将来、自分の工場を持てたとして、それが軌道に乗ってから息子が成人したのなら……。

『自分もきつと、親父と同じことを思うかも知れない』

「……けど、親父は自分一人で店を立ち上げて、起動に乗せた。それは親父にとつての誇りだろ？俺にも、同じ誇りを持たせてはくれないのか？」

「お前のような半端者に、ゼロからの出発は無理だ」

「やってみなけりゃ、解らない」

「解り切っている事だ」

二人とも頑固者だ。話は、そこで平行線だ。

暫らく黙って睨み合ってから、倉真が、言い切った。

「俺の気持ちは、変らない」

「生意気な事を言うな」

「俺の夢は、俺一人の夢じゃない。……利知未と、二人で見ている夢だ」

言い切つて、もう一度言い直す。

「夢なんて、半端な気持ちじゃない。実現可能な、目標だ」

息子は自分が思った以上に、成長して来ている。昔のコイツなら、誰かと二人で見る夢を背負う覚悟など、持てはしなかっただろう。

「……利知未さんと言うのは、お前にとって、それ程大事な相手なのか？」

「当たり前だ。利知未だから、結婚したいと思った。利知未の夢を、俺の手で叶えてやりたい」

「整備工場というのは、利知未さんの夢だったのか？」

「それは違う。彼女の夢は、……幸せな家庭だ」

「幸せな家庭？ そんな物、人それぞれだろう？ お前が意地でも家を継ごうとしないのと、どういう関係が有る？ お前が家に戻つても、幸せな家庭は作れるんじゃないのか？」

「俺は、俺の腕一本で、彼女の夢と自分の目標を、叶えて見せる！」

息子の気迫は本物だった。父親は、その強い眼差しに、漸く折れた。

「……勝手にしろ」

「それは、肯定として受け取つて、良いのか？」

「どこまでやれるか、見ていてやる。手助けは一切しない」

「それで構わない」

それでも、まだ心からの賛成では無いらしい。その事は、これから先の自分の頑張り次第という事だ。

「まずは、始めの試験に受かってみせる」

「……やってみる」

そう言って父親は、グラスのビールを一気に飲み干した。

母親が頃合を見て、新しい摘みを盆に載せて、居間へ入る。倉

真に確りと頷いて見せて、父のグラスへ勺をした。倉真は、自分のグラスの、泡が消え切ったビールを一気に喉へと流し込んだ。

飲み干して、立ち上がる。

「邪魔した、帰るよ」

「明日は、どうするの？」

「やっと、親父から了承を得たからな。暫らくサボってた分、勉強に気い入れなきゃならネーよ」

「そう。……けど、明日もう一日だけ、顔を出してくれないかい？」

母の顔よりも、父の横顔を見てしまった。

「利知未さんを、何時連れて来てくれるのか。今度は、私と話をしましょう？」

電話でも、済みそうな話だ。それでも、母の気持ちも解ると思う。

「……解った。取り敢えず、明日は来る」

母は、嬉しそうな笑顔で、頷いていた。

倉真が帰ってから、母は父と、二人で話をした。

「……あなた、お疲れ様でした」

確りと三つ指を突いて、深く頭を垂れた。

「まだ、早い。アイツが、本当に何処までやれるのか、これからだ」

「それでも、あの子が帰って来れたのは、あなたがキッチンと息子を受け入れてくれたからです。……本当に、ありがとうございます」

再び頭を垂れた妻の背中を見つめて、夫はグラスを差し出した。

「勺をしてくれ」

「はい」

その夜、夫婦は遅くまで、静かにグラスを重ねていた。

利知未の元には、倉真の帰宅よりも早くに、一美から連絡が入った。

「明日は、お母さんの要望で、もう一日こっちに来るって言うけど」

「そう。お父さん、解ってくれたんだ」

「渋々ながら、って感じでは有るけど。だけど、これで漸く、利知未さんをお兄ちゃんから紹介して貰える運びとなりました」

「仕事の都合が有るから、何時になるかは判らないけど」

「その前に、もう一度、遊びに行つて良いですか？……お兄ちゃんには、内緒で」

「それなら、あたしの休みの平日に、昼間、来れる？」

「何曜日ですか？」

「近い所で、明日。次の土曜なら、倉真は仕事だけど」

「それなら、土曜の講義は午前中だけだから、土曜日で良いですか？」

「OK。お昼、作つて待つてるよ」

「本当に？！ 利知未さんの料理、興味があつたんです！」
酢豚の事を思い出した。

兄は昔、母の作る酢豚は余り好きではなかった筈だった。それがこの前、パイナップル抜きの酢豚を美味そうに平らげていたと、母親から聞いていた。

「どうやら、利知未さんの料理のお陰らしい。」

「何が好き？」

「我が侂言つて、良いですか？」

「出来る物なら、構わないよ」

「じゃ、カルボナーラ、作れますか？」

パスタのカルボナーラは、中々、家庭で作るのは難しい。一美も以前、挑戦してみた事があったが、ソースがダメになってしまつて余り美味しく出来なかった。

「カルボナーラ、ね。　OK。　取って置きのレシピ有るから、期待してて」

昔、アダムで高林から教わった事が有る。　偶に厨房に入ると、利知未は必ず一品は、プロの業を盗んでいた。　その上、高林も松尾も、利知未の質問には、何時も確りと答えてくれていた。

「本当は、企業秘密なんだけどな」　そう言つて、厨房の裏技も幾つか伝授してくれた。

「楽しみにしてます！」

答えながら、一美はまた一つ感心してしまった。

『カルボナーラ、作れるんだ！』

家に呼んで、手ずから作ってくれると言うのだから、余程、自信が有るのだらう。　本気で楽しみになって来た。

一美と他愛の無いお喋りが弾んで、少々、長電話になってしまった。

電話を切つて、三十分もしない内に倉真が帰宅した。

「ただいま」

その表情に、利知未は笑顔で頷いた。

「お疲れ様。　……晩酌、する？」

「そうだな。　嬉しい知らせが有る」

「うん。　……摘み、作つておいたよ。　それよりも先に、お風呂に入る？」

「そうするか」

「着替え、出して置くね」

それから、倉真が風呂を上がる前に、利知未は晩酌の支度を整えた。

リビングで利知未は、先ずは一人掛けのソファに腰掛けて、乾杯した。

「親父が、漸く折れてくれた」

「うん、おめでとう。……それと、ありがとう。頑張ってくれ

たんだね」

「一週間、通っただけだ」

「ご家族とは、和解出来たんでしょう？」

「元々、問題は親父だけだった。……お袋には、心配掛けちまつた」

「……あたしも、心配掛けてるのかな」

倉真を見ていて、利知未は始めて、自分の母親の事を少しだけ肯定的に考えられた。

「俺に比べれば、よっぽど優等生だろ？」

「離れている分、悪い所は見え難くなってくれていたかもね」

目を伏せて、考える。……それでも、心の奥には、まだ蟠っている物がある。

「明日、もう一度だけ実家へ行つて来る。お前を何時連れて行けるのか、話をしたいと言われた」

「そう。出来れば、成るべく早くに行きたい所だけど……」

「仕事も有るからな。年末年始で、構わないかとも俺は思っぜ？」

「遠過ぎない？」

「……親父は、折れてはくれたが、まだ心からの賛成って訳でも、無さそうだからな。冷却期間も必要だろう？」

「そうなんだ」

「お前の事は、問題ない。問題は俺の事だけだ」

「……そうだよな。そうそう直ぐには、気持ちって、落ち着けな

い物だろうから……。 うん、じゃ、年末年始、早めに希望休暇、出して置くよ」

「そうしてくれ」

真面目な話を終え、倉真に促されて、何時もの落ち着く姿勢になった。

「……この重みが、これから俺が守り通す、幸せの重みだ」

利知未の肩に手を掛け、倉真が呟いた。 利知未は、小さく頷いた。

「重くなり過ぎたら、必ず教えてね？ あたしにも、ちゃんと両足はついてるんだから。 倉真の荷物だつて、一緒に持てるよ」

「……お前に逢えて、マジ、良かった」

心の底から、そう感じた。 確りと抱き寄せて、その温もりを、改めて肌に刻みつけた。

「……暖かい」

幸せそうな表情で、利知未はそう呟いた。

それから、この前見た夢の話を、利知未がしてくれた。

「何時か、本当にそうになったら良くなって、思ったよ」

「良いな、じゃねーよ。 それは、予知夢つてヤツだ。俺は、そう信じる」

「うん」

確りと一つ頷き合つて、これから先の二人の未来へ、乾杯をした。

四

土曜日。 約束通り、一美が遊びに来た。 利知未は駅まで、迎えに行った。

利知未の用意した昼食を取りながら、倉真の七日間に渡る訪問の顛末を、一美から詳しく教えて貰った。

「あたしは廊下で聞き耳を立てていただけだから、目で見た訳じゃないけど。利知未さん、カルボナーラ、本当に美味しいです!」

話しながら、ぺろりと一皿、平らげてしまった。

「お代わり有るけど、まだ入る?」

「もう少し、入りそう。サラダも、自家製ドレッシング何ですな」これも美味しいと、平らげてしまう。料理を褒められるのは、他の何を褒められるよりも嬉しい事だ。一美は、お代わりの二皿目もすっかり腹に収めてしまった。

「兄妹揃って、中々の食欲だね」

「美味しいから。けど、流石にチョット、食べ過ぎちゃいました」年頃の娘らしくない動作で、腹の辺りをポンポンと叩いている。飾り気の無い雰囲気、利知未は嬉しいと感じる。

「デザートも、作っておいたけど。あたしは余り、甘い物得意じゃないから、サッパリと珈琲ゼリーを作ってみたよ。入る?」

「デザートは、別腹です!」

ニコリとして、そう言ってくれた。

珈琲から、利知未が豆をブレンドして淹れた物を使った。これにも、見た目以上に手が込んでいる。本当に料理上手だ。一美は改めて感心してしまった。

兄が、褒めるだけの事はある。

「本当に、どうやって利知未さんみたいな素敵な人、見つけたんだろ?」

そう言われて、利知未は照れ臭い。

「倉真とは、昔からの知り合いだったんだよ」

「そうなんですか? いったい、何時頃から?!」

「あたしが十五で、倉真が十四歳の頃から」

「そんな前から?! あの頃のお兄ちゃんって、」

「随分、堂の行ったヤンチャ者時代だね。……あたしも、似たような物だったけど」

一美は信じられないと思う。その感想は、顔に出てしまった。

「……びっくりした？」

「かなり」

素直な反応に、利知未は笑ってしまふ。

「あたしの猫被りも、極めたもんだ」

くすりと笑い、自分の珈琲ゼリーを口にする。

「猫、被ってるんですか？」

「かなり、猫被ってるよ？ 未来の小姑娘さんの前だから」

少しおどけた言葉に、一美も楽しそうな笑みを見せた。

「本当の利知未さん、見てみたいですね」

「じゃ、ゲームセンターにでも、行って見る？」

「ゲームセンター行ったら、判るんですか？」

「証拠は、見せられると思うけど……」

駅前のゲームセンターには、パンチの重さを量るゲームが置いてあった。

「じゃ、是非、見せて下さい！」

「OK。バイクは、乗ったこと有る？」

「前に一度だけ、兄の後ろに乗せて貰いました」

「じゃ、平気そうだね。 ついでに、少し先まで送って行って上げる」

「乗るんですか?!」

「元々はツーリング仲間だよ、お兄さんの」

一美は、その言葉で納得した。 あの子と利知未の繋がりが、こんな所にあつたのかと思う。

少し休憩をしてから、利知未が運転するバイクのタンデムシートへ乗って、ゲームセンターを周ってから、送って貰う事になった。 利知未は、動き易い格好に着替えて来た。 少しメンズチックな服装を見て、美人なだけではなく、格好イイ人でもあつた事を知った。

ゲームセンターで、利知未は約束通り証拠を見せてくれた。

「最近やってなかったから、チョイ、パンチ力落ちたかな？」
結果を見て利知未が言う。

三回、パンチ力を測定して、合計240キロを表示している。平均、80キロのパンチ力だ。

一美も比べるために、叩いてみた。 合計174キロ、平均58キロだ。

「一美さんも、女の子にしては力がある方だな」

特に、何もトレーニングなどをしていない一般女性ならば、平均30キロから50キロ、合計90キロから150キロで、並と言えるのでは無いだろうか。

「部活で、鍛えていたからかな？」

「後は、身体が大きいと、その分、筋力も強い物なんだよ。 肉体

の仕組みが、そうなっているから」

「成る程。 流石、お医者さん！」

「感心される事でも、無いと思うけど」

利知未は照れ臭そうに、軽く肩を竦めた。

「後は、そうだな……。 護身術、教えてあげようか？」

「護身術？」

「合気道。 昔、やってたから。 小学生の頃に終了免除、貰ってる」

「そうなんですか?! 始めのイメージじゃ、考えられない」

「だから、言ったでしょ? 猫被ってるって」

益々、兄との繋がりが見えた。 驚きと同時に、嬉しくなってきた。

『お兄ちゃんの国語能力も、悪くなかったのかも……?』 昔は、男前だった。 そう、言っていた。

バイクを駆る姿と、ここで見せてくれた表情と証拠を見て、少しだけ昔の利知未の、イメージが出来た。

ゲームセンターを出て、止めて有るバイクの近くで、不審な男を見つけた。

「窃盗？」　小さく利知未が呟く。

最近、バイクや車の窃盗が増えて来て、自治会からも警告の回覧が周って来ていた。

「利知未さん、どうしたんですか？」

少し後ろから、一美が問い掛ける。

「丁度良い相手が居たよ、ここで見ていて」

利知未は一人で、不審な青年の二人連れに近づいて行く。

その時の利知未は、迫力があつた。　一美はハラハラしてしまつた。

後ろから、青年達に声を掛けた。　慌てて振り向いた奴らが、キーの差込口を弄っていた道具を武器にして、反射的に利知未へ襲い掛かった。

「甘い！」　一言、そう低く呟きながら、利知未はその青年達の攻撃をさらりと交わして、ついでに力を受け流し、得意の合気道で気絶させてしまった。

騒ぎに通行人が騒ぎ出した。　利知未は、一美に声を投げる。

「携帯、持つてる？」

「……は、はい」

「110番、してくれる？　現行犯だから」

慌てて、言われた通りに連絡をした。

暫らくして駆けつけた警官に、利知未は事情を説明して、犯人達を引き渡した。　ついでに被害届けも申し出た。　二人が狙っていたのは、自分のバイクだ。　小一時間、足止めを食ってしまった。

一美は、頭の中が真っ白になってしまった。

時間を見て、利知未が一美に謝った。

「ごめん、余計な事に時間、使っちゃった。　本当は、家の近くま

で送って行つて上げたかつたんだけど……。今の時間じゃ、帰るのが八時過ぎちゃうな。倉真には内緒の事だから、帰って来るまでに、ご飯も作ってあげないと成らないし」

「いいですよ、電車で帰れますから」

「じゃ、乗り換え線の駅まで、送つてくよ。それなら六時には戻つて来れるから、大丈夫」

再び女らしい笑顔を見せた利知未に、一美は少し懂れて、納得もした。

『確かに、お兄ちゃんとお似合いかも知れない……。って言うか、お兄ちゃんの相手には、利知未さんじゃなきゃ、無理そうだわ』

今日は、沢山の発見をしてしまった。誰かに話して見たくなる。けれど、利知未に言われてしまった。

「あたしの本性、ご家族には、内緒で宜しくね？」

「……友達になら、話しても良い？」

少し上目使いで、おねだり視線を、未来のお義姉さんに向けてみた。可愛く見えて、利知未は小さく、吹き出してしまった。

「仕方がないな。……その代わり、信用できる友達だけにしてね？」

「分かりました！ お義姉さん！」

元気にそう言つて笑顔を見せた一美に、サヨナラの挨拶をして、バイクを出発させた。

利知未は急いで帰宅して洗い物を片付け、夕食の準備に取り掛かった。倉真の帰宅前には、何事も無かった顔で澄ましていた。

夕食を取りながら、保坂と香の、その後を聞いた。

「保坂さんの悩みは、片付いたらしいぜ」

香とは、ここの所、会う機会が無かった。利知未は倉真の口から、始めて報告して貰った。

「結局、新しい彼女を紹介して貰ったらしい」

「上手く、行かなかったんだ」

「って事でも、無いみたいだ。ただ、香さんにとっては、物足りない相手だったらしい」

「保坂さんは、気に入っていたの？」

「チョイ、意味は違うけどな。姉貴分みたいな感じで、恋人という関係にはなれなかったそうだ。二人で出掛けて楽しかったんだけど、姉弟で遊んでいる感じになっちまったって」
それを聞いて、納得だ。

保坂が香に彼女を紹介して貰った変わりに、保坂も学生時代の先輩に、丁度良い感じの人が居た事を思い出し、お互いに新しい恋人候補を紹介し合って、終わったと言う。

「その情報は明後日、病院で香さんに聞いてみよう」
「そーしな」

館川家へ挨拶に行く日も、決まって来た。

倉真の父親の仕事も考慮して、元日に顔を出す話が出ている。
年始は茶道界の行事も多く、毎年二日を過ぎると、茶会の注文菓子を作るのに忙しくなると言う。お年賀として毎年、倉真の父の和菓子を持って行くお得意様も結構、多いらしい。

二日は、利知末の大叔母の命日だ。来年も、墓参りに行く予定がある。

その辺りの事情を考慮して、話し合った結果だ。元日から伺うのは申し訳ないとは思うが、それしか都合が合わないのも事実だ。
年末は、それこそその家庭も忙しくて、呑気に挨拶など行ける筈も無い。

食事を終え、リビングへ移動した。晩酌をしながら話した。

「漸く、動き出したな」

「そんな感じだね」

「……ここからが、長い道程なんだろうけどな」

「倉真と二人なら、きっと頑張れる」

そう言って利知未は、力強い、優しい笑顔を倉真に見せてくれた。

数日後、利知未の活躍が、新聞の紙面で明らかにされてしまった。例の青年達は、最近の連続窃盗事件の犯人だった。彼らが捕まった事で、窃盗グループその物が検挙された。利知未は警察から感謝状を戴いてしまった。

その事件は、思ったよりも大きな記事になっていた。月の中旬過ぎ、新聞を見た一美から早速、連絡が入った。

更に月末に成り、もう一つの厄介事が、郵便受けに舞い込んだ。

それは駆け出しの売れっ子女流作家、仲田 冴吏からの招待状だ。

「……忘れてた」

封筒の中身を改めて、利知未は口をへの字に曲げ、そう呟いた。

4 研修医一年・十二月

4 研修医一年・十二月

—

冴吏からの招待状は、倉真の目が届かない所へ仕舞っておいた。突っ込まれるのも話をするのも、はつきり言って気が進まない。

問題の招待状には、冴吏との対談の申し込みも同封されていた。
『……あれ、マジな話だったのか』 手紙を眺めながら、考える。
『何とかコツチも、断れないモンかな？』

つい先ごろ、全国紙の紙面で、利知未の名前と年齢が公表されてしまった。その事で、地方局からの取材も、何件かオフアが入ってきた。

それらに対しては、利知未本人から丁重に断りを入れたばかりだ。この上、冴吏との対談にまで応じてしまったら、とんでもない事に成りそうだ。その模様は、雑誌にも掲載されるらしい。

最近、この事について頭が痛い思いをしている。思考を切り替える必要が、ありそうだと思った。

倉真は、漸く勉強にも力を入れる事が出来始めた。利知未は邪魔をしないように、今まで以上に家事を頑張ってくれていた。

それと同時に、先月末頃から、偶に見える利知未のご機嫌斜めな様子を、倉真は敏感に感じていた。

『最近、世話、掛けっ放しだからな。流石に、利知未も疲れるよな』

そんな風に思つて、偶には気晴らしに誘つてみようと考えた。

『そー言や、アダムに利知未、連れて行く約束、果たしてないな』

利知未よりは、ちよくちよく顔を出していた倉真は、行く度にマスターから、今度は利知未も連れて来いと言われ続けていたの思ひ出した。

自分も、この九月に準一と出掛けた時以来、顔を出していない。

あれ程、世話を掛けたマスターに、婚約の報告さえまだしていなかった。

利知未の夜勤明け、四日・月曜の夜。 夕食時間に、倉真が言い出した。

「最近、ストレス溜まってないか？」

「どうして？」

「偶に、イライラしてるだろ」

「ストレスと言うか。……ちよつと、考え事があつただけだよ。心配させちゃった？ ごめんね」

利知未は勤めて、笑顔を作った。

「考え事、か。俺じゃ、相談には乗れなさそうだな」

利知未の考え事は、仕事の事では無いかと勝手に解釈した。

「いいよ、気にしないで。倉真は勉強、頑張つて」

「お前のお陰で、進んでるけどな。最近、頑張り過ぎた。偶には息抜きも必要そうだよ」

「今度の日曜、どっか行く？」

「久しぶりに、アダムへ行かないか？ お前、すっかり無沙汰だろ」

「そうだな。……丁度、二年くらい行ってなかったかも？」

「今度はお前も連れて来いって、行く度に言われてたんだ。九月に準一と行った時も言われた」

「そう言えば、そんな事も言ってたね。じゃ、行こうか？」

倉真に誘われて、丁度良いと思った。

最近のイライラの気分転換と気晴らしに、久し振りに、あの人に会うのも良いかも知れない。遅れ馳せながらの婚約報告も兼ねて、行ってみる事にした。どうせならバータイムに顔を出そうと言う話しに成り、次の土曜に出掛ける事にした。

その日は、倉真の土曜出勤、利知未の休日だ。夕飯は済ませて行く事にして、のんびりと酒でも飲んで来ようと話が決まった。

九日・土曜の夜、八時半過ぎ。久し振りに懐かしの店内へ、鈴の音を響かせて、足を踏み込んだ。

始めに店内へ入った倉真が、態と自分の後ろへ利知未を隠しながら奥へと進む。マスターの表情を、後ろからこっそり見ていてみると、囁いた。

「いらつしやいませ」

そう声を掛けたマスターが顔を上げ、新しい客を視界に認めた。倉真の顔を見て、明らかに一瞬、詰まらなさそうな顔になる。

「また、お前だけか？」

つい、ぼやく声を聞いて、利知未は倉真の後ろで小さく笑ってしまった。

「本当に、何時もそう言われてたんだ」

声を聞いて、マスターの目に嬉しそうな表情が浮かんだ。

「誰が一人で、この時間のアダムへ来ると思っすか？」

倉真も、面白そうな顔になる。

後ろから姿を現した利知未を見て、その人の頬が、柔らかく緩んだ。

「やっと、連れて来たか。……遅過ぎるぞ」

待ち兼ねていたと、その表情が言っている。

利知未は変らない彼の様子を見て、心から嬉しいと感じた。

カウンター席へ、倉真と並んで腰掛けた。マスターが言ってくれた。

「随分、淑やかそうになったじゃないか」

「猫被るのが、前より上手くなったただだよ」

少し、昔の自分が顔を出す。悪戯坊主のような笑みが、利知末の頬へ浮かぶ。けれど、その微笑みに、確りと女性の艶が伴っていた。

愛娘の成長を見る、父親の心境だ。……あの頃の、一瞬の情熱は。

心の奥の、小さな箱の中へ、柔らかい思い出に包まれて、仕舞われている。

利知末も、同じだ。

利知末の箱の方が、少し豪華な装飾になっているかもしれない……。

マスターが、再会を記念して、利知末にカクテルを奢ってくれた。「タダに成るのは、利知末だけか？」

倉真が、軽く憎まれ口を利く。

「当たり前だ。男に奢っても、つまらないだろう」

相変わらず、口の悪いことだ。それでも、それが彼の魅力の一つだ。

「一応、女だと認めてくれる訳だ」

利知末も、倉真の肩を持つ。今の一番大事な人は、勿論、倉真だ。「憎まれ口は、相変わらずだな」

「マスターこそ」

出されたカクテルグラスを軽く掲げて、乾杯をして口をつけた。

「……懐かしい味だな。前、出してくれたのだ」

「二年も無沙汰は、流石に長過ぎだな」

「Waiting for……。待たせて、ごめん」

倉真には、その話の裏は、解らない。

「昔、何かあったのか？」

「俺と利知未の歴史は、お前よりも長いんだ。色々あって、当たり前だろう」

少し倉真を、冗談半分に苛めて見た。いい大人が、子供みたいな事をすると思う。利知未は、軽く笑ってしまう。

男が偶に見せる、幾つになっても幼いような部分は、利知未には好きだと感じられる部分だ。

……心から愛しいと思えた、男が二人。

そのじゃれあいを眺めるのは、最近のイライラを解消するには、丁度いいかも知れない。

「報告があつたんだ」

倉真が話を変えて、切り出した。利知未を見る。

目を合わせて、利知未も小さく頷いた。報告は、倉真がした。

「俺達、婚約したよ」

少し、照れ臭そうな顔だ。マスターは、満足げに頷いた。

「そうか、漸く落ち着いたか。おめでとう」

「祝いに、俺の分もタダにならないか？」

照れ隠しに、倉真がニヤリと笑って、そう言った。

「仕方ない。そう言う事なら、取って置きのカクテルを出してやる」

そしてシェーカーを振って、二人にオリジナルカクテルを作ってくれた。

「昔から、俺が関係した結婚カップルへは、このカクテルで洗礼してやる事になっているんだ」

カクテルグラスを二人の前に置き、バーテンダーの顔になる。

「お待たせ致しました。『Marriage knot.』 日本

酒ベースのカクテルです」

「ありがとう、マスター」

「……世話に、なりました」

倉真はそう言つて、頭を下げた。

顔を上げ、マスターに促され、利知未と二人でグラスを合わせた。

二人きりの乾杯を、マスターは穏やかな笑顔で、見つめていた。

一口飲んで、倉真が言つた。

「日本酒の味が、良く解るな」

「三三九度に掛けてあるんだ。日本酒には、拘っている」

「……意味は、『結婚による絆』で、いいの？」

「婚約報告には、早過ぎる祝いだな」

「婚約祝いも、有るぞ？」

「どんなカクテル？」

「甘過ぎるカクテルだからな。お前らには、向かないと思つたんだ」

「そんなに、甘いんすか？」

「殺人的に甘い。イチヤイチヤしている二人に祝いとやつかみを込めて、俺が離婚した時に婚約した、親友に出したカクテルだ」

つまり、親友にだから通じる、冗談カクテルだ。

アダムで婚約パーティーがあると、その話を知つた主役の親友から、熱々の二人へとオーダーが入ると言う。

「何て名前のカクテル？」

「Promise ring」

「何の捻りもない名前だな」

倉真の突っ込みに、マスターが答える。

「やつかみ半分の冗談カクテルだ。凝つても仕方ないだろう」

「それも、そーかも」

「ピーチフィズにガムシロップを加えて、ドロドロに甘くする。他の酒も混ぜる。色は綺麗だがな、アルコール度数が非常に高い。二日酔い効果覲面だ」
楽しそうに、ニヤリと笑っている。
「流石に、それは遠慮したい所だ」
「お前ならなら、二日酔いは平気かも知れないな」
「甘さが怖いな」
その味を想像して、利知未は冷や汗を流してしまった。

昔話に花が咲く。利知未の中学時代の話を、マスターが倉真に聞かせてくれた。
利知未とマスターの初対面は、『野良猫のホットミルク』事件として、以前、利知未から聞いていた。それも、もう七年半以上、前の事だ。

その話を始めて聞いた、あの頃。倉真は実家を飛び出したばかりだった。一人暮らしが始まって、直ぐの五月。十七歳になったばかりだった。

利知未はあの当時、高校三年。心の中には、まだ初めての恋人・敬太が息づいていた頃だ。

マスターの話は、傷だらけの宏治を、始めてこの店へ連れて来た時の事。

宏治をボコボコにしていた近隣中学のチンピラに、それまで見せた事も無かったような怒りを爆発させていた、幼い利知未。

想像して、倉真は小さく笑ってしまった。

「俺は、その頃、近所のガキ大将だったな」

「そんな事、言ってたね」

自分の昔の話は恥ずかしい。けれど、話し手がマスターだからなのか、懐かしい昔話を聞いている気分だ。

「利知末の笑える話なら、まだ沢山有るぞ」

「あんまり、バラすなよな」

少し剥れて、昔の言葉使いが復活してしまった。

「次に来た時の為に、ネタとして暖めておくか」

「俺は、もう少し聞いていたいけどな」

「お前達が知り合ったのは、その二年後くらいに成るのか？」

「そうなるっすね。 どうせ俺の話は、お袋からバラされるんだ。」

利知末の昔話は、マスターから聞いた方がバランス取れんだろ？」

「その内、あたしが自分で話すよ」

「それじゃ、自由に脚色されちまうんじゃネーか？」

「当然。 話したくない事は、倉真を見習って話さないから」

「フエアじゃネーな」

「何か、文句有る？」

利知末の軽い睨みに、倉真が首を竦める。

「尻に敷かれそうだな」

二人の様子を見て、マスターが笑っていた。

「夫婦は顔が似てくると言うが……。 お前らは、昔から似ていたな」

ここまで話していた昔話で、当時の利知末の表情や仕草が、マスターの頭の中に鮮明な記憶として蘇っていた。

「そんな事は、無いと思うっすけど。 まだ、結婚前な訳だし」

利知末に似ていたのなら、自分も美少年だったと言う事になってしまう。

「一緒に住んでいれば、同じ事だろう。 釣り目の角度がそっくり

だな。 並んで鏡を見た事は、ないだろう」

「そんな必要、無いからな」

「ねえ？」

倉真の言葉に、利知末も視線を合わせて軽く首を傾げた。 同じ時

間に起き出して、仲良く鏡の前に並んで歯を磨く事など、やって見たことも無い。

けれど、利知未は少し興味を持った。

「鼻筋も、少し似てるか……？」

改めて、二人の横顔が並んでいるのを見て、マスターは其処にも気付いた。

「帰ったら、じっくり鏡を見てみたらどうだ？」

「態々？」

「……ちよつと、面白そうかも」

二人の顔が似ているのなら、将来出来るだろう子供達も、双子の様にそっくりに成ったりしないだろうか……？ そんな興味だ。

「他の話は？」

「利知未が、怖い顔で睨んでいるぞ。その内、色々、聞かせてやる」

「んじゃ、今度は利知未を置いてくるか」

「絶対、着いて来て邪魔してやるから」

「俺は、どっちでも構わないぞ。二人で顔を出してくれた方が、嬉しいぐらいだな」

「それじゃ、二度と聞ける機会がなくなっちまいそうだ」

「ザマミロ」

チラリと昔の顔が出て来た。舌を出して、勝ち誇った顔をしている。

「昔、俺が睨んでいた通りになつたな」

「……世話になりました」

「俺は、何もしてないと思うがな」

「あの頃、マスターに言われた事で結構、救われてたっすよ」

「何か、言われたことがあるの？」

「秘密だ」

「あ、そ。別にいいけど」

少しだけ、剥れた。自分の話はストップを掛けた癖に、勝手な事ではある。

「知りたきゃ、お前の昔話も聞かせてくれよな」

「そー来る？」

「お前ら、店で喧嘩でも始める気か？」

呆れ顔のマスターに言われて、二人で視線を合わせて首を竦めた。

久し振りにマスターとも楽しい時間を持てて、利知未は少し気が晴れた。帰宅してから早速、鏡の前に倉真を引っ張って行った。

「面白くも、何とも無いだろ？」

「そう？ ちゃんと、前見て」

倉真の頭へ両手を掛けて、利知未が正面へと向けさせた。

「……成る程」

「似てるか？」

「確かに、二人とも似たような釣り目だな。倉真は、一重なんだよね」

「お前は奥二重だな。目は、お前の方がデカいんじゃないか？」
そう言って、倉真は鏡から視線を外してしまった。

「あ、もう！ 観察、出来なくなっちゃうよ」

「もう良いだろ。お前の顔は鏡越しに見るより、直接眺めた方が良いよ」

逃げ口上だ。本気でも無さそうに言い捨てる。

こうして鏡の前に並んでいるのは、小恥ずかしい感じた。

倉真はさつさと、洗面台の前から逃げ出した。利知未は少し剥れて、倉真の後を追いかけて、リビングへ移動した。

「もう、十二時過ぎてるな」

「倉真がお風呂に入る前に、出掛けちゃったんだよね。温め直す？」

「そうだな。 のんびり浸かって、酒抜いてから寝るか」
「OK。 じゃ、沸かし直して来るよ」

再び脱衣所へ取って返す。 洗面台は、脱衣所兼用だ。 スイッチを入れて、洗面台の鏡に映った自分の顔に、目が止まる。

『……冴吏、あのモデルは女だって、言っているのか?』 そうで無いなら、いつその事、倉真もパーティー会場へ引つ張って行って誤魔化したり出来ないだろうか……?

女の自分がモデルと言うよりは、信憑性がありそうな気がする。
『やって見ようか?』

倉真に、人身御供に成って貰えたらラッキーかも知れない。 上手く行ったら御の字だ。 上手く行かなければそれでも仕方が無いが、やってみる価値は有りそうだと思った。

翌日、良いタイミングで冴吏から連絡が入った。

「招待状、届いたよね?」

「ああ、届いたぜ」

言葉が昔に戻る。 気が乗らないのは変わらない。

倉真は、今日も勉強に勤しんでいる。 電話に出た利知未の雰囲気気に首を竦めた。

『何か、嫌な予感がするな』 利知未が電話中のリビングから、逃げ出す事にした。

「で、日時の候補、書いてあったでしょう? ゲストの仕事の都合を考えて、招待状の前段階の仮予約。 勿論ご出席、願えますよね?」

「そう言うことか。 ……道理で」

招待状には、日付がいくつか記入されていた。 ご丁寧に返信用

封筒まで同封してあった。返事が中々、届かなかったので、痺れを切らしての連絡だ。

「ご都合は、何日が宜しいですか？」

「そう言うのは、パーティーの主催者側がオファーするんじゃないのか？」

「まだ、モデルは内緒だから」

そう言われて、利知未はニヤリとしてしまう。……誤魔化せるかも知れない。

「分った。その代わり、倉真同伴。じゃなきゃ、行かない」

「……何か、企てていそうだな」

それでも、返って面白くなりそうだ。冴吏は、承諾する事にした。

「で、何時がいいの？」

「二十三日なら、二人とも休みだよ」

「了解しました。じゃ、改めて正式な招待状、送ります！」

そう言って、電話は切れた。

利知未は、朝美の協力を仰ぐ事にした。

二

パーティーまでの平日休みに、利知未は朝美が働いている店へ、一人で出掛けて行った。その前に、朝美のシフトは確認済みだ。

「二十三日、休み交代して貰ったから」

店に来た利知未の顔を見るなり、朝美がワクワクした顔で言った。「サンキュ。で、今日中に服探して、当日までに直し出来るかな？」

「まだ、十日ぐらい有るでしょ。直しは、一週間あれば余裕だよ」
「助かる。当日は、昼過ぎには下宿へ行くから、準備は大丈夫か」

……？」

少し自問してみる。朝美は、自信満々な笑みを見せる。

「任せなさい！ で、幾つか候補、見繕って置いたけど」

「見せてくれる？」

「少々お待ち下さい」

朝美は利知未を待たせて、店の奥へと引ッ込んだ。

暫らくすると、何点かのワンピースを持って出て来た。

「何か、どれもあんまり好きじゃないな……」

「利知未の好みに合わせたら、どんなメイクにしたってイメージが変わらないと思うけど？」

それは一理ある。 渋々ながら、その中でもシンプルそうなのを選んで、試着室へ入った。

始めに試着してみたのは、意外と胸が開いている、身体にピッタリと来る素材のロングワンピースだ。 鏡に映る姿を見て、恥ずかしくなってしまう。

「これ、見た目よりも色っぽいデザインだな……」

シルエットは綺麗に映る。 利知未の胸は、あまり大きいとは言えない。 これを選んだ場合、何時かの様に、胸パット三枚は必要に成りそうだ。

「……却下」

直ぐに、別のワンピースに着替えた。 それもロングで、スリットが深かった。

「あのチャイナドレスに、チョイ近いか……？」

これも恥ずかしい。 歩く度に足のラインが、際どい所までチラチラしそうだ。

他のワンピースを手に取り、どうやら色っぽいデザインが多い事に気付く。 カーテンを開けて、朝美を呼んだ。

「チョイ、際どいのが多くないか？」

「スタイル良いんだから、ソコを活かさないでどうすんのよ？ は

い、これも着てみて」

また一枚、新しいワンピースを押し付けられた。その後、五着も着替えさせられた。

最終的に、全体が深いブルーで、袖から胸の辺りがシースルーの素材で作られている、ミニワンピースに決まった。

「結局、これもスリットが深いんだ」

しかも、前面スリットだ。歩く分には平気そうだが、椅子にでも腰掛ければ、確実に下着が見えてしまいそうだ。

「このワンピースなら、ストッキングはコレね」

「網じゃないか」

「そんなイヤらしい網じゃ無いでしょ、上品なくらいよ。足首と太股部分のアクセントが少し色っぽいかな？」

「……少しか？」

「足、綺麗なんだから。活かして、活かして。あと、ハイヒールもね」

高さ7センチの、ピンヒールだ。

「こーゆーのは、履き慣れないから、転びそうだな」

一応、履いて歩いてみた。始めはグラついたが、直ぐに慣れてしまった。

「体の重心、綺麗に整ってるじゃない」

「バランス感覚の問題じゃないのか？」

「どっちかって言うと、普段の姿勢が重要ね。骨が曲がってたりすると、スタイルにも影響すんのよ。あんた、専門でしょうが」

「学校の骨格標本には、透子がチャーリーって名前、付けてたけどな」

「透子ちゃん、流石なセンスだわ……！」

朝美の笑いのツボに入ってしまった。

骨格標本に話しかけている透子の姿をイメージして、息が苦しくなるまで涙を流して笑っていた。

再び試着室に入り、ワンピースに着替えた。朝美が虫ピンでウエストの余分な布を摘んで、仮止めする。身体にぴったりのサイズに合わせて、改めて利知未の全身を眺めて呟いた。

「裾は、もう少し下ろすか。5センチは余裕がある筈だから、もう4センチ」

「そうしてよ。コレじゃ、膝が丸見えだ」

「了解。じゃ、当日までに直して、あたしの部屋へ置いとくよ。」

会計は今日、済ませちゃって良いのね？」

「大丈夫。これ、いくらなんだ？」

改めて商品のタグを確認してみた。

「大体、二万か……。一揃えで、三万は掛かるな」

小さく溜息が出てしまう。

金が無い訳ではないが、現在、将来の為に小使いの中から余分に、月六万は貯金へ回している。倉真には内緒だ。

オペが入ると、もう少し稼げる。その分は全て別の貯金へ回す。

こちらは将来、子供が出来た時の為の貯金だ。

少しずつでも今から準備すれば、養育費の足しに成る。まだ結婚前ではあるが、確り者の奥さんと言ってしまうても、良さそうだ。

「倉真君の服は、秋絵が前、サークルの撮影で使った衣装を貸してくれるって言ってたから。靴と靴下だけは、用意してね」

「倉真、革靴は持ってないからな。……男の革靴は、高いんだよな」

それにも、軽い溜息だ。自分の勝手で倉真を巻き込むのだから、自分が準備しなければ申し訳ない。結局、今月の要らない出費は、合計五万にはなってしまうだろう。

準備が整って、後は当日を待つだけになる。問題は倉真にはど

うやって、お願いするか？　と言うことだ。　余り早くから予告しても、返って難しいかも知れない。
普段通りの生活を続けて、タイミングを計った結果、パーティー前日に言い出してみた。

その三日間、利知未は遅出だった。　何時も通り利知未の遅い夕食に付き合って、倉真が晩酌を始める。

「明日、倉真も休みだよな？」

「祝日だからな」

「……あのね、チョットお願いが有るんだけど」

何時も以上に可愛らしい、おねだり顔だ。　嫌な予感が走る。

「……何か、面倒事じゃないだろうな？」

「面倒事と言えば、面倒事かな」

視線を逸らして誤魔化した。

「勉強が忙しいんだけどな？」

「協力してると思うけど？」

この三日間、利知未は家事も確りと手抜き無しだ。　弁当も毎日早起きをして、作ってくれていた。　お陰で、少し寝不足だ。

どっち道、倉真は利知未に勝てはしない。　力技では無い限り、どんなに足掻いても悪足掻きだ。　一つ溜息をついて、聞いてみた。

「……何だよ？」

「聞いてくれる？」

「内容が分らなけりゃ、聞き様が無いだろ」

「ありがと。　明日、一緒に下宿まで行ってくれる？」

「そんな事か」

正直、ホッとしてしまった。　次の言葉で覆された。

「で、夜七時から、冴吏の本を出している出版社が主催する、パーティーに出席しないとならないんだけど……」

「……一緒に行けってか？」

「ご名答。 断り切れなかつたんだよね、…… 良い？」

可愛らしく、軽く首を傾げて見た。

「俺が行かないと駄目ってことも、無いんじゃないか？」

「あたしがイヤなんだよね、そう言うの苦手だし」

「俺は、お前以上に苦手だぞ」

「あたしの事、守ってくれるんでしょ？」

「危ない所へ行くって事じゃ、ないんだよね？」

中々、頷いてくれない。

今度は、膨れてみる事にした。

「そーなんだ。 不安な所へ行かなきゃ成らないのに、突き放すんだ」

それから、少し悲しそうな顔をして見る。 利知末の百面相だ。

「じゃ、良いよ。 何かあっても知らないから」

「何があるんだ？」

「お酒、飲まれ過ぎたらどうなるか判らないしな。 …… 朝帰りに成ったら、ごめんね」

「お前が、酔っ払うほど飲まされるか？」

脅し文句の選択ミスかもしれない。 倉真の頑固は筋金入りだ。

「…… じゃ、もうイイ」

食事を終えて、利知末は黙って食器を片付け始めた。 少し、口を利かないで居てみる事にした。

片付け終わり、さっさと風呂の準備をして浴室へ向かう。

倉真は一人で飲み続けて、溜息をついた。

『何、考えてるのか判らなーな』 少し冷や汗ものだ。

このまま、口を利いてくれないまま就寝するのも、寂しいかも知れない。

暫らくして、利知末が風呂から上がり、ロックを一杯用意する。
何も言わ無いまま、リビングへ引っ込んだ。

やはり、自分が負けるしか無さそうだ。

「……シャーねーな」

呟いて、グラスを持ってリビングへ移動した。

「利知未？」

無言でロックに口をつけている。倉真は観念して、折れてやる事にした。

「……判ったよ。一緒に行けば良いんだな？」

「……本当に、行ってくれる？」

「行くよ」

小さく溜息をついて、倉真が約束をしてくれた。利知未は笑顔になつて、倉真を振り向いた。

「ありがと。一緒に飲もう？」

笑顔を見て、ほっとした。倉真もソファに腰掛けて、何時もの姿勢になる。

「ったく。お前には勝てない」

「倉真が優しくて、嬉しいよ」

ニコリとする利知未を見て、倉真は思った。

『この力関係は、結婚してもガキが出来ても、変らねーんだろうな』
それでも家内円満なら、それが一番、良い事だろうと思う事にした。

翌日、昼過ぎ。電車を使って、二人で懐かしい下宿へと向かった。準備を終えたら、今度は里沙の車を借りてパーティー会場へ向かう事になっている。

慣れない革靴の感覚に、倉真はこれから起こるであろう出来事に、一抹の不安を感じてしまった。

下宿に着くと、リビングで秋絵が倉真の衣装を揃えて待っていた。直ぐに朝美は、利知未を自室へと引つ張って行く。

リビングを出る前にチラリと見えた倉真の衣装は、少しホストチツクな派手目のスーツだった。

『アレ、倉真に似合うのかな……？』

利知未は少し、不安になった。

これから、朝美の部屋で髪型を弄られメイクを施される。

「フアンデと、リップはして来たね。持っでは来た？」

「一応」

「眉は整える様になったんだよね、変われば変わるもんだ」

下宿時代の利知未は、髪も軽く櫛を通すだけ、眉は殆ど弄った事もない。勿論、口紅なんて滅多につけない。そんな状態だった。お陰で凛々しい眉の形も手伝って、美人というよりは美少年、美青年の顔立ちだった。

髪を整え、眉を弄り、口紅をつけた事が有るのは、ホンの二、三回だけだ。

「今日は兎に角、絶対に昔のあたしが想像出来ない様に、徹底的に女っぽく」

「任せなさい！ あんたは元が良いから、やりがいがあるわ。あたしのメイクは、綺麗な人はより美しく、そうでない人もそれなりに以上に美しく、がモットーなんだから」

「何か、どっかのキャッチコピーみたいだな」

「それ以上よ。アレは、『そうでない人も、それなりに』でしようが。じゃ、メイクから片付けちゃおう！」

朝美は腕捲りをし、喜々としてメイク小物を構え始めた。

「……信用してる」

イヤでも何でも、されるがまだ。

「全体に、色っぽく仕上げるから。後で鏡見るの、楽しみにしててね」

何時も十分で済ませるメイクを、本日は三十分掛けて丹念に仕上げた。

「口紅は色気を醸し出す様に、少しはみ出し気味にするのがポイント。途中でメイク直しする時は気をつけてね。アイラインも涙が出るかとパンダになり易いから、欠伸は禁止。タバコは、口の端っこに軽く挟んで吸う事」

「注意事項ばかりだな」

「美を追求する為には、努力が必要なのよ」

「……畏まりました」

「言葉使いも気をつけてね。里沙の真似するつもりくらいで、宜しく」

「了解」

「メイクは、こんなもんか。次、頭ね。軽く鋏入れても良い？」

「お任せします」

「任せな」

小振りな鏡を立てて、テーブルの上に置いた。利知未は自分の顔を見る前に、ガーゼ生地の手カチを顔の上に載せられてしまった。音だけで、朝美の鋏使いを想像する事になった。

「髪、切るの難しくないか？」

「行きつけの美容院で仲良くなった美容師さんに、特訓して貰ったの」

「どうして？」

「毎年、チラシ作ってるでしょ？あのヘアメイクあたしが担当してるから。プロ使うとお金、掛かるからね」

「仕事熱心なことだ」

「昔から興味もあったし、好きだったのよ。メイクは一時期やつ

てた化粧品の営業で、みつちり仕込まれて来たし」

「そんな仕事、やったこと有るのか？」

「今の仕事始める前に、半年位ね。名古屋へ行って始めにやった事務仕事は、向かなかったみたい。一年で止めちゃったのよ」

「……会わなかった間の話し、聞いたこと無かったな」

「今度、のんびり話してあげるわよ。はい、カット終了、後はブローだけだ。もう少しハンカチ、載せててね」

鉄の音が収まり、ドライヤーの音が聞こえ始めた。

倉真の担当は、秋絵だ。大学の映画サークルでは裏の仕事を担当していた。役者のヘアメイクや衣装も、仲間で持ち回っていた。秋絵もこの三年半で、中々やるようになっていた。

用意されたスーツを見て、倉真がげんなりとした顔をする。

「マジ、それ着るのか？」

「コレでも地味目なスーツ、選んで来たんだから。文句言わない」

「それで、地味だった？ ホストみたいな服だな」

「そう言うシーンで、使ってた衣装だから」

「……成る程」

面白い。普通のリクルートスーツでさえ、袖を通した事も無いのだ。

「ネクタイはしなくても平気なデザインだから、安心して」

「それ位だな、文句が出ないのは」

「それにしても、二人に会うのも随分、久し振りだな。婚約したんだって？」

「樹絵ちゃんから聞いたのか？」

「そう。偶に電話してるから」

「そうか」

樹絵とは、三月の末に会った切りだ。利知未は十月にも飲みに行っていた。元氣そうで何よりだと、話を聞いて思った。

「特にメイクする必要は無いから、髪型だけ弄らせてね」

「……仕方ねーな、利知末の命令だろ？」

「朝美からも、頼まれてるから」

「相変わらず仲が良いな、朝美さんと利知末は」

「わたし達が、下宿へ来る前からの親友だよ、あの二人は」

「そうらしいな」

秋絵に髪を弄られながら、そんな話をして気を紛らせていた。

倉真の準備は、三十分もあれば終わってしまう。一度スーツに着替え、全身をチェックされてから、もう一度、普段着に着替えてしまった。

利知末の準備が整う時間を見計らって、着直せば問題ない。秋絵の出してくれた珈琲を飲みながらテレビを眺め、タバコを吸って待つ事にした。

利知末はメイクとブローを終えてから、始めて鏡を見せて貰った。

「……まるで、別人だな」

「当然。我ながら、このメイクテクは素晴らしいと思うわ」

「自分で言うか？ 普通」

「ご注文通り、以上の出来でしょうが。 りっちゃん、色っぽいよ！」

ふざけて囃し立て、ベッドの上から洋服の一揃えを持って来た。

「はい、着替えて！」

ワンピースを手渡されて、着替え始めた。

着替えを終え、全身鏡に映して、全体をチェックした。

「あと、アクセも」

ピアス風のイヤリングとブレスレットは、朝美の物だ。余りゴテゴテと着け過ぎるのも変な感じになってしまう。後はエンゲイ

ジリングだけ身に着けた。指輪に注目して、朝美が言った。

「それが、エンゲージリングね。サイズの割には、良い石を使ってるじゃない。デザインはシンプルだから、何時も着けてても可笑しくは無いね」

「この格好に着けるの、止めた方が良いのかな？」

手の甲を胸の前に軽く翳して、鏡に映してチェックした。

「プレスと相性、悪くないし、平気だと思うけど。はい、ストール羽織って」

利知末の準備が完成した。改めて自分の姿を見て、恥ずかしくなかった。

「……何か、物凄い嘘、ついてる感じた」

「女はメイクと服装で、いくらでも変わるモンよ。普段しない格好とかすると、変な感じがするだろうけど。コーディネートを失敗しなけりゃ、傍からの見た目じゃ本性なんて判りっこないんだから、大丈夫」

朝美にそう言われて、そんな物かと思ひ込む事にした。

「猫被りは、上手くなったからな。何とか、誤魔化せるか」

「腰に手、当てない！言葉も注意」

「里沙の真似、だった？ンじゃ、改めて」

腰に当てていた手を下ろして、淑やかそうに立ってやった。

「中々、イけるじゃない。利知末もやっぱり、女だったんだ」

「それ、どーゆー意味だよ…、じゃなくて、どう言う意味かしら？」

「その調子！」

朝美が相手だと、やはり照れ臭かった。赤くなってしまう。

利知末の様子を見て、朝美は面白そうに笑っていた。

利知末を待たせて、部屋から廊下を覗いて階下へ声を掛けた。

二階から呼ばれて、秋絵がソファから立ち上がる。

「準備、出来たのかな。倉真君も服、着替えておいて」

「……仕方ない」

渋々立ち上がって、スーツに着替え始めた。

秋絵が先に、一人で上がって行く。ノックをして、朝美の部屋へ顔を出す。

「倉真君は？」

「ここへ呼んで良いの？」

「構わないよ。今日は、他の子達も出払ってるし」

「OK。でも、その前に利知未の出来栄え、見せてよ？」

利知未は照れ臭くて、背中を向けたままだ。

「感動しちゃうかもよ。ほら、利知未！今から人目に晒さないと、会場で顔、上げて居られなくなるでしょうが」

無理矢理、背中を押して向きを変えてしまった。

「うわ！利知未じゃないみたい……。綺麗じゃない！女優も出来そうだね」

少し俯き加減で、恥ずかしそうにしている。その雰囲気も初めてだ。

「女優も裸足で、逃げ出しちゃうわよ」

「さっすが、朝美さん！相変わらずのメイクテク！」

「まっかせなさい！」

自信満々で胸を張る。利知未は恥ずかし過ぎて、何も言えなかった。秋絵が階下へ向かって声を掛けた。

「倉真君！着替え終わったら上がって来て！」

二階から呼ばれて、溜息をついてリビングを出た。

「何で、俺まで行かなきゃならなーかな……。しかも、この格好」
「ぼやきながら階段を上がって行く。この下宿の二階に上がるのは、初めてだ。朝美の部屋は、直ぐに判るのだろうか？等と、関係ない事を考えて、自分の姿を忘れる事にした。

「倉真君！なにばやいてんの？こっち」

朝美の部屋のドアから顔を出して、秋絵が呼ぶ。

朝美の部屋は、階段を上がりきった取っ付きの、直ぐの部屋だ。

「つつーか、マジ、コレしかないのか？ ……大体、リクルートス

ーツさえ着た事、無いんだぞ。肩凝りそーだ」

頭を上げて秋絵に、首を解す様を見せる。

ニマリと笑った秋絵がドアの前から身体を避けると、朝美に背中を押された、ドレスアップした利知未が恥ずかしそうに姿を見せた。

首を解していた倉真の頭が、右45度の可笑しな角度でピタリと止まってしまふ。もう一言、文句を言いかけた口も、半開きだ。

まだ、階段を上がり切る前だった。ワンピースの前スリットの中身も覗けそうで覗けない、かなり色っぽい眺めだった。

利知未が慌てて、小さなハンドバックを持った手で、スカートの前面部分を押さえた。色っぽい恥じらいを見せる表情とその動作に、益々、見惚れてしまった。

クラリと来て、足を踏み外しそうになってしまった……。

後ろから覗き込んでいた朝美の笑い声が、秋絵の小さな笑い声に重なる。

「素晴らしいアクションを、ありがとう！」

「はい、カット！ 良いシーンが、撮れました」

目に見えないカメラを回して、秋絵も一緒になって、冷やかした。まだ止まっている倉真の所まで、利知未を後ろから押して行く。

「ちよつと…！ 階段、危ない」

小声で軽く抗う利知未の様子は、随分と淑やかだ。そんな利知未を、朝美も秋絵も始めて見せて貰った。当然、倉真も初めてだ。

朝美と秋絵はチラリと視線を合わせて、満足そうな笑みを交わした。

二人に冷やかされ、送り出されて、漸く正気が戻った倉真と里沙の車へ向かった。さっきから二人とも、一言も言葉を発していない。

角を曲がり、里沙の車を置かせて貰っている、手作り家具製造工場の屋根が見え始めた。倉真が、やっと言葉を発した。

「……良く、似合ってる」

「……ありがとう」

「取り敢えず、会場近くの喫茶店でも探してみるか」

「そうだね。……じゃ、なくて、そうね、かな」

「どっちでも良いんじゃないか？」

「朝美からの嚴重注意事項だから。ね、倉真。今夜だけは、慣れてね？」

「……おお」

返事をしたけれど、心の中では、ずっとこのままでも良いかも知れないと思ってしまった。

利知未一人と付き合っている筈なのに、何人もの女性と付き合ってる様な気分になってしまう。FOXで少年として振舞っていた利知未も、その正体がばれてからの利知未も男前な感じで、格好良かった。

仲良くなるに連れて、時折は女らしい雰囲気も見せて貰える様になった。それから付き合い始める前までの利知未は、その女らしさを見せてくれる瞬間が、段々と増え始めていた。

最近の利知未は、すっかり実年齢なりの女性と言う感じだ。

何かあった時に出てくる昔の雰囲気も、良い刺激になっているかもしれない。その上、今日の利知未は色っぽくて、かなりの淑女やかさだ。

「一生、飽きないで済むだろうな」

車の近くへ到着した。倉真は助手席のドアを、お抱え運転手にもなったつもりで、大きく開いて利知未を促した。

「飽きないって？」

促されて、照れ臭そうに乗り込みながら、倉真の呟きに反応した。

「お前、色んな顔があるな。……今日は、かなり善い女だ」

照れ隠しにそう言いながら、倉真は助手席のドアを閉め、運転席側へ回った。利知未が、倉真が乗り込むのを待つて、少し膨れて聞いた。

「今日は、って、どういう意味よ？」

「訂正。何時も以上に善い女だ。……で、イイか？」

恥ずかしくて、まともに利知未の顔は見れなかった。顔を見ないようにしながら、エンジンを始動した。

「オートマか。運転に、飽きちまいそうだな」

呟いて、ゆっくりと車をスタートさせた。

下宿を出たのは、四時過ぎだった。のんびり走らせ、渋滞に捕まってもまだ余裕だ。五時半頃には、会場近くの道をウロウロしていた。

目ぼしい店は見付からない。パーティー衣装だ。ファーストフード店へ入るのも、向かないだろう。それ以外は、高級そうなレストランが何件か。

「七時からって事は、三十分くらい前に会場へ入れば良いよな」

「商談相手と会う訳でもなし、名刺交換する必要も無し。二十分か十五分前でも、いい位じゃないかな？」

「あと、一時間以上有るな」

「ホテルに車だけ止めて、歩いて探してみる？」

「靴が慣れないだろ。俺は、靴擦れが出来そうだよ」

気が乗らないのは変わらない。

利知未は、敬太とのデートを思い出してみた。こんな時、彼は
どうしていただろう……？

「ホテルの中にも、喫茶スペースは在る筈だな。パーティー会場
になる様な所は、特に。ね、やっぱりホテルの駐車場へ車、止め
ちやおう」

「了解」

ウインカーを出して、地下駐車場へ滑り込んだ。

エレベーターで一階へ上がり、フロントへ、今日ここで開かれる
パーティーの出席者である事を告げ、コートを預けた。

喫茶ラウンジが二階にある事を確認して、エレベーターに乗った。

エレベーターを降りた途端、広々としたラウンジが目に入った。

「……在るのが、当然見たいだな」

倉真は、こんな所へ入るのも初めてだ。呟いてしまった。

「大体は、ね」

短く答え、先に立って歩き出した。

こう言う所では、敬太は何時もレディーファーストで行動してく
れた。それがマナーなのだろうと、敬太の所作を見て利知未は覺
えた。

口で説明するよりも、雰囲気で倉真に判って貰えれば良いと思っ
た。

物怖じする事無く自然に振舞う利知未を見て、倉真は内心、驚い
た。

「俺が着いてくる必要も、無かったんじゃないか……？」

動きが止まってしまふ。利知未が気付いて、首を傾げる。

「どうしたの？」

「いや。何でもない」

ゆったりと構えられている席へ着き、珈琲をオーダーした。

『ブレンドで六百円するんだな』 高いと思う。

こんな所で金額の事を口にするのも見つとも無い感じがして、倉真は無言でウンザリ顔を見せる。

「今の内に、タバコ吸っておこう」

呟きながら、利知未が小さなハンドバックから、見慣れないシガレットケースを取り出した。細身のタバコが七本程入っている。

朝美に渡されたのだ。ハンドバックが小さいのだから、コレが丁度良いだろうと言われた。

「徹底的だな」

「ファッションについては、朝美はトコトン拘るから」

ライターも朝美からの借り物で、細身のガスライターだ。注意されて来た通り、口の端に軽く挟むようにして吸ってみた。

「こうして吸っても、あんまり美味しくないかも……」

つい、ぼやいてしまった。

朝美が細身のタバコを吸っている理由が、判った気がした。口の紅の乱れが、普通の太さの物よりも少なくて済むみたいだ。

珈琲が運ばれて来て、利知未は軽く口紅を紙ナプキンで抑えてから、口を付ける。これは、アダムでのバイト中に、上品そうな女性の所作を見て覚えた事だ。気の付く女性は、口紅の痕が必要以上にグラスへ付かない様に、そうしてからカクテルに口を付けていた。

仕事で洗い物もしていた利知未は、その差を身を持って教えて貰った。

利知未の所作を、テーブルに肘を突いて、つい眺めてしまった。

「倉真。行儀、悪いよ?」

利知未に怒られてしまう。仕方なく姿勢を伸ばして、腕を組んで見る事にした。それも、余り行儀が良いとは言えないかもしれない。

何とか一時間近い時間を潰して、会場へ向かう事にした。

その間に、お互いの姿にも漸く見慣れた。利知未は気合を入れ直した。ここからは、絶対にボ口を出す訳には行かない。

今日は倉真に人身御供になって貰う事よりも、大事な目的が有る。隆史のモデルにイメージされる人物像と、実際の人物像が余りにも掛け離れて見えてくれる事が大事だ。

その先に計画されているのは、主人公、隆史人気で持っている小説の為の対談だ。イメージが遠過ぎれば、無理に対談などさせる必要もなくなるのではないか……? そう踏んでいた。

倉真の同伴意義は二つ。

実際のモデルである利知未よりも、隆史に近い男性の存在として、編集者側に捕らえて貰う事。それと、利知未が女らしく居るための、心の安定剤。

上手く流れば、話題性重視の対談計画は矛先を変えてくれるかも知れない。そんな淡い期待も、あるにはある。

十五分前に会場へ到着した。冴吏が気付いて、直ぐに近付いて来る。

「ようこそ。久し振りだね、利知未」

「お招きに預かりまして。元気だった?」

「病氣一つ、してませんよ。……成る程、そー来たか」

「何の事かしら？」

すつとぼけて見せた。

利知末の特技は、最近すっかり磨かれた猫被りと、昔から変わらない、気持ちの切り替えの素早さと、徹底だ。

「いえいえ、何でも。館川 倉真さん、でしたよね？ 始めまして、ですね」

「そう言えば、そうなるのか。本、読ませて貰ったぜ」

「ありがとうございます。後でゆつくり、感想を聞かせて下さいね」

本心の読めない、笑顔を見せた。

『冴吏のヤツ、何考えてるのか判らないな……』

その考えは顔に出さずに、利知末も笑顔を浮かべていた。

二人の間に挟まれて、倉真は少し引き気味になってしまう。

『女って、怖い生き物だよな……』 中学時代にも、同じ様な気持ちになった事がある。

あれは、宏治の部屋へ泊り込んでいた正月の出来事だった。

あの時は美由紀から、意味ありげな微笑を返された。

「パーティーが始まるから、奥へどうぞ」

冴吏に促され、二人は会場へ踏み込んだ。受付の担当者や招待客達の、興味深い視線を集めていた。これは、気の所為では無いだろう。

今日この会場へ、主人公のモデルとなった人物が呼ばれているのは、皆知っている。

パーティーは、新人の作家が出したハードカバー小説が異例の売れ行きを見せている事への祝いと、来年から続編が始まる事への激励と、宣伝を兼ねた物だった。ほぼ内輪だけのパーティーで気楽な事は気楽だが、早くも作品に目をつけた某テレビ局・ドラマ担当

部の実力者も数名、招待されている。マスコミが面白そうなネタを、捨てる事は無いだろう。

利知未達は、直ぐに編集長へ紹介された。冴吏は、どちらが隆史のモデルなのかは明言しないで置いてみた。

「下宿時代の店子仲間で、瀬川 利知未さんと、友人の館川 倉真さんです」

並んでいる二人を見て、編集長は騙された。

「君が、隆史のモデルか」

倉真に向かって、笑顔を見せる。

「イメージ通りで、嬉しい事だ」

倉真は、利知未の顔を見て、冴吏にも視線を向ける。

「いや、あの、」

「残念ながら、モデルはこちらの女性です」

困っている倉真を見て、冴吏が言う。編集長は利知未を見て、笑い出した。

「冗談は止してくれ。どうして、この上品そうな女性が隆史のモデルになるんだ？」

豪快に笑い飛ばしてしまった。冴吏は利知未をチラリと見て、肩を竦めてみせた。

「後で、ステージに上がって貰いたい。宜しく」

笑顔で倉真の肩をポンポンと叩いて、誰かに呼ばれて行ってしまった。

「……お前、そう言うつもりで連れて来たのか？」

編集長に対して、何も言い返す余裕が無かった。倉真に言われて、利知未が冴吏を軽く睨んだ。

「そう言うつもりは、無かったんだけど。……冴吏？」

「挨拶はして貰いたいって、今日になって言い出されたのよね」
笑いながら招待客の相手をしている、編集長を眺めやる。

「あの通り、豪快でワンマンな人だから。断る事も出来なかった

のよ」

そう言つて、少し困つたような笑顔を見せた。

「ちよつと、信頼の置ける人にも相談して見ようか？　ついて来て」

冴吏に連れられて、今度は冴吏の担当編集者に紹介された。

「君が、隆史のモデルかい？」

やはり、倉真を見てそう聞いた。

「違ふんです。隣の女性が、モデルなんです」

こちらは反応が違った。目を丸くしている。

冴吏とは、デビュー前から二人三脚で頑張つて来たパートナーだ。雲の上から眺めている様な長とは違つて、作家の言葉に対して、確りと聞く耳を持つてくれている。

「編集長には？」

「到着したら直ぐに連れて来て欲しいと言われていたので、チラリと」

「……信じなかつただろう？」

「ええ」

「……そうだろうな。さて、どうするか？」

「何か、ご都合の悪い事でもあるのですか？」

利知未が丁寧な口調で尋ねる。その言葉に、一瞬、両眉を上げて言つた。

「話される雰囲気も、イメージと随分、違ふんですね」

上品な女性には、それなりの対応も出来る紳士らしかった。

「話題性の問題です。実は、ドラマ化の話も出ておりまして」
ここだけの話ですが、と付け足した。

「対談の予定が、あると言つのは？」

「……そのようですね」

少し考えて、利知未が答えた。

「余り乗り気では無さそうですね。……無理も無い。今のお仕事の都合も有るのでしょうから。隆史のモデルを公表して、ドラマのオーディションの特別審査員をお願いしようと、考えているようです。まだ、企画の前段階という所ですが」

それは、確かに話題には上るかも知れない。

「逃げるか？」

倉真の言葉に、利知未は軽く笑ってしまった。

「そうしようか？」

二人の雰囲気を見て、担当編集者が聞く。

「お二人は？」

「この二人は、婚約者同士です」

冴吏が、代わりに答えてくれた。彼は納得した。

「冗談抜きで、逃げた方が良いかも知れませんか」

「つこいですよ」

……彼は、し

編集長の顔を思い出して、そう囁いた。

相談している内に、パーティーが始まってしまった。

「ただ、ステージには、上がって貰う事になってしまいましたが」

その後の対談と特別審査員に関しては考えて見るからと、彼は言うてくれた。彼の立場では、この場で二人を逃がす事も出来ない。

「前沢さんは、信用しても大丈夫だよ」

冴吏は、二人にそう言つてニコリと笑った。

「嘘を付いても仕方ない、その後が面倒になる。瀬川さん、済み

ませんが後で紹介されたら、出て頂けますか？」

小さく溜息を付いて、利知未は頷いた。

「前沢さんを、信用させて頂きます。イメージ通りの倉真が出て行ったら、騒ぎが大きくなりそうだし」

「そうですね。お祭り騒ぎに拍車が掛かってしまいうでしょうから」

「俺は、どうしていれば良いんだ？」

「直ぐに逃げ出すから、先に車とコート、取りに行つてよ?」

「それが良い。まだ、時間があります。それまで、ゆつくりとパーティーを楽しんで行つて下さい。料理はお勧めです」

言われた通り、その時までは料理を堪能する事にした。

一時間ほどして、冴吏が近付いて来た。

「そろそろ呼ばれるから、館川さんはトイレに行く振りでもして、会場を出て。利知未は、私と一緒に来て」

頷き合つて、其々、別れて行つた。

冴吏と一緒にもう一度、前沢氏の元へ行き、挨拶を交わした。

「騒がれてしまつかも知れませんが。アフターフォローは、出来る限りします。宜しく願います」

「ご迷惑、お掛けします」

今の内に言つて置かなければ、この後で言葉を交わすのは、不可能だろう。

司会者が、パーティーを進行して行く。

「本日は皆様のご要望にお応えして、ゲストをお呼びしております」
作品の名前を上げ、隆史のモデルとなった……、と言いかけて、原稿を確認し直してしまった。女性の名前が書いてあったからだ。

作者である冴吏と目が合い、頷かれて、改めて紹介をした。

会場がざわめいた。招待客は、ほぼ全員、先ほど見かけた強面の青年、倉真の顔を思い出していた。ステージに冴吏と共に上がった利知未の姿を見て、更にざわめく。冴吏がマイクに向かった。

冴吏が挨拶をして、改めて利知未を紹介した。利知未は紹介に合わせて、キツチリと頭を下げて、毅然とした顔を上げて見せた。

「話が、違つじゃないか?」

「そう言われましても。今まで隆史のモデルが誰であるかは、全く触れておりませんでしたので」

囁き交わす声が聞こえる。 弁解しているのは、恐らく前沢だ。

利知未は、思い切り媚びる様な笑顔を見せてやった。

「お騒がせ致しまして、申し訳ございません。 自分がモデルにされていたと言うのは、私本人も、今まで存じておりませんでした。

仲田さんとは昔、下宿へお世話になっていた頃の店子仲間です。

驚きと共に、光栄に存じております。 これからも、妹分として仲良く過ごして来た彼女、仲田冴吏を、私も応援して行きたいと思っております」

喋りも雰囲気も、全くイメージと違う。 集まった者達全員が、

狐に摘まれた様な顔をしていた。

会場の中、唯一の味方である前沢は、驚きながらくすくすと笑ってしまった。

マイクを冴吏に返して、締めを促した。 利知未はステージを降りて、真っ直ぐに会場を出て行った。

あっけに取られていた客達は、つい、そのまま見送ってしまった。

「僕が頑張らなくても、対談と審査員の話は綺麗に流れてくれそうだ」

前沢はそう思い、ステージを降りて来た冴吏を、笑顔で迎えてやった。

話題の人に逃げられてしまったので、その後、冴吏と前沢は大変な思いをさせられる事になった。 利知未の代わりに、質問攻撃を受けてしまった。

編集長からも怒られてしまった。 けれど、嘘をついた訳ではない。

「昔と随分、変わってしまっていました。 私も驚いています」

冴吏はそう言っ、誤魔化しておいた。

その後も、本の売れ行きには心配した程の影響も無くて済んだ。

対談の話もお流れた。 対談については、前広告を打っていた段階でもなかったたので、傷は浅く済んだと言えるかも知れない。

帰りの車の中で、利知未は笑っていた。

「どうなる事かと、冷や冷やしたぜ」

倉真は気が抜けてしまった。

「ま、何事も無く、で、良いんじゃない？ 料理、美味しかったね」
「…そうだな」

気楽な利知未の雰囲気、倉真も釣られて笑顔を見せた。

冴吏からは、あの後、一度だけ連絡が入った。 その後の経過を報告してくれたのだった。

月末までには、後一週間を残す。 月が替われば、年も明ける。年明けには、元日から館川家への挨拶が待っている。

年末年始は、年明けに希望休暇を申し出てあった関係で、大晦日まで仕事が入っていた。 その代わり新年四日までは、のんびりと休めそうだ。

最後の一週間、普段と同じ生活をしながら、利知未は緊張していた。

倉真の家族に紹介されると言う事は、将来の舅、姑とも初顔合わせと言うことだ。 小姑・一美とは、倉真に内緒で仲良くなった。

偶に電話が掛かってくる。 倉真が出ると、一美は適当な話をして電話を切ってしまう。 利知未が出ると、女同士の長話が始まってしまう。

倉真が風呂に入っているタイミングや帰宅前の電話なら、名前も

平気で出すけれど、そうでない時は気を使う。

倉真は勝手に、あのパーティー以来、一度、連絡を寄越した冴吏か、別の友人が相手だろうと、気にも留めない。

倉真の勉強は、取り敢えず予定通りに進んでいた。漸く一通りの勉強を終え、最近はこれまでの復習に取り掛かっている。

少しだけ気が楽になって、利知未の緊張にも多少は気付く事が出来た。

二十八・二十九日は、利知未の年内最後の休日だ。倉真は二十

九日が仕事納めだった。晩酌をしながら、話をした。

「明日、明後日は遅出になるのか？」

「うん。だから、今夜はのんびり晩酌、出来そう」

「で、休む間もなく、か」

「……そうだね。ごめんね、今年は煮しめ作る暇、無さそうだよ」

「仕方ないだろ。実家の煮しめ、貰って来るか？」

「タッパでも、持ってくつもり？ それは無いでしょう」

利知未の事を思い遣って、成るべく構えずに行ける様にと、「冗談を言ってみた。その優しさに、利知未は笑顔を見せる。

「構えなくて良い。普段通りで居てくれれば、問題ない」

利知未の笑顔を見て、ほっとして倉真が言う。

「ありがと。……でも、どんな格好して行けばいいんだろう」

そこが悩み所だ。ベターなのは、ワンピースだろうか？

パンツスーツでも良いかも知れないけれど、そう言う席で座敷に上がる時にパンツルックと言うのも、違うかも知れない。

考えて、自分の持っている服を思い出してみた。

「この前のパーティーの時は、セクシー過ぎるよな」

倉真の言葉に、ビックリしてしまう。

「確かにアレもワンピースだけど、着て行けないよ」

「冗談だよ」

「だよ。良かったよ、冗談で」

「俺としては、あの眺め、気に入ってるんだけどな」

階段の下から覗き見てしまった角度が、今でも印象に残っている。

倉真のニヤケ顔に、利知未は呆れてしまう。けれど、緊張は中々、解れてはくれない。

『これからが、大事だから……』

利知未の雰囲気を感じて、倉真は利知未の肩へ掛けた手に、力を込めてくれた。その手の温かさに、利知未の心が少しずつ落ち着いて行く。

「……倉真。頼りに、してるからね？」

「任せておけ」

言い切ってくれた倉真が、本当に遅しく感じられた。

館川家への訪問は、もう、三日後に迫っていた。

二〇〇六年 十月九日（2008・4・20 改） 利知未シリーズ・番外3

研修医一年・九月から十二月 見つけてくれて、ありがとう 了

4 研修医一年・十二月（後書き）

利知未シリーズ番外3『見つけてくれて、ありがとう』に、お付き合い下さいまして、ありがとうございます。

漸く、ここまで来ました。取り敢えず一週間での更新、という事になったのでしょうか……？（- -;）

最後まででは、あと二つのお話があります。次回のタイトルは、『素敵な勘違い』となります。今月中に、ここまではお送りできれば良いのですが……。

諸所の事情に寄り、今月中に最後までアップは難しい感じです。五月の二週目中に最後の一つ、番外5『貴方は私の世界』を、上げられるように頑張りますので、また宜しくお願い致します。>（
|）<

また、検索キーワードに、「利知未シリーズ」と、入力しておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1253e/>

見つけてくれて、ありがとう（利知未シリーズ番外 3）

2010年10月9日20時52分発行